

---

# Legend of Girl ~少女の伝説~

玖龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Legend of Girl～少女の伝説

### 【ΖΠード】

Z3520Q

### 【作者名】

玖龍

### 【あらすじ】

砂漠のど真ん中にあるダングラジエ王国。

そこに今も語り継がれる伝説的女王は、即位した当時は8歳の少女だった！

とか言いつつ、最近成長しました（おい）14歳の女王が登場しました

でも性格は基本変わっていません。みなさん健在です（笑）  
新キャラも続々登場させる予定です（予定）

『ファンタジー』という分類にしていましたが、今になつてやつと  
そんな要素が1つもないことに気が付きました（笑）女王とその周  
囲にいる人物とのドタバタ劇です……

## 登場人物紹介

### 登場人物

アシュリーナ・カレン

ダングラジエ王国の13代目にして王国初の女王  
300年前の人物だが、今でも語り継がれるほどの傑物  
性格は、子供らしくお転婆で、小生意気だが、女王としての尊厳。  
威儀は持ち合わせ ている

アンドレア・カリム

アシュリーナの側近。勇猛な将軍として活躍。金軍の将軍  
小賢しいアシュリーナに手を焼いている  
年齢は王の即位当時は28歳だった  
性格は正義感が強く、仁を重んじる  
人望も厚い

タルカシ・ヘリナ

女官。アシュリーナの乳母

幼い彼女を心配する心優しい人物

ヨシュア・カズル

アンドレアと同じく、将軍。青軍の将軍。

長い黒髪に、黒瞳。

冷静沈着で、自ら言葉を発することは、必要最低限のことにつとめる  
しかし武力はアンドレアには劣らない

カイル・カズル

ヨシュアの双子の弟。兄と同様に将軍。赤軍の将軍

兄とは違い、陽気で、明るい性格で人を引き付ける  
外見は兄と同じ……ただし本人曰く目が違う（兄 細い、弟 大  
きい）

しかし、たいして変わらない

その他、副官・武官・大臣（要するに王宮内の人物）、  
敵キャラなどその他大勢

この物語は、300年前を舞台にして書きます

## 大臣よ、会議で寝る!ことなけれ

女王アシュリーナは大あくびをした。

女王である私を無視して話を進めていく大臣たち。この私をないがしろにする気か、このバカどもめ!! 8歳だからってバカにすんなよ!!

……出番がなくて退屈で退屈で仕方がない。

(寝るか)

ふとぐるりと円卓を見回すとあるものが目に入った。寝ている大臣が1人、2人、3人……つておい! 3分の1が我慢している私を差し置いて寝ているではないか!! 私だって眠いんだぞこんなにやろおー(怒)

アシュリーナはさつと立ち上がる。すると今まで喋っていた(……いや、自慢かな?)していた大臣が黙つた。顔が心なしか青い。なに、そんなに怯えることないじゃないか。それともやましいことでも喋つてたのかな? まあそれは置いといて……。

「そこの大臣! 寝るな!! 起きんか!」

睡眠中の大臣たちを一喝する。すると大臣たちが「はつ!」といふ感じで突然頭を上げ、「いや私は今までちゃんと会議に参加していたけど何か?」みたいな顔でアシュリーナを見つめる。よしよし、それで良い……ん!? まだ寝ている奴が一人。おいおい、いつまで寝てんだよ……気持ちよさそうによ……。

ここで許してやる……そんな生ぬるい慈悲など掛けてやらないうのがアシュリーナである。

隣に座っているアンドレアをつつぐ。

「あいつ誰?」

「はつ……外交のナフス大臣であります  
「ふうん。あいつが……か」

彼女は側に置いてあつた棒を取り、つかつかとナフス大臣の後ろへ歩み寄る。そして彼女の持てる限りの力を持つて背中を叩いた。部屋に「バシンッ！」と痛そうな音が響き、アンドレアが大きなため息をついた。

「痛つ！！誰だ、ワシを叩いたのは！…」

「私ですが何か？（ニコツと微笑む）」

「……へ、陛下！…」

「ナフス大臣、お疲れですの？仕事……大変そうですね」

8歳の少女らしく可愛いかつ慈悲深そうに言つ。心の中には敵意しか無いのだが……。

「い、いえ。全然ですとも！……はい、大丈夫です」

「無理をなさらないで。……今は大事な時期ですもんね」

「は、はい。隣国の動きが怪しくなっているから、諜問を出して探らせておりますが……」

「いえ。そのことでは無くて

「へ？」

アシュリーナの顔が意地悪そうに微笑む。

「確かに、最近第2夫人を迎えたとか。奥様の機嫌を取らなければならぬのでしょうか？大変ですね。そうしないと関係の悪化に繋がるから……。どうしてその女は夫の職の理解が出来ていないのでしょうか？夫は外交顧問のナフス大臣であるというのに……ね」

二タ二タした顔で彼を見下ろす。当のナフスは啞然として女王を見上げる。他の大臣たちも顔が真つ青だ。アンドレアにおいてはもう顔を背けてブツブツ言つている。

「あまり寝ていないのでしょう?でも安心して!今日はぐっすり眠れるようにしてあげるから……フフ」

アシュリーナは言葉もないナフサ大臣を嘲笑い、席に戻った。

「皆さん。ぐっすり眠たかつたら、遠慮しないで私に言つてね~(笑)」

そう言つて彼女は部屋を後にした。

「アシュリーナ様!!! 何て事を!!!」

会議から戻つたアンドレアが顔面蒼白でアシュリーナの元へやつて来る。それを見た、乳母のタルカシもやつて来る。

「あの様な場で何て事を!」

アシュリーナはうざつたそこにアンドレアを見つめる。タルカシは状況が分からずただオロオロとしている。

「何があつたのです、アンドレア将軍? アシュリーナ様が何か致しましたか?」

「何もしていないわよ。……ナフス大臣を叩き起こしたけど……」

「何ですつて!!!」

何ですつて、じゃないわよ。バカ大臣が会議中に寝ていることが何ですつてだし。アイツの頭の中は 会議く第2夫人との新婚生活かつ? そしたら私は 会議く部下いじり だつてんだよ……ついうか第1夫人どこ行つた?

「アシュリーナ様。何故そのようなことを?」

タルカシが泣きそうな顔で訊いてくる。

「何故つて私だつて退屈なのになんか、第2夫人との時間の方が大事なバカみたいな大臣をどうして起こしたらいけないのよ! ただ

のお仕置きよ。今日は私がこれ以上ないぐらい寝させてあげるのよ！

「とても親切じゃない！」

彼女は絶句していた。無理もないだろう。女王といえど、8歳の少女が大臣のことをバカ呼ばわりするだけではなく、叩き起こしたこと、「親切」だなんて……。

「もう少し自重していただけないでどうか？」  
何をだよ……。

「ああーもう良いわ。じゃあね。私は寝込んでくるわ」

「アシユリーナ様！！」

アシユリーナはダッシュで逃げて行った。

その日の夜、ナフス大臣の部屋からは悲鳴が聞こえたという。それを聞いた大臣たちは会議中に寝ないことを心の中で強く誓った。

大臣よ、会議で寝ることなかれ（後書き）

うーん、長いな（汗）

ナフス大臣、生きてますから安心してくださいw

女王陛下の勅令でないのに、大臣たちは書っています……ナフス大臣の一の舞を踏まないことを……

## 犬の怪（前書き）

アシュリーナ様は実はあるものが嫌いなんです……

大臣なんかより、とても可愛いものが……

それではどうぞ……

## 犬の怪

「なんだコイツ……」

太陽は今日も嫌というほど元気に活動して（いか暑いんだよ！ 静まれや！！）、王国の首都・ザリスのチビッ子どもにうるさくない奴なんていね、といつぐらり街中を走り回っている。街に活気が満ちている……。

しかし、アシュリーナは可愛らしい顔を大きくしかめていた。

「いやあ……なんだと訊かれましても……」

おずおずと神官が答える。彼らの目の前にあるものは……フサフサの毛にピンとたつた耳、スマートな顔。そして特徴的なしつぽ。つまり……

「犬、です」

「そんなこと言われんでも分かる！ 3歳のガキでも分かるわ！！ 私が訊いているのはそんな事ではない！！ 何故この日に限ってコイツが私の目の前に現れるのだ！！」

「んな日……今日は 太陽祭 という国を挙げての祭りの日。国民全員で恵みをもたらす太陽に感謝し、供物を捧げ一日中踊り、歌いこの日を楽しむのだ。最も、アシュリーナはうだるようになに暑い炎天下のなか感謝の気持ちなど持ち合わせてはいないのだが……。どちらかといふと「もうちょっとと雲頑張りなさいよ！！ 毎日晴れいや、嫌になっちゃう」と思つてゐるのだが。それはともかく、国の休日なので政務もしなくて良し。そこにおいては感謝している。

「うう、犬なんか」

彼女が犬を嫌っている……いや、『動物』と総称される生き物が嫌いなのだ。ただし例外として、馬と鷹など、戦に使用される動物がある。幼いころから慣れ親しんできた動物であり、かつこいいかららしい。

「おいアンドレア。槍持て」

「はつ……つて、はあーー!? 何故です!?!?」

「勿論決まつているであろう。こんな（自分が休める）最高の日に、王である私が大つ嫌いな犬に会わなければならないのだつ!?!?」

「いや……だからと言つて……殺す、となると」

「やかましい!! どうせ太陽に動物を捧げるのだ!-ここでこんな犬など殺してもいいでしょう!-!」

こうなると誰も逆らえない。根っからの動物嫌いの女王様だ。本当に殺さないと気が済まないらしい。

アンドレアは犬に、アシュリーナの非礼を謝りながら、渋々槍を手渡した。

アシュリーナは大きく槍を振りかぶる。下ろそうとした瞬間！

「くう～ん」

犬が命乞いをするかのように、キラキラの目でアシュリーナを見上げていた。

「う、うわあー!-!」

焦ったアシュリーナが手を滑らせ、槍を落としてしまった。やつてしまつた……誰もがそう思つたとき

「キヤンキヤン」

犬の鳴き声が！

よく見ると、槍は犬の胴体スレスレの所に落ちていた。そして槍の柄の側に青くなつて立つてアシュリーナの姿が……。  
さすがに犬も驚いたのか、キヤンキヤン吠えている。このまま立

ち去つてくれるとありがたいのだが……。

「……お、驚いたか。こ、このまま……ど、どこかに行つてくれ  
え」

アシュリーナが喘ぎながら、本当に向いの方を指さす。同じこ  
とを思つてゐるんだな……

犬は彼女が指さした方向をしばらくの間見つめていた。が、何を  
思つたか、アシュリーナの方向へ歩みより、彼女の足に顔を押し付  
け始めたのだ！

「――！」

アシュリーナはそのまま後退する。しかし犬もついてくる。

「い、嫌だ！！来るな！誰か……助けなさいよお！……助けて！  
！来ないでえ～」

彼女は全速力で駆け出した。一方で犬は追いかけつこと思つたの  
が、こちらも全速力で追いかけ始めた。

「アンドレア！！ヨシュア！！カイル！！……誰でもいいから追  
い払つてえ～」

3将軍は互いに顔を見合せた。神官たちもクスクス笑つてゐる。

「女王陛下は犬に懐かれている」

嫌だ！ついてくんna！……つてどうして誰も助けてくれないの  
よ！……もういいわ。職務怠慢で、減俸処分にしてやる！大臣も、  
神官も笑つてる……（怒）格下げするぞ、コラつ！

犬も犬でどうして追いかけてくるのよ！……あんたなんてこの国  
から出て行つたらいいのよ！犬を飼つてくれる人いるんじゃないの  
！？エジプトには犬の神様がいるらしいわ！……そこに行つてきなさ  
いよ！――

そこにやれやれ顔の、ヨシュア将軍がやってきて、犬をひょいと

捕まる。

「陛下。犬」ときで何を騒いでおられるのですか

「ヨ、ヨシュア将軍！よくやつたわ！！……そうだ！犬…殺すのは勘弁してやるから、外国へ行くのだ！！分かったか！！……その通りだ、將軍。部下に命じて、そいつを外国へ捨ててこい…！」

はあ…、と息を吐いて、わかりました、と言い彼は戻つて行つた。

「アシユリーナ様。気分は落ち着かれましたか？」

太陽祭 の儀式が終了し、宴の頃優しくタルカシが尋ねてきた。

「うん」

「それは良かつた。私は心配で心配で……」

その時、何かが起こつた。

「ワンワン！」

犬の鳴き声だ……しかも朝の。

「ひいい…！ヨ、ヨシュア…！ちゃんと捨てて来なかつたの…？」

「いや、そんなはずは……」

「で、でもほら…アレが……」

全てを言い終わる前に犬がアシユリーナの膝に乗つってきた。

「キヤアー…！」

アシユリーナの叫び声。女王の身に何か？と人が集まる。

「い、犬……！」

タルカシは問題の犬を見た。……足には砂がたくさん付いている。怪我もしている。

「アシユリーナ様、これを『覗く下さい』

そして彼女はそつと犬を持ち上げた。

「お分かりになりますか？この犬はあなた様に会つたためにここまで走つて來たのでございます」

「……捨てられた所から……？」

「おそらく。……この犬はあなた様を慕っているのです」

「……えつ、でもあんな事したのに……」

「そうでしょう。さあ」

そう言つて犬を差し出す。犬はしつぽを振つていた。

「……そうね。私は犬が嫌いだが、お前だけは特別に側に置いてやる！名は……ダルーシャにしよう！――意味は、『大地を駆ける者』だ！お前は私の元へ走つてきた。忠誠を尽くせよ！」

「ワン！！」

アシュリーナはダルーシャを抱きしめてやつた。

「一足先に誕生日のお祝いが天から届きましたね」

「ええ……つてええー！？もうそんな頃！？」

また盛大に顔をしかめる。そしてどこか寂しい目をした。……思

い出したのだろう、8歳の誕生日を。

「戴冠記念日と、誕生祭が間近に控えています」

「そうね……」

彼女は上の空だった。

そしてダルーシャをもう一度、強く抱きしめた。

## 犬の怪（後書き）

『犬の怪』……結構頑張りました

女王様の好きな動物リストにも、ダルーシャは追加されたことでしょう！

それにしても、最後のシーン。彼女の8歳の誕生日にはある悲劇が起きていたのです。

それはいずれ書くことにします

誕生の宴、そして女使者 『前編』（前書き）

今日はアシュリーナの誕生日です  
御年9歳です!!

諸外国の使節がぞくぞくやってきまわ  
……プレゼント付けて（笑）

## 誕生の宴、そして女使者 〈前編〉

「ダングラジ王、お誕生日おめでとうござります」

恭しく、使節たちは頭を下げる。

「ええ。ありがとうございます」

そういうつも通り9歳の少女らしく可愛らしげ声で答える。……心中では、おじさんたちに「なんでも9歳のガキに頭下げなければいけないのかよ！…！」って思ってるんでしょう、と思っているんだが……。

一国ずつ、お祝いの品……まあ本国の特産物を献上し出す。それぞれ最高級の品を携えているらしい。なんせ、アシコリーナが9歳であれば一国の王に変わらず、ここに彼女に見初められれば貿易国として……あることは同盟国として条約を結べるかもしないからだ。とにかくダングラジ王国はこの辺一帯で最大の国なのだ。

「こちらは、海で取れた美しい真珠です。我が国でも珍しい色、大きさで陛下によくお似合いだとお見受けします」

「こちらは我が国に自生する、バラの花から作った香水にござります」

……真珠はともかく、香水なんて使わねーよ（呆）

「陛下、お誕生日おめでとうござります。どうぞお入りを……」

珍しく女性の使者だった。彼女が献上するものは……美しく、しかしシンプルに装飾された一本の白い剣だった。丁度9歳になつたことだし、護身のために剣術でも習うか、と思っていたところだ。

アンタ、気が利くな。

しかし、アシュリーナはその使者の顔を見て、ゾクッ、とした。端正に整った顔、透けるほど白い顔、薄い唇……そして凍り付くような碧い目……。どこかで見たことがある。たった一度だけどちらとしか見ていないような気がするがが、確かにどこかで見たはずだが……

「……陛下……？」

「あ、ああ失礼致しました。どうもありがとうございます。丁度剣が欲しかったところなんです」

「それはそれは良かつた。剣は少しでも使えると役に立ちますから」

「え、ええ」

今までに品を献上した国の使者たちがザワザワとなる。なんか怪しい雰囲気だからだ。

「あの者はどこの国の使者だ！？」

「あの服装にあの顔……北のムスリでは！？」

「すると女王はムスリと同盟を……？」

おいでおこお前らそれしか考えること無いんかよ……。

「では」

「ええ、どうぞ」ゆるりと

使者は立ち上がり、礼をした。……丁度、アシュリーナの耳元に

口がくるように……

「いつか私を越えるぐらいの腕前になつてよ

ぼそつと言われたが、確実に聞こえた……。なんなんだ、あいつは……

「あ、あの……」

声を掛けようとしたが、彼女は微笑んでその場を後にした。

その後の使者の話など全部聞き流してやつた。いきなり訊いても  
いないのに、持ってきた品の説明、自国の自慢、ひどい奴は同盟を  
促すような話をしてきた。

アシュリーナはそれどころではなかったのだ。先ほどの女使者の  
最後の言葉、

「いつか私を越えるぐらいいの腕前になつてよ  
それが頭の中でグルグル回つている。」

（どういう事……？ 私を越える……？）

終始それに気を取られうわの空で、いつの間にか娛樂の時間……  
宴の2分の1が終わっていた。

「アシュリーナ様。どうぞ」

さすがに彼女は酒は飲めないので、代わりにジュークを侍女は持  
つてきた。

「うん。ありがと……おいしいわ、ぐりしたのよ、これ」

「あの方が宴が始まる前にくださいましたわ」

侍女の指さす方向には……他の国の使者と打ち解けあう、あの女  
使者の姿があつた。

「……え、ホント……？」

「ええ、何でもムスリの特産品であるクラという果物から作られ  
たらしいですよ。甘くておいしいから、女王の口にも合つだらうつ  
て」

アシュリーナは顔面が真っ青になってしまった。

そして、彼女と目が合つた。……薄い唇の端が微かに持ち上がり  
たような気がした。

誕生の宴、そして女使者 『前編』（後書き）

『後編』に続きます

お楽しみに！

宴もヒーヒーヒ後半>.....

あの使者の真意とは！？

## 誕生の宴、そして女使者へ後編》

アシュリーナは彼女から目を離さなかつた。いや、離せなかつた。あの凍りつくような、濃く深い碧い目……何もかもを見透かされているよな気がした。本能的に離そうとしても離れなかつた。離したら嫌なことが起こりそつ……そんな不吉な予感が9歳を向かえたばかりの彼女の頭を駆け抜けて行つた。

「……アシュリーナ様……？」  
侍女の声で我に返つた。

「まあ、汗びっしょりですわ。どうかなさいましたか？」

「いえ、何でもないの……。ちょっとと気分が悪くなつただけ……でも、もう大丈夫よ。あ、アンドレアを呼んでちょうだい」

「本当に大丈夫ですか？アシュリーナ様はまだ幼くていらっしゃるから、無理しなくてもいいんですよ？」

「うん、大丈夫だから……しんどかつたら声掛けるわ」

「かしこまりました」

そう言つて彼女は天幕から出て行つた。

そしてあの使者の顔をちらつと見る……もつすでに他国との使者との話に花を咲かせていた。何事も無かつたかのように……。

先ほどの5秒間は実に長いものだつた。5秒など大したことは無いのだが、すごく長く感じた。彼女の目を見ていると、蛇に睨まれた蛙の気持ちがよくわかつた。

「アシュリーナ様お呼びですか？」

丁度アンドレアがやって來た。

「ええ、あなたに頼み事があるの」

「頼み事……ですか」

「そう。あのムスリ使者の素性を調べてちょうだい」

「何故ですか」

「あの方をどこかで見た気がする……とても嫌な予感がするの」「さようですか。では部下を使ってさっそく調べてみましょう」アンデレアは足早に出て行き、入り口に控えていた部下へその顔を伝えた。これであれが何者なのかわかるだらう。

今の時間、歌女が、樂士の樂器に合わせて祝いの歌……要するに眠たい歌を歌い、真ん中で踊り子が舞いを踊っていた。くるくるターンする。見ているだけで目が回りそうな……。それでも彼女達は笑顔を消さずに楽しそうに伸びやかに踊つている。……退屈だな……寝ちゃおうかなw

そう思つてあぐびをしてこむと、あのムスリの一団がアシューリーナの前へやって来た。

「陛下。私たちは是非、貴女様に見せたいものがあります。……

我が國の 剣の舞 です」

「剣の……舞？」

「ええ。我が国はお祝いの日には、 剣の舞 を踊るのです。そのための踊り子もいるのですよ」

「へえ……って……じゃなくて、ところは皆わたくは……その踊り子……?」

「そうです」

「じ、じゃあ見せてもらおうかな」

「ありがとき光栄」

そう言つて彼女達は羽織を脱いだ。その下からアラビアンパンツとトップス……それぞれ宝石の飾りをあしらえていた。そして豪奢

な剣を一人一人手に持つた。

自然に踊り子たちが引いて、彼女達が前へ出る。よく見ると頭にも同様の飾りがあった。

会場がシーンとなる。

「では」

そう言つと、何の合図も無しに踊り始めた……一人一人が無駄のない動き、そして息を合わせた圧巻の踊り。

真ん中の2人が剣と剣をぶつかり合わせ、その度に「カシャーン、カシャーン」と、金属特有の音が鳴り響く。その周りで5人が彼女達を取り囲むように剣を持って踊る。動く度に飾りが上下に揺れ動く。光が反射してすごく綺麗だ。

「……綺麗……」

「見事なもんだな！！」

「うちもあの方達を我が国に呼ぶか！」

賞賛の声が響く。アシュリーナも例外ではなかつた。

その声を受け、踊りにもますます拍車がかかる。あの使者を中心には6人が組になって、剣を交えだす。その真ん中で彼女が舞つている。ひらひらとした……砂漠はない優美さがあつた。

そして、ついに彼女だけを残して6人が回りに頽れる。残つた彼女は天に剣を突き出す。

わあー！！と歓声があがる。踊り子たちもみんな笑顔だ。アシユリーナも先ほどのことは忘れて、共に喜んでいた。

宴も終わり、もう寝るだけとなつた。アシュリーナはあの出来事全てを忘れすぐに寝入つてしまつた。……アンドレア（とその部下達）は彼女の命に従い、ムスリの使者の素性を急いで調べているといつのに。

他の使者たちも、1週間後に控えた、戴冠記念日のために宮殿へ

泊まつてゐる。宴の熱氣はすでにここにありや……とこゝう感じだつた。

\*

\*

\*

「女王は我々のことにはまだ気がついていない」

「今ここで殺すのが良いかと……」

「いや、また」

一斉にその場にいる人間達は黙つた。

「まあ、あれの娘といつからどんなお嬢様かと思ったら、かなりキレるぞ」

「では、用心に越したことではないと?しかし彼女は護身する術を知りません」

「そうです。例え近衛兵がいたとしても、エリ様と我々では容易に切り抜けれましょう」

「現に、彼らも今日は酒を飲んでいるはずです」

はあー、つとエリと呼ばれた女がため息をつく。

「あの娘は我々の存在に勘づいている。部下に我々のことを調べるよう命を出していた」

彼女らはザワザワする……任務に失敗は許されないので。ましてや彼女らの素性など知られては組織もろとも崩れてしまう。

「まあ、落ち着け……私に策がある」

本当にですか!と声が上がる。そして耳打ちしていく。

聞いた彼女らはニヤッと笑う。

「この国も終わりだな……」

密かな嘲笑が砂漠の夜に響いては消えていった。

## 誕生の宴、そして女使者へ後編』（後書き）

「これで」この章は終わりです。……って特に名前は決めていないですけどね

次からは 戴冠記念 編が始まります  
アシコリーナの戴冠1周年を記念した式典です  
是非お楽しみに

## 戴冠記念……めんくわくじいな（前書き）

無事誕生の宴を終え、9歳になったアシュワーナ。

次は戴冠記念口までのお話です

## 戴冠記念……めんべいせいな

「はあー……」

女王の部屋からわざわざらしい溜め息が聞こえる。……今日は戴冠記念日の祭まで、あと2日といつ日である。着々と準備は進み、賓客もぞろぞろ入国している（誕生の宴に来た使者たちの何人かは、今も主の到着を待っている）。

しかし主役のアシュリーナは気が進まない様子である。従者の一人最大の犠牲者はアンドレアだが——顔を見る度に「めんどくさあー、中止にしてえー」と愚痴……ではなくワガママを言つてゐる始末である。その度に宥めてはいるものの、さすがに5日前から言われ続ける自分たちの身にもなつてほしいのだが……と、密かに思つてゐる。

今日も彼女は部屋から出てこない。今日の近衛部隊はカイル将軍率いる青軍だ。声を掛けるとあの調子なので、掛けづらい上に、部屋に入るこすらままならない……愚痴の嵐を聞くはめになる恐怖に怯えて。

「陛下……生きてますかねえ~」

こんな事を彼女の部屋の前でこぼした兵士がいる。すると、中から細い腕が、にゅーっと伸びて兵士を捕まえた。そしてそのまま彼は引きずり込まれ、主の元へ帰ったのはそれから3時間後だ。友人もギヨシとするほど、青い顔で……

「い、今すぐ……記念日の……祭を……ち、中止する……べきです」

やつれた兵士が言つた。

「何言つてんだ、トゥール。そんなこと無理に決まつてんだろつ！」

友人に諭される。するとそれを聞いた瞬間、

「止めてくれえーーーお願いだーーーおねがいだよーーー俺が

備考

そう思つと倒れてしまつた……

こんな話があった。因みに事実らしい。

そんなところに、ダルーシャがやつてきた。彼は躊躇無く、アシ

二十九  
力の部屋へひいて行った

ああ！ おい！！ 外ハ一 洋ハ一 全ハ一 たら……】  
そこ制止が入る。

「大丈夫だ！！俺

大丈夫か、俺らが物种になる。」「物种にならぬでモリ

今日の近衛兵は運が良かつた。

אנו נאנו נאנו

かわいい足音をたて、ダルーシャがアシュリーナの部屋へ入つて行つた。

「！！！何者っ！……なんだ、ダルーシャか…………」  
アシュリーナが咄嗟に手に握った槍を下ろす。

「わんわん」

長い尻尾を振りながらダルーシャが近づいてくる。……それを見て飼い主は引き下がる。

いくらダルーシャは自分の相棒だとしても、犬は生まれつき苦手

なので、まだ恐怖は残る。……それでも、『ぐつとつばを飲み込みダルーシャを待つ。……数秒後、彼は彼女の手元までやってきて、撫でてくれる手に頭を委ねた。

「い、いいところに来たな

引きつった笑みを浮かべる、アシュリーナ。

「わっ！」

ダルーシャが彼女を押し倒した。そして驚いた彼女の顔を舐めた。

「く、くすぐったい！……いうか汚い！！止めんか、こらつつ！」

！

彼女はダルーシャを引き剥がす。彼は尻尾を振りながら、？マークいっぱいの顔で彼女を見下ろす。

「ふふつ。近頃の兵はつまらん。女王のワガママさえも聞いてくれない……。そんなんで妻や子供のワガママが聞けると思つてんのか？」

「わんわん！」

「よしよし、お前は相槌を打つのがうまいなあ

尻尾を盛大に振る。

そして、アシュリーナは昔を思い出した。

よくワガママを聞いてくれた、優しかった父と母を……しかし今彼らはここにいない。アシュリーナがどんなに泣き叫んでも、もう戻つてこない……遠い遠いところにいるらしい。

「父さんと母さん、どうしているかな……  
ぼそっと呟く。

昔、母は遊びを教えてくれた。父は最高の教育を施してくれた。  
「誰からも愛される王になるのよ」

最期の瞬間、笑顔で母はそう言った。それは生前2人が口癖にしていた。

勿論、幼いアシュリーナは父と母と幸せになれると言じていた。

会いたいな……

そう、呟いた。

戴冠記念……めんくわいな（後書き）

次回は外伝です（笑）

## ムスコの影（前書き）

明日……戴冠式です（泣）

残り1日の動きに注目です

## ムスリの影

アンドレアはその日、アシュリーナの部屋へ向かっていた。彼の部屋はアシュリーナの部屋までとことん遠い。部屋数はたつたの3つだが、間隔がかなり広い……戦には慣れてもこれには慣れない。アシュリーナに言わせると、

「アンドレアは男だから。側近と言つても私は女であんたは男……隣の部屋なんていや」

ど、あっせり切り捨てられた。因みに彼女の隣の部屋は、侍女の部屋その1とその2である。そこまで俺が嫌いかーーーといつか「いや」ってなんだよ「いや」つて……。

やつとたゞり着いた……長旅だつた。頑張つた、俺（笑）

そうニヤニヤしていると、近衛兵に不審な目で見られた……が、気にならない。気になるのはアシュリーナが部屋から出ていないと言われたとき。明日戴冠記念祭なんですがどーーーびつするんですけどーーー！賓客はほとんど来たよ、どうするんだよーーー！……そう言えば1つ王が来ていない国があるな。

そう思つた瞬間、彼はアシュリーナの部屋にむつて来た目的を思い出した。

「アシュリーナ様、アンドレアです。頼まれ事を持つてきました」  
「う言つとすぐ、入れ、といついかにも不機嫌そうな返答が帰つて來た……どんだけ嫌なんだよ、戴冠記念祭。

はあーっと息をはくと、失礼しますと言つてアンドレアは中に入つた。……その後近衛兵たちはアシュリーナの癪癩を恐れ、入り口からそろお、つと遠のいた。

やはり思つた通り膨れつ面でベッドに腰かけていた……しかし足元にダルーシャを従えていた。

安心してアンドレアは話し始める。

「アシュリーナ様、例の女たちの件ですが……」

「で? どうだつた?」

「それが……あの使者の名前しか分からず……」

「いいから言いなさい」

「はつ……」

そう言つと報告を始めた。

——女の名前はサルーシュ。ムスリの剣豪で、いくつかの大會にも出場して好成績を残している。男でも敵わない奴はたくさんいるらしい。近々、女將軍として迎えられるらしい。

これしか分からなかつた、と言つとアシュリーナは満足そうに頷いた……だけだつたが。

「まあいいでしょ……サルーシュ、ねえ……」

「それが何か……?」

「もしかしたら偽名かも」

「でも、偽名で將軍に迎えられるはずがありません」

「そう……そこが問題なのよ……王宮の人物が彼女の顔をいかに知らないか……よね」

「しかし大会で好成績を残し、違つた人物として名を轟かせることは可能です」

「それで王に見込まれた、っていう可能性は?」

他の声がして、二人が振り返るとそこにヨシュアとカイルが立つ

ていた。ヨシュアはいつも通り無表情、カイルは「…………いやニヤニヤしていた。

「抜けがけなんてズルいですよ～。アンドレア将軍が側近だとしても僕達だって將軍なんだ！！役に立てるって、女王様（笑）」  
「…………寧にベースまでしてくる。いらんつて。

「ゴメン……でも私は

「私だって亡き先王の命でムスリについて調べていたところです」「ヨシュアが重ねてくる。

「それってどういう意味よ」

「陛下はムスリの者に殺されたんです。そのとき、彼女らは『ムスリがお前たちのせいで滅んだ』と言ったので、どういうことかと調査を続けていたんです」

アシュリーナは「ぐつ」と、つばを飲む。

「で、どうだったのよ」

「…………確かにムスリは荒廃していました。昔のよつた豊かな姿は失われていました……今の王はアザーンという男で贅の限りを尽くしています……常軌を逸していますよ。しかしムスリが滅んだのは我々のせいではありませんでした。多分我々に濡れ衣を着せようとした国があると思います」

「…………で父さんと母さんは勘違いで殺されたと……？ふざけないでほしいわ」

アシュリーナが吐き捨てる。

「あいつらは許さない。私が復讐するとあの口誓つたの……私がね。…………でもこれで対象が増えたわね……ヨシュアは引き続きムスリを滅ぼした国を調べなさい」

「御意」

「アンドレアは私に剣を教えなさい……あの女が……サルーシュが私に剣をくれたの」

そう言つとおもむろに剣を取り出す。無駄のない装飾の施された、

白い剣。

「わかりました……しかし何故？」

「分からぬの？ わたし言つたでしょ？ 私が復讐するの、サルーシェに

えつ、と声があがる。

「二人の話は繋がるわ……それに彼女私に、私を越えろって言ったのよ……犯人かそれに親しい人物かに決まっているじゃない」「なるほど……分かりました、お教えしましょう」

「じゃあ僕は？」

「そう言つたのはカイルだつた。

「みんな仕事をもらつてているのに、僕だけないと不公平だろつ！」

「……………そうね……じゃあ私の護衛」

「かしこまりました……ってみんなそうじやん！！」

カイルが不服そうに言つ。

「はいはい。あなたも私に剣を教えない。いろんな流派を知ることとは大事だわ」

「やつた～」

子供のように喜ぶ。兄のヨシュアが十分細い刃をさりげなく細めた。

「……………そろそろ出ますか」

「アシユリーナ様、何故今頃？」

「迂闊に外に出ると危ない……………そう言つたのはお前だぞ」

「……………そうでしたね」

「今日は護衛が3人もいる。今日でなくていつ出るんだ？」

そう言つとニッコリ微笑んだ……やはり無邪気な笑顔が1番だ。

女王が出てきて、近衛兵がビックリしていた。

## ムスリの影（後書き）

あと一日

ムスリの影、女王の決意、戴冠記念祭

どうなるのでしょうか？

## 戴冠記念祭　＝1日目午前？＝（前書き）

今日はアシュリーナの戴冠記念祭です

これは1週間行われる予定です。

今田は、一田田の牛舎中の王座の様子です

## 戴冠記念祭　＝1日目午前？＝

今日はダングラジエ13代目の王、アシュリーナの戴冠記念祭である。国内で済ませる記念祭とは違い、今回は即位1周年といふことで、諸外国の王たちを呼んだ、大規模な祭典である。因みに、大規模な記念祭は王の即位1周年、5周年、10周年……といつぶつにきりのいい時にするのが通例である。

国は若い……いや、幼い王の即位を祝つて賑わっている。町は活気づき、国民は神に供物を捧げたり、王に一日会おうと宮殿に押し掛けたり大騒ぎだ。……といつても祭が始まるのは、夜の主神オリオンが空に輝く頃であり、今、宮殿は準備で大忙しなのだから門番にしたらしい迷惑なのだが。

当然、祭が始まるのは夜なので、アシュリーナはいつもの王らしくない格好で大広間にいた。そんな格好でうろちょろしている彼女を見て、アンドレアはため息をついた。

「アシュリーナ様……今日はいくらなんでもその格好はお止めください」

「なんだよ！夕方準備したらしいじゃない」

「……今日は私たちだけではないのですよー？他の国の王たちがいらしているのに……アシュリーナ様の格好を見たらどう思いになるでしょうね？」

「うるさい奴だなあ……わかつたよ、ダングラジエの面子にかけて着替えてきますよ」

そう言つてスタッフ部屋へ帰つて行つた。

暫くして帰つてきたアシュリーナは先ほどとは見違えるような格好をしていた。庶民が着るような、綿の貫頭衣をベルトで止めただ

けといつ質素な服ではなく、淡い桃色をした綿の薄布をまとひ、いかにも王らしい格好だつた。しかしよく見ると下の服はあまり変わつていないような……

「悪いか……声がダダ漏れだぞ。いくらなんでもまだ正装しなくていいだろう?」

「そうですかね……まあいいでしょ?」

アンドレアは再びため息をついた。

「今日サルーシュにカマかけてみるわ」

「へえ……どうで?」

「もちろん、出合つたときだ!—彼女ならもつれひそり来るんじやないか?」

「なんでそんなことがわかるんですか?」

「……勘。まあ、つまつ出合つたときにあるんだよー。」

それって答えになつてないよね(笑)

そう思ひと自然に笑みがこぼれた。私はアシュリーナ様についてけばいいんだな……そう思つとなぜか安心した。

「姫さん、おはよー」

そう声をかけたのはカイルだつた(後ろに顔をひそめる兄のヨシュアが……)

「ああ、おはよー」

こつこつとアシュリーナは応える。

「わしき部屋に兵士を配置に行つたらもうこなくてやあー、ベッタクリしたよー!—」

「まあ、今日ぐらいは誰よりも早くここにこないといけないしな賓客に先に来させたら悪いでしょ」

「そうだねー……でもこんな早く来てなにするの?」

「本でも読もうかと思つて……ほら、これもう少しなんだ」

そう言つと、分厚い本を取り出した……まだ見たところ新しいものだから、部屋にこもつて何しているのかと思つたらこれを読んでいたのか!—とアンドレアは思わずえるをえなかつた。

アシュリーナがカイルと本について語り合つてゐるところで、急に門番が騒ぎ始めた。

「何事だ?」

アシュリーナが立ち上がるのとする。

「陛下大変です!」

そう言つて2人の兵士が走り寄つて來た。

「何事か?」

「突然何者かが襲つてきてえ、私たちがあしやきゅううにい……呂律が回つてなくて聞き取りにくい言葉を言いながらゆらゆらと

2人は立ち上がつた。そして、腰に差していた短剣を抜くとアシュリーナ目がけてダッシュしてきました。

「!—!

その場にいた3将軍も突然なことに驚いて反応が思わず鈍つてしまつた。しかし、1人は取り押さえることができた。が……

「アシュリーナ様!—危ないつ!—!」

どすつ、という鈍い音が聞こえた。彼らの顔から血の氣が引いた。自分たちの目の前でまたもや王が死ぬなんて……

しかし、臣下の心配をよそにアシュリーナはイライラしながら立ち上がつた……手に短剣の刺さつた分厚い本を持つて……

「おまえらあー、いい度胸してるなあ……おかげで本が読めなくなつたじやないか……敵襲に見せかけての暗殺ならもうちょっとマシなの考えてこいつ……つちの兵に短剣使いなんていないんだよ!—!

怒りにワナワナ震えているのがわかる……生きてて良かったあ……

しかし問題の兵士は焦燥な合わない目で虚を見つめている。まるで彼女の怒り声が聞こえていないようだ。

「どーしてくれるんだよ！！そこへなおれえ～説教だ説教！！」  
「うアシユーリーナが怒鳴り散らしていると、ふつ、と兵士の体が  
ずり落ちた……背中から血飛沫を吹き出しながら。

頽れた兵士の後ろから顔をのぞかせたのは……サルーシュだつた。

「陛下……大丈夫ですか？何者かに襲われていたようですけど」「…………おはようござこます…………すみません、朝からこんな見苦しいところをお見せして」

「いえいえ、陛下が無事なら何よりです」

「まさか……あなたがこれを？」

「ええ」

兵士は上半身に何かしらの防御具をつけることになつていて、この暗殺者たちはこの国の兵士の格好をしているので彼らも防御具をつけている。しかし女の手でいとも簡単に剣で打ち壊してしまった。……彼女が剣豪であることにほびつやら間違いではなによつだ。

「お助けいただきありがとうございました……」

「大丈夫です……陛下に挨拶に部屋へ行つたところ、貴女がいなり、もう出て行つたと言われたのでびっくりしました」

「ええ……今日だけですよ」

まあ、とサルーシュは微笑んだ……しかし目は笑っていなかつた。

「ムスリの王様はもう到着で？」

唐突にアシユーリーナが口にした途端、彼女の目は少し大きくなつ

た。が、すぐいつもの冷徹な顔に戻った。

「いえ……主上は体調が悪いみたいなので、来られないとのこと  
です……申し訳ございません」

「そうですか……この御恩の感謝をお伝えしようと思いましたの  
に……どうぞお大事にとお伝えください」

「ええ、そうしましょ。」

声に若干の焦りを見せていた……なにかを隠している。  
アシュリーナが不自然に思つていると、また突然奇声や悲鳴が彼  
女の部屋の方から聞こえてきた。

まつたく今日は騒がしい

戴冠記念祭　＝1日目午前？＝（後書き）

?に続きます……

サルーシュとは一体何者なんでしょう？？？

そして悲鳴の正体とは？？

次回は飄々としたカイルが……

お楽しみです

アシュリーナの部屋の方向から、悲鳴が聞こえる。

「騒がしい！何事だ？」

アシュリーナがうつとおしそうに叫ぶ。

「陛下……陛下の部屋についていた衛兵が何者かに襲われて……

全滅しました」

報告に来た隊長らしき人物が躊躇い、喘ぎながら言つた。

「……なんだってえーーー……って今日は祝いの日なのに死人が多いな」

彼女はすぐさま立ち上がり、報告に来た隊長についていく。その後に今日のついていた衛兵たちを受け持つ、カイルと他の将軍たちが続く。その後ろからサルーシェが続く……のかと思ひきや、なぜかついてこなかつた。アシュリーナが振り返ると、彼女は不敵な笑みを浮かべていた……いくら兵士とは言え、人が死んでいるのにコイツはなんなんだ？

部屋の前に到着すると、兵士の死体が重なり合っていた。地面を血で染めている。こんな風景を見て気持ちがいいはずがない。アシュリーナは顔をしかめる。

「……何があつたんだ」

アンドレアは思わず呟く。死体と化した兵士たちの顔はどれも恐怖で歪んでいる。この国の兵士はどんな下級兵でも難関を突破して兵士になる。誰もかもが屈強な兵士であり、そう簡単に倒せる者たちではない。そんな彼らの顔を歪ませ、血の海に沈めてしまうような人物がこの近くにいる……。そう思つと歴戦の將軍でも背筋がゾクッとした。

しかし彼以上に呆然としているのが、カイルだった。

部下を

自分の知らないところで、得体の知れない何者かに殺されたのだ。彼は正気でいられなかつた。なんせ、彼は飄々とした明るい性格とは裏腹に、その戦い様といつたら並みの人間ではないほど強いためか部下からも信頼は厚く、そんな彼らにカイル自身も全幅の信頼を寄せている。

そんな、何よりも大切な自分の部下がいつも無残に殺されてしまつたのだ。ワナワナ震えていた……その田に怒りを宿して。

「カイル将軍……！」

アシュリーナの部屋から男の声が聞こえた。少し経つた後田に涙をいっぱいに溜めた若い兵士が現れた。

「カイル将軍……陛下もお来てくださつてえ……すみませえーん」  
彼は幼い子供のように泣き出してしまつた。

「怖かつたです……みんながあいつらに斬り殺されていつて……僕は何とか陛下の部屋に逃げ込んで……でも田の前でみんなが倒れていくのを見て……ことしかできなくて……ホントに怖かつたです」

「そうか……もう泣くな……よく頑張ったな。お前だけでも生きててくれて良かつたよ」

「将軍……」

彼はカイルの言葉にまた泣き出した。

「どうひでその　あいつら　とは何者だ？」

アシュリーナが言い放つ。すると泣いていた兵士がビクッと身動きする。アシュリーナは彼の田の前にしゃがみこむ。

「あなたは何を見たの？　あいつら　って何？教えてくれないかしら……私はいくらでも待つから」

そう優しく語りかける。すると兵士の方もおもむろに話し始める。

「……真っ黒な人影が見えたんで何事かと思つたんです……グラさんが見に行つたら……いきなり斬りつけられて！！何人かの先輩が駆けつけていくと、この国の兵士の格好をした人たちが5人ぐらいいっこを乗り越えて入つて来たんです！！彼らは正氣を失つているようですぐに倒せました……。安堵していたところに第2波が訪れたんですよ！！」

聞くところによると、それは黒い布を頭から被つた女3人で手慣れた様子で衛兵たちを斬り殺していつたそうだ。顔はよく見えなかつたらしい。それを見て彼はアシュリーナの部屋へ逃れ、そのまま見落とされて今に至るそうだ。

「あいつらだ……1年前は父さんと母さんを……今日はカイルの兵士たちを……！」

アシュリーナの目にも怒りが宿る。アンドレアが兵士に尋ねる。

「襲撃がある前に誰かアシュリーナ様を訪ねて来なかつたか？」

「……そういえば、女性の方がいらしていましたよ……すごく綺麗な顔をしていましたけど、目つきが鋭い……」

「サルーシエだ……」

アシュリーナが呟く。……彼女の中では彼女らが犯人であると確信したようだ。

「次期将軍をこんな祝賀会に使者として送るわけがない。ましてや女7人だ。私がムスリの王でもそんな真似はしない……こんな砂漠に女の身で無事に来れるはずがない。……あいつらはムスリの王に従つて行動しているわけではない……なにか別なモノに所属しているはず……」

アシュリーナが恐ろしく冷静に考える。深々と眉間に縦皺を刻んで……。

「あの女へ……サルーシュへの敵討ちはアシュリーナ様、貴女に委ねます……姫さんが1年も前から願つてきただことだから……だけど」

カイルが突然口を開いた。

「その他の6人には私が制裁を加えます……部下の仇を討ちます！僕に……私にそれをお許しください……そうじゃないと……死んでいったあいつらが浮かばれない……！」

涙しながらカイルが訴える。それをヨシュアが見守る。……信頼を置いてくれた部下。彼自身も部下を大切にしていた。お互いがお互いを信頼していた。町で家族が、恋人が、そして将来が彼らを待つていたはずなのに……それを一瞬の出来事ですべてを奪われた。家族に会える機会も、昇進する夢も、何もかもが彼らの前から風のように消えていった……あいつらのせいでの。

カイルにはそれが許せなかつた。

「……いいよ……ちゃんと仇を取るんだよ」「ありがとうございます……」「

アシュリーナは跪くカイルを撫でて、大広間へ戻つて行つた……サルーシュの微笑みの意味が今わかつた。

戴冠記念祭ですべてにケリをつけてやる……

戴冠記念祭　＝1日目午前？＝（後書き）

次回は午後に移ります……夜、祭りが本格的に動きます

**戴冠記念祭　＝1日目午後＝（前書き）**

とうとう戴冠記念祭が本格的に始まります  
アシュリーナたちはどうなるのでしょうか？

今夜も夜の主神オリオンは輝いていた。

今の季節は冬。1日の中で一番長い時間は夜である。つまりオリオンが天の中で強い権力を持つている（と信じられている）戴冠記念祭が夜から執り行われるのは、まず1日の中で強いオリオンに日々の安息を感謝し、王国の永劫の安寧を願うからだ。

そんなわけでアシュリーナは眠い目を擦りながら（夜に備えて昼寝をしていた）起きだして、銀を基調とした豪華な衣装に着替える。今度は中もちゃんとした綢の服装にした。

時間まで部屋でぼーっとしていると、アンドレアがやつてきた。実はあの後、アシュリーナたちを襲撃に来た兵士がどこの国の者か調べるよう頼んでいたのだ。

「アシュリーナ様を襲つた兵士はチャズの者、衛兵たちを襲つたのは5名とのことでしたが、内2名がアルゴワ、1名がスズリ、残りの2名はうちの兵でした……医師に調べてもらつたところ、彼らは何かしらの催眠薬を飲むか嗅ぐかしたか、或いは暗示にかけられた、とのことです。私にはそんな芸当できませんけど、そんなことができる人物ついているものなんですね……」

アンドレアがなぜか感心気味に呟つ。5名は他国の中だが、2名はダングラジエの兵士だ、といつてこいつにイラッとする。間抜けな……

「一応他国の王、皆さんにお知らせし兵士の数を数えてきましたところ、総勢15人以上行方が分かつていよいよです」  
「……ということは、まだ刺客が15人以上いるということね……サバイバルだわ。うちの兵は？」

「全員いました」

「ふつ、奴らもうちのには手出しえきないか……。アンドレア、あんたは祭儀の途中は私から離れないこと……私は護身できないから、万が一のことがあつたら守つてちょうだい。ヨシュアとカイルは広間を守るようになつといて。門番は……他の将軍たちは當てにならないし、かと言つて下級兵を置いとくわけにはいかないわねえ……」

「私たちの副官を一名ずつ出して、兵を率いさせては？交代制にするととなおいいですね」

「そうね、それがいいわ。ではそのように2人にも伝えて……カイルはどうなつた？」

「死んだ衛兵たちに謝つてました……自分が悪かつた、と……」

「『悪かつた』って何が？置いていったこと？」

「そのようです。傷心していますがもう大丈夫でしょう」

「それならいいけど……後で声を掛けてみるわ」

行きましょう、といつてアシュリーナが立ち上がり、スタスターと歩いていく。その後にアンドレアも続く。

\* \* \* \* \*

月は天を明るく照らし、オリオンはその姿を神々しく輝かせている。

ダングラジエにしか自生しないマシューの木で作られた横笛を樂士が吹く 祭の始まりだ。

民たちが王宮外で歌い踊り、皆が歡喜に包まれていた。

「アシュリーナ様、戴冠1周年おめでとうーー！」

「早いいい旦那見つけてくださいーーーー！」

いや、私まだ9歳だし……そんなことを思いつつアシュリーナはテラスに出て笑顔で手を振る。すると民たちが一斉に手をブンブン振りだす まるでこの世に降臨した女神に会ったかのようだった。

実際銀を基調にした綺麗な服で身を包んでいた彼女が、彼らにはそう見えたのかもしれない。

神殿ではまず、アシュリーナだけが人間の形を取つたオリオンの神像に祈りを捧げる。王国の安寧、国への恵みの感謝　そしてサルーシュたちへの報復の成功を。

神官たちが神への言葉をマニコアル通りに読み進めていき、大神官が宗教的な儀式を恭しく始める。女王であるアシュリーナは大神官に付き添われながら供物を捧げる……とにかく何もかもが初めてで自信がない。

アシュリーナがもたもたしながら何とか無事に終わらせることができた。最後に透明のジュース（アシュリーナは酒が飲めない）入った銀の杯を手に持ち、再度神像の前へ進む。そして高らかに宣言した。

「汝の豊かな恩恵に感謝し、我ここに誓う。我らダングラジエの民は汝への永劫で変わらぬ忠誠を誓い、尊敬と畏怖と念を持つて奉らん。その恩恵……永遠なれ！」

ジュースをグイッと飲み干す。すると賓客たちの間から割れんばかりの拍手がなつた。……何を勘違いしている……これはアンドレアが考えたものを一夜づけて覚えただけなんだー！

そんなことは露知らず、賓客の中には涙を流すものさえいた……止めてくれ、恥ずかしい。これはアンドレアが考えたんだ……涙の対象をアンドレアに変えろお！

アシュリーナがあたふたしていると大神官が変な目で見てきたが、彼女はそんなことは気にしない。彼女が警戒しているのは……祭儀を無表情で見つめているサルーシュたちだ。残りの15名以上の行方不明兵をいつ操つて、襲わせてくるか……それについてはアンドレアたちも警戒している。

しかし今夜はもう襲つてくることはなかつた。大勢の賓客たちの目の前では迂闊に手出しができないらしい。

今日の宴は平穏無事に済ませることができた。

\* \* \* \* \*

「エリ様……女王たちは私たちの策謀だと気づいているようですが、そのようだな……しかし、このチャンスを逃すともう後戻りができない。残り6日間でダングラジエを滅ぼさなければ……あの方に顔向けができない……」

エリと呼ばれた女が『あの方』と口にした途端、仲間らしき女たちに動搖が走る。『あの方』を怒らせるはどうなるか……それは彼女らが1番よく分かつてていることなのだ。『あの方』のおかげで滅んだ国、没落した貴族の数は計り知れない……恐ろしい方だと皆が認識している。

「ボクがやりましょう」

そう笑顔で1人の少女が言った。

「こんな国なんてすぐ滅ぼしてあげるよ……そしたらボク、大出世だなあ」

呑気に言う……しかし彼女の実力も侮れない。『あの方』と同世代であるにも関わらず彼女は任務に参加することができている。……もう既に大出世なのだが。

「姉さんたちはボクの邪魔さえしなければいいから……全部任せねえ」

「こやかに笑うがその顔には既に残酷さが表れていた。

戴冠記念祭　＝1日田午後＝（後書き）

エリたちの正体はほととぎ……いや、みなさん分かりましたね（汗）  
エリではもちろん明かしませんよ……w

次話もよろしくお願ひします m ( - - ) m

**戴冠記念祭　＝2日目＝（前書き）**

1日目も終わり2日目突入です

今日は何もない休みなんですよ（笑）

今日は祭の2日目だが、これといった祭儀はない……つまり休みということだ。しかしアシュリーナは賓客たちに正式な挨拶を済ませていないので、挨拶回り間違いなしといったところだつた。というわけで、彼女とその護衛3人　　アンドレアとヨシュアとカイルは午前中をその時間に潰し、やつとお昼前に済ませることができる。

今、中庭の木陰で仲良く休んでこるところだ。

「ふう～やつと終わつたあ……暑つ」

「ははっ、しうがないですよ。ここは冬でも暑いんですから」すっかり機嫌を戻したカイルが笑う。

「今日は休みだつていうのによく働いたなあ」

……いや、それは護衛のこいつらのセツフなんですけど……

3人とも涼しそうに木陰に座るアシュリーナを見つめる。

すると、パタパタパタッといつ可愛らしく足音が聞こえた。そして……

「お姉ちゃんっ！－！」

そう言つて、女の子がアシュリーナに抱きついた。ゾゾッと寒気が走る。

「だあああーっ！－！誰だあー！」

アシュリーナが振り向くと、白い肌に濃い緑をした髪と眼の少女がキヨトンとして立つていた。歳はアシュリーナと同じぐらいに見

える……誰だ、『イツ?』と思ひながらも服装を見ると、『いかの王族のような格好をしていた。

お偉いさんだったら困るので氣を取り直して、いつもの営業スマイルを見せながらアシュリーナは尋ねる。

「あら、こんにちは。お父様かお母様はいらっしゃらないの?」

「いるけど……お姉ちゃんに会いにきたの!—!」

はあ～そりやどうも、としか言によづがない……ていうか『お姉ちゃん』は止めて欲しい。本当に姉みたいじゃないか!～

するとゼロゼロ言いながら細見の男性が走ってきた。

「ソネアあ～（はあはあ）、勝手にうしょりするなつて（はあはあ）言つただろう……」

すぐ息切れしながら喋る……そんなに走らなくていいんじゃないんですか?といふかどこから来たんですか?

「お父様!～やつと来たの?遅かったね」

「『遅かったね』じゃないだろ?!～あ

今更アシュリーナたちに気づいたのか、慌ててお辞儀を繰り返す。

「アシュリーナ様、娘がご迷惑をかけてすみません」

必死に父親が謝っているといつのにソネアと呼ばれた少女はにぱあーっと笑つたまだ。

「だつて、ソネア早くお姉ちゃんに会いたかったんだもん!～」  
口を尖らせてソネアが言つ……ついでにギュウウーっと抱きついた腕に力を込める。

「まあ構わないのですよ……ソネアちゃんといふんですか?可愛いでですね。お幾つなんですか?」

「6歳!～」

ソネアが答える。

「あらそこの?私と3歳違ひね

するとソネアがムズムズし始めた……なんなんだこのガキは?勿論口には出れない。

「お姉ちゃん……遊ぼうーー！」

アシュリーナを除くみんなが驚愕の表情を浮かべた……一番すぐ  
かつたのは彼女の父親だ。

「ソ、ソネア！…またそんな」と言つて……アシュリーナ様  
は忙しいんだよ。みんな忙しいんだ！…当分ソネアには構つてあげ  
られないけど、帰つたらばあやに遊んでもらしなさい」

「ばあやと遊ぶのはもう飽きた……ソネアはお姉ちゃんと遊びた  
い……」

しつと父親の言葉に答える。もう彼女の中ではアシュリーナと  
遊ぶことで頭がいっぱいらしい。

そんな親子の会話が10分以上続いた……じんなどひで喧嘩す  
るなよ、つわつたい。アシュリーナはそう思ふ遂に覚悟を決めた。

「わかりました……。ソネアちゃん遊ぼうか」

「うん！！」

ソネアが喜色満面の表情で頷く。

「本当にすみません！！」

彼女の父親がまたまた頭を下げる。

「気にしないでください。ここには私と同じぐらいの歳の子がい  
ないんで、一度退屈していったところなんですよ……どうぞお気にな  
らうず。さあ、ソネアちゃん行こうか」

アシュリーナはソネアの手を握つて立ち上がり、そのまま王宮の  
奥へ消えていった。

「……うちの娘がどうもすみません……アシュリーナ様をどうし  
ても見たいと言つもんですから、連れて来たらこんなことになつて  
しまつて……本当にすみません」

今度はアンדרaeaたちに頭を下げる。

「いいえ、アシュリーナ様が良かつたらそれでいいんです……私

たちじゅもつ彼女の遊び相手にはなれませんから

それからとこりものアシュリーナとソネアは日が暮れるまで遊び倒した。初めは嫌がっていたアシュリーナも、まるで幼いころに帰つたかのよう遊んでしまつていて。

父親へ返すとき、「また遊んでね」とか言つてまた怒られていたが、アシュリーナも快く承諾した。

その夜、ヨシュアは仕事も無く、早めに休むことにした。うとうとしていると、部屋の入口の方で物音がしたので何事かと思ったが、すぐにアシュリーナの声がした。

「ヨシュア……まだ起きてるの？……話があるから聞いてくれないかしら？」

今夜はやけに素直だな、と思い明かりをつけようとした。が、すぐ引寄せられた。

「將軍の部屋でこんな時間に明かりがいきなり点けると頭がびっくりするでしょ？だから……明かりはいいわ」

そんなことを言しながらアシュリーナはヨシュアの傍へやつてきた。そしてベッドにちょこんと座る。

「アシュリーナ様……こんな時間になにかご用ですか？」

ヨシュアはわざやき声で話しかける。

「ええ、実は……」

ゴクッと唾を飲む音が聞こえる。

「あなたには死んでもらおうかと思つて」

そう言われた後、背中に焼け付くような痛みが走る。

「……ア、アシュリーナ……様……！」

「『めんなさいねえ……あなた邪魔なの』

すくっとアシュリーナが立ち上がる。丁度月明かりがヨシュアの部屋の中を照らす。……しかしそこにいたのはアシュリーナではなく、昼に彼女と遊んだソネアの顔があった。

「あらあ～ばれちゃった？まあ、しょうがないね」

声音が突然変わった。しかし明らかに彼女とは声が違う。もつと低い声だった。

「あなた、女王の周りをうろちょろしてすぐ邪魔だつたんだよね……アンドレアって奴も十分邪魔だけど……まず手始めにあんたを殺すことにしてたわ」

ソネアがニコッと笑う。そして出口へ悠然と歩いて行った。

「明日まで生きれたらいいね……じゃあね」

彼女は手を振つて見せる。月を背景にヨシュアに微笑みかけた。ヨシュアはうめき声をあげることしかできなかつた。

戴冠記念祭　＝　2月1日　＝　（後書き）

刺されたヨシコアは死んでしまったのか？

3月1日も注目です！

**戴冠記念祭 = 3月3日 = (前書き)**

ミシコアが刺されたまま3月3日を迎えることになりました……  
祭儀はどうなるか…そしてミシコアの容体は……?

はあああ～

大きく伸びをしてアシュリーナはベッドからのそのそと這い出た。  
……今日は確か、太陽神を祀る日じゃなかつたつけ……？ああ、め  
んどくさい。

「タルカシイ…………まだあ～？」

寝起きの彼女はとてつもなく機嫌が悪かつた。

「いつもは早くしなさいだのなんだのうるさいくせに、今日はほ  
つたらかしですか！？今日こそ急がなきやなんないのに……バーカ」  
まだ午前4時を回ったところだ。太陽神を祀る際には、日の出に  
合わせなければならぬ。だからいつもして朝早くから（いやいや）  
起きているわけだ。

……いつまで経つてもこない……まさかあいつ寝過ごしたか？？  
……いやいや、あれに限つてそんなことはない。どっちかというと  
ここに誰よりも早く起きてそうだ……そういう律儀な人だから。

痺れを切らし、アシュリーナは本格的に悪態をつき始めた……普  
通の9歳の口からは到底でこないようなあんなことやこんなこと  
を。

するとタルカシではないが、侍女がやつてきた。

「大変です、アシュリーナ様！！ヨシュア様が……重体とのこと  
です！！」

「はい？ヨシュアが重体……？なんで？思考回路がやつと動き  
始めたアシュリーナには、すぐに理解できなかつた。

「……それってホント？なんで？」

寝ぼけたまま答える……タルカシが侍女にまで私を調教する術を教え込み始めたのか？それはまずいなあ……

「本当にござります！！何故こんなことで嘘をつけましょウ？急いでください！！」

彼女の顔は蒼白だった。顔……体全体で必死さをアピールしている。

やつと本気になつた。弾かれたように立ち上がり寝着を簡単な普段着に着替え始める。

「あなた、よく知らせてくれたわ……こんな格好で行くわけにはいかないからちょっと待つて。すぐに着替えるから」

「あつ、お召し物の交換は私どもの仕事です……すみません……気が動転していて全く気にかけていませんでした。私がやりますのでアシュリーナ様は楽にしていてください」

「今はそれどころじゃないわ……私のことはいいから。ヨシュアは今どのよくな状態なの？」

「はい……ヨシュア様は背中を短剣で一突きされたようで……侍医が見てくださつているのですが、どうも傷が深くて……その上傷口が化膿しているみたいなんです。なにか毒物が塗られていたのではないか、とおっしゃっていました……ヨシュア様は助かりますでしょうか！？私は心配で心配で……」

そう言つて彼女は泣き出した……無愛想な彼だが一応慕つてくれている人はいるようだ。

「大丈夫よ……彼は強いもの……あいつがカイルを残して逝けるわけないでしょウ！たつた一人の弟が近くにいるのに……。あなた名前は？」

「……エシャーです」

「そり……エシャー辛かつたわね……ごめんね。さあ行きましょ

う

優しく語りかけると、彼女は小さな声ではい、と答えて立ち上が

つた。そしてアシュリーナを先導していった。

「ヨシュア様……投薬と止血できていないようなのでその治療だけはできました……。しかし、この状態で縫合するのは大変危険が伴うので、また後ほど縫合いたしましよう」

侍医はそう言つた……が、返事がない。ヨシュアは目を閉じてベッドの上で臥せつている。先ほどまでは治療の痛みに耐えきれず叫び声をあげる場面もあつたが、今は落ち着いて寝ているのだろう。その顔は周りの誰よりも蒼白だった。

「兄さん……大丈夫かなあ」

悲しそうにカイルが呟く。二人は幼いころから支えあって生きてきた。貧しさから両親は彼らがまだ幼いころに養子に出した。たまたまそこが剣術の道場で、たまたまアシュリーナの父親……先王も通っていた道場だった。その当時、彼はまだ王子という立場でその護衛という形で友達になった。いつしか彼は王になり、一人も王宮へ上げられることになった。……いつ何時も何をするにも一人は一緒だった。

そんな兄が今死の淵を彷徨つている……弟のカイルはとても辛かつた。厳しく無愛想な兄だつたけど、それでも彼が大好きだった……カイルの頬を一筋の涙が伝う。

「ヨシュア……生きてるか?」

そう声を掛けたのはアシュリーナだった。

「陛下!？もうお目覚めだつたのですか？」

皆が驚いて声をあげる。

「……今日は祭儀があるはずだったので、私もうんと早く起きましたのか……何か文句でも?」

冷たく笑いながら言い返す。が、皆「ああ～そういうえばそうだつ

たね」という顔で納得していた。

そんな彼らを思いつきり無視して侍医に言つ。

「ヨシュアの状態は？」

「なんとか……しかし、後はヨシュア様の体力と氣力の問題です。峠は今日になるでしょう。発見が遅れれば手遅れだったかもしれません」

「そう……今日の祭儀は中止にしてもらつたから、一日ヨシュアの傍にいるわ……いいかしら？」

「別に構いませんが……陛下はお疲れではないのですか？」

「勿論疲れているけど、私よりヨシュアの命の方が今は大事よ……

・彼の傍で励ましたいの……ダメ？」

（得意の）切なそうに見上げる（攻撃）……それを見た侍医もかなり狼狽している。

「ホンと咳払いして侍医は言った。

「いいでしよう……しかしヨシュア様の負担にならないよう……そして何より貴女様の体を気にかけてください……王は貴女しかいないのですから」

「ありがとうございます」

「コツと笑つてお辞儀する。すると彼はそそくさと部屋から出て行つた。

それを確認すると、アシュワーナはヨシュアの耳元へ行き、囁いた。

ヨシュア……あなたの仇も討つてあげるわ

そう言つとヨシュアが微かに笑つたような気がした。

\* \* \* \* \*

ソネアは血に濡れた衣装を着て与えられた部屋の前に突つ立つて

いた。自分が何故こんな格好なのかもわからなかつた。  
父親が出てくる……その後うわあっと叫び声をあげた。

何故だらう……記憶がない……  
お姉ちゃん、と呟いて彼女は頬れた。

戴冠記念祭　＝3月1日＝（後書き）

いつも通り長文です（汗）

最後をこいつかって終わらせるのによろしくなさか抵抗があつたんですが、最終的にこいつなりました。。

物語は遂に佳境に入ります！！！  
次話もお楽しみに～

**戴冠記念祭　＝4日目　前半＝（前書き）**

佳境に突入しました

ソネアに一体何があつたのでしょうか……？

気が付くと尊敬するアシュリーナの前にいた……しかし、何か様子が違う。私を侮蔑した目だ。手を動かそうとしたが動かなかつた。かわりに何か太いものが手に食い込んだ。それが縄だとわかるのは幾らもからなかつた。

すると、どこからか石が飛んできた。

「…………イタツ！！」

「お前が…………わしの兵を…………－－！」

「何人殺せば気が済むんだ！－うちの兵だけでなく、他国の兵士もお前が殺したんだるう－！」

「そして、ダングラジエの將軍、ヨシュア様にも手を掛けやがつて……！－王族だからってふざけるのもいい加減にしろ！－！」

石と罵声は容赦なく飛び続ける。父を見ようと思った……が、そこには何処にもいなかつた。何があつているのかがさっぱり分からぬ。救いを求めるようにアシュリーナを見上げた。

\* \* \* \* \*

アシュリーナはそこに横たわる、哀れな少女を見下ろした。

今日の儀式が済んだ後、アンデレアから報告があった  
行  
方不明だつた15名余りの兵士の死体の発見、そして彼らの殺害とヨシュアの殺害未遂の実行役が……ソネアだつた、という2つだ。  
なんでも、昨日ソネアが自室の前で、血塗れ（ちまみれ）になつて突つ立つていたらしい。それを彼女の父親が見つけ、その後兵士たちの死体が見つかつたという。これだけでは彼女が殺つたという証拠はない。が、不運にも複数の目撃証言があつた。ヨシュアの件についても同じだつた。

これだけの証拠が挙がれば、アシュリーナは彼女と親睦を深めた仲とはいえ、ダングラジエの王として処分を下す他は無かつた。

しかし、屈強な兵士を、いかにも温室育ちそうな6歳の少女ノネアが15名も殺し、将軍であるヨシュアを簡単に重体に陥らせたのか……疑問は残つた。が、彼らは怒りに占領されそこまで考へることができなかつた。

ソネアがこちらを見上げた……その目は悲痛そうだった。思わず目を逸らす……しかしある考へが彼女の中で閃いた。そして、暴言を吐いている賓客たちを見回す……いた、彼女らは。

自分の考へに確信を持ったアシュリーナは、さつと手を上げる。

「止めつ……それ以上この少女を傷つけてはいけません……」

勿論、彼らからはアシュリーナの方へ矛先が向いた。しかし、また彼女は手を上げて、制止する。すると彼らはやっと大人しくなつた。

「この少女が罪を犯したことは証言からも解るとおり……それは今となつてはもう不变の出来事。しかしこんな幼気な少女が逞しい男兵15人に我が國自慢の将軍を簡単に攻撃できると皆さんは思いでですか！？」

群衆の間から、確かにといふ声が漏れる。しかしながら諦めないものもいた。

「確かに……この少女は15人の命を不本意ながらも奪つたとしましよう。私は彼女を哀れに思つても罰を下さなければなりません……それでもいいんですか？」

唐突に口に出た、謎の言葉……それに動搖する群衆。

「私たちには分かつてゐるんです……。ここで彼女を処刑すればあなたたちが手を汚すことなく口止めができる……しかし彼女を殺せば、あなたたちには私を暗殺するという道は閉ざされるのですよ

?こんな都合のいい人形<sup>ソネア</sup>を簡単に手放してもいいんですか?ねえ、そこあなた方!!」

アシュリーナが指差した先には……ムスリの使者があつた。

「……私たちが?何のことかしら?……?その子には何の縁もゆかりも無いというのに何故私たちが困る必要があるというのです!?

サルーシェではない長身の女が前に出て強く言い放つ　その目は怒りに燃えていた。

「お姉ちゃん……!!止めて、殺さないで」

突然ソネアが思い出したように言つ。皆の目が一斉にソネアの元へ集まる。

しかしアシュリーナはしゃがんで言った。

「それは出来ない……あなたは罪を犯したから。罪人は　殺人者は処刑になると決まっているの」

するとソネアがくしゃくしゃになつて泣き始めた。

「嫌だあ……お父様あ……お母様あ……うう」

その様子を見てアシュリーナが冷たく言い放つ。

「あなた、一緒に遊んだとき言つたわね……『お姉ちゃんみたいな立派な王様になる』って。でもね、私は例え6歳の友達でも容赦なく死刑を下す王様なの……。そうじやないと王として生きていけないから……。あの顔だけが私じゃないのよ……本当の私は真っ黒な心も持ち合わせているのよ」

そう言って、執行人たちを呼んだ。彼らは拘束されたままのソネアを大広間の中央へ引っ張つていった。

「嫌だ、嫌だ!!助けてよおー、誰かあ　!!」

少女の悲鳴はこだました。誰もが少女の死を想像した。

すると次の瞬間、彼女の体が大きく傾いだ。気絶したかと思われたがすぐに、元に戻り繩を引きちぎつた。動搖する執行人たちを振り払つた後、1人が持つていた剣を奪い彼らを難いだ。

「危ない、危ない……ホントにばれてたんだね……こいつが本気じやないって。オチビさんの言つ通り、こいつが殺されては困るんだよねえ」

ソネアが口を開く……がその声は彼女のものではなかつた。剣についた血糊を払いながらゆらゆらと彼女が立ち上がる。その目は冷徹でこの状況を楽しんでいるような目だつた。

「さあ、ここりで余興を始めましょうか」

彼女はニヤツと笑つた。

戴冠記念祭　＝4日目　前半＝（後書き）

ソネアに憑依しているのは何なのか……？

分かっている人にはわかると思います！！

前半の方で飛ばした太陽神を祀る儀式は基本、　1日目の儀式と同じです……祀る対象が違うだけです

では

戴冠記念祭　＝4日目　後半＝（前書き）

前回の後書きで『ソネアに憑依した』と書いてありましたが、完  
全なるネタバレですね（汗）失礼しましたm（・\_・）m

では、後半をどうぞ＝3

ソネアはニヤツと冷笑する。

「女王様あー、あなたは6歳のガキにだつて容赦しないって……あれかな、王としての威厳 つていつやつ? やつぱり血は争えないね」

アシュリーナは無言で見つめる……相手にしたくないということもあつたが、ソネアの言つていることが理解できなかつたといつ頃も大きい。

難しい顔をしているアシュリーナを見て、ソネアはニヤニヤしながらまた口を開く。

「あれえ~知らない? あなたのお父さんのこと。あいつがボクたちの国<sup>ムスリ</sup>を滅ぼしたっていうのは去年分かっただよ? 正確に言うと、ムスリを滅ぼすよう命令したのはあなたの爺さんだけど……あんな老いぼれ、指揮している途中で死んじゃってね!! まあなんと情けないっていうか……。爺さんに代わつて先頭にたつたのはあいつだよ」

ソネアが威圧感たつぱりに話しだす。

「それまで戦況はこっちが有利だつた。だけどあいつときたら、まず誰を殺していくつたと思う? ……女子供だよ。女子供は自分で身を守る術を持つていらない……彼女らをまず殺しておけば、相手側は意氣消沈するだらうつて考えたんだとさ! まあその策略は見事成功して、男共は混乱に陥つたよ……家族を殺されて正気のものはいないだらう! ……ここからボクの世話をでもしようじやないか」

「あなたの昔話なんか興味ない……第一、父さんたちはムスリと戦つてないわ。ムスリが滅んだのはつい4年前じゃない。父さんはいつも私の傍にいてくれた……あんたらの方こそ何か勘違いしてい

ないか？」

アシュリーナが敵意むき出しで突っかかる。しかしソネアが声のトーンを一層低めてしゃべりだす。

「お前はどんだけおめでたい奴なんだよ……自分の幼い娘をわざわざ不安にさせる発言をする親がどこにいんだよ！－だいたい王は戦線でも後ろの方に引き下がつて、將軍以下に戦わせるというのが普通だろ？そんなことも知らないのかよ……よくそんなんで王様やつてられるなあ！？」

はつはつは、とバカにしたように笑い出した。さすがにアシュリーナもムツとしたが、彼女の言つ通りだと思うと、言い返せなかつた。

「いいかいオチビさん……。ボクの妹ラーニャはねえ今生きてたら11歳なんだあ……。勿論生きてたらの話。……言つている意味わかるよね？」

「……あなたは父さんがあなたの妹 ラーニャを殺したつて言いたいの……？」

「わかってるじゃないかあ……そういうこと！－！ボクがここにいるのはその復讐のため！妹の仇を討たせてもらうよ！－！」

最後の方になると激昂した感情がむき出しだ。ソネアの顔は恨み辛みで歪んでいる。

ソネアが体勢を低くし、猛然とダッシュしていく。常人では捉えきれない速さだ。

「ぼさつとするなあつ－！」

剣を上段に構え、アシュリーナの頭目がけて振り降りそうとする。アシュリーナは目を見張つた……絶対殺される……－！

ソネアの目は狂気に満ち、彼女の身体能力を遥かに超えていた。

「アシュリーナ様……」

アンドレアが咄嗟に剣を抜いてアシュリーナの前で防御の姿勢をとる。そのまま階段をジャンプして飛び越えてきたソネアを受け止める……アンドレアが呻く……かなりの負荷がかかってたに違いない。ようやく彼は後退したが、ソネアの方は華麗に後ろに飛び、着地した。

「……この国にも出来る人間はいるんだね……誰かみたいに主君の皮を被った人間に騙された奴もいるけど」

意地悪くニヤッと笑う。アシュリーナが怒りが頂点に達した。

「ソネアを解放しろ……その体じゃ身が持たない……」

「……できない相談だねえ……どうせここいつ殺すつもりだつたんでしょう? ジャあその手間を省いてあげるよーこの体はボクのものだ……!」

見せしめのように首に剣の切つ先をあてる……先から血が滴り落ちた。

「止めて!!……兵士の殺害はあなたが自白したわ……ソネアに罪はない!!放しなさい!!」

「ラーニャはそれでも殺された……!!その時7歳だったわ。彼女にもなんの罪もなかつた……だけどあんたの父親は私の目の前で唯一の肉親を殺したのよ……」

再びダッシュしていく。アンドレアは先ほどの疲労で追いつけない。

命運は尽きた

そう思つたとき、ヨシュアの部屋にいたはずのカイルがソネアを捕まえた。その眼差しは冷たかった。

「邪魔するなあ！！」

ソネアが言い放ち、剣を持つた方の手でカイルの腕を切り落とそうとする……が、カイルの方が一步早かつた。手刀で首筋を狙い打つた。ソネアの体がガクンとへたり込む。

空には少し欠けた月が南中していた。

戴冠記念祭　＝4日目　後半＝（後書き）

今回は比較的短めのつもりです……つもり、はい。

本格的に戦闘シーンを入れては見たものの、微妙な出来栄えです（  
泣）

次話も楽しみにしてくださいーー！

戴冠記念祭　＝5日目　前編＝（前書き）

月は南中し、夜半を少し過ぎたところ……無理やり日付を次へ進めました（泣）

とこつわけで、5日目が始まります！

「カイルっ……」

アシュリーナは嬉しそうに叫ぶ。アンドレアを始めとする賓客たちも安堵の表情を浮かべる。

「姫さん！怪我はないですか？」

「私は大丈夫……ソネアを避難させたほしい……それよりヨシュアは大丈夫なの？」

「兄さんは大丈夫ですよ。さつき物音がしたから、兄さんが行け、つて言つたんでやつてきました……衛兵！」

カイルはテキパキと駆けつけた兵士たちに指示していく。

「カイル将軍……助かった！礼を言おう」

「いえいえ、何てこともありますん！！それよりアンドレア将軍の方こそ大丈夫ですか？相当お疲れのようですけど……」

「ああ……ソネア様に何者かが ムスリの一昧が憑依して

いたらしく……半端ない力で押されたもので、つい……」

アンドレアが言い終わつたと同時に、賓客の方からドサツという音と、甲高い悲鳴が聞こえた。

「何事ですか？」

アシュリーナが歩み寄ると、サツと彼女をみんなが避けていった。そして開けた先にあつたのは、つっぷしつて肩で息をしている黒いフード付きマントを着ている少女と、それを取り囲むようにムスリの使者たちがしゃがみこんでいた。

「ロザー！しつかりして……あれだけ無茶するなつて言つたのに！」

「そりよ……あんなに急ぐ必要はなかつたのよ……おかげで計画

が全て水の泡だわ」

心配しているのか、責めているのか、どちらともつかない声が汗だくの少女に掛けられていた。

「……ロザって言ひの、あんた。よくもソネアを悪者にしたてたわね」

「う、つるせ……突然、……意識を……引きはがす……な……。体力の2分の1は……確実に……持つて行かれた……じゃないか」喘ぎながら答える。アシュリーナを見上げる目には敵意しか宿つていなかつた。

「まつ、計画も私たちにばれちゃつたし、お客様の前であんたたちの罪をさらけ出してもらいましょうか……カイルー中央へ連れて行つて」

「……調子に乗るなよ小娘がつ……あの方がいすとも、我らがダングラジエなど簡単に滅ぼせるのだぞ……」

「やつてござらんなどさよ……ダングラジエ王として返り討ちにしてあげるわ」

「なにつーふざけるなあ……！」

別の女が抜剣しながらアシュリーナの元へ走つてきた。

「私はロザのようにはいかないぞ……雑魚などには止められない

……！」

「ばつ、姉様！危ない……！」

ロザが渾身の力で叫び、激しく咳き込む……しかしその忠告を無視して女は走り続ける。

「この恨み……今まで一度足りとも忘れたことなどない……」  
死んでもらおう……！」

しかしまたしてもカイルに妨害された。

「姫様には指一本たりとも触れさせはしない……」  
我が剣を受

けよー！」

カイルとの激しい打ち合いになつた。金属音が辺りに響く。

「衛兵ー皆様を早急に避難させろーーこの場は危ない！」

アシュリーナが叫ぶ。

「お姫様、よそ見していいんですかねー？」

突然アシュリーナの後ろ側から鈴のような音が聞こえた。急いで振り向くと笑顔で血の付いた剣を下げている少女が立っていた。

「ふふ……ざまあみやがれ、ということですよ。あなたには何の罪もないけど死んでもらいます……そうでもしないと姉様たちが落ち着かないんで」

表情を変えず剣を無造作に持ち上げ、振り降ろす。

「うわっ

さつと後ろに避けた……切つ先が目の前を通り過ぎて行った。

「あなたはつづく運がいいですねえー……本気出しますよ？ いですかー？」

閉じていた目を少しだけ開けて、また振り降ろしてきた。

「くつ、こんな至近距離じゃ……できないーー！」

「どうしました？ やはりあなたは誰かに守つてもらわないといけませんか？」

「う、うるさいーー！」

傍に置いてあつた剣を掴み、抜剣する。振り降ろされた剣を何か受け止めた……が、力の差は歴然としていた。

「あっ

相手に押され、剣を離してしまつた。

「サク！ やつちまいなーー！」

そうカイルと交戦中の女が叫ぶ。

しかしアシュリーナにはその名前に聞き覚えがあった。 親を殺されたときアシュリーナが放った弓で負傷した女だ。 確か……

「ここだ……つたつけ？」

サクの懷に入り込み、右肩を肘打ちする……すると、相手は痛みに顔を歪め、頽れた。

やつた そう思つた瞬間

「危ない！アシュリーナ様っ！！」

アンドレアにそう叫ばれたとき、アシュリーナは自分の影に覆い被さる別の影を見つけた。

戴冠記念祭 = 5月3日 前編 = (後書き)

続きは中編で……

意外としぶとい戦いになつてきました。アシュリーナ様、大丈夫ですかね?……作者がこんな事言つているよりではダメですねw

もつやうやう「あの方」を登場させるつもりです。楽しみにしていてください。

よひじへく願こします 三(・・)三

**戴冠記念祭　＝5月3日　中編＝（前書き）**

今日はあんなことやこんなことがあります……説明になつてないですね。

負傷者が出ます……一人はグロイです。

では、本文をどうぞ！

「捕まえた！」

アシュリーナは自分よりも遙かに大きい体に抑え込まれた。いつもなら逃げられるが、相手の抑える力が強すぎて身動きさえできなかつた。

くつくつと笑いながら女

サルーシェは見下ろしてくる。

「やつと、捕まえたわ……この時を私たちが待ったか……！」  
サルーシェの薄い唇が持ち上がる。それを抑え込まれたアシュリーナがキッと睨みつける。

「アシュリーナ様……！」

アンドレアがアシュリーナの元へ駆けてきた。

「おつと、あんたの相手は私だよ」

横から新たなる5人目の女が出てきた。……とことん用意周到である。

「あのチビを助けるのは私を倒してからにしなさい……まあ、あんたには無理だけど」

「ちいっ」

アンドレアも渋々抜剣し、の方へ構える。

「アシュリーナ様！なんとか持ちこたえてください……！」

「そんな事……言われないでもわかっている！」

……そう強がりを言ってみたものの、アシュリーナは祭儀のために朝早くに起床。後3時間ほどで2~4時間起きていることになる。寝不足と疲労で9歳の体は悲鳴を上げていた。

一方サルーシェは底なしの体力か?と思わせるほどの力でアシュ

リーナを床へ押しつける。

「抵抗しないのかい？」

そう彼女は薄ら笑いを浮かべながら、さらに腕を抑える手に力を込める……こいつ骨折させる気か？

「つつ！止め……」

アシュリーナが悲鳴を上げかける。腕の辺りからピシッという変な音がした。

「！あああああー！！」

腕に激痛が走る……細い腕は多分骨折したのだろう。

サルーシュが手を離すとアシュリーナは腕を抑えながら転げる。

「くつ！…この……」

痛さに涙が出てきた。

「アシュリーナ様！！」

主の変化に気づいたアンドレアが叫ぶ。

「よそ見してる場合か？ほらっ！」

アンドレアと交戦中の女が彼の顔へ向けて剣を放つ。

「ちっ！」

咄嗟に避けたが頬に赤い一筋が走った。

「よそ見してるから怪我するんだよ」

「黙れ！…何なんだ、お前たちは！？」

「いや、普通にダングラジエ国王の誕生祭と戴冠記念祭に呼ばれた善良な使者ですけど？」

しれっと言い返す。

「嘘だ！ならば何故ヨシュア将軍を攻撃した？」

いつもは大人しい将軍であるアンドレアが憤る。その様子を楽しんでいるように女は笑う。

「実行犯私じゃないし。なんでだろうね？多分ロザが間違えたん

だよ、殺す順番を。ホントはあんたが死ぬはずだつたんじゃない？代わりにあいつが傷を負ってくれたんだよ？あんたは強運の持ち主だつたってわけさ

「…………ふざけるなあ————！」

アンドレアが女を薙ぐ。が、掠つただけだった。

「戦場において、感情的になることは禁物。冷静な判断が下せなくなり、結果敗れることに繋がる……残念でした！」

アンドレアの懷に滑り込み、剣で一刺しする。辺りに鮮血が飛んだ。

そしてアンドレアの体が後ろ向きに倒れて行つた。

「アン……ドレア……」

アシュリーナは薄れゆく意識の中で呟いた。折れた腕は赤く腫れていった。

「まあ所詮あいつの娘……結局私に殺されるのね」

「黙……れ……。私は……まだ死ない……死ねない……！」

「……その気力がどこまで持つか……見物だね」

剣の刃でアシュリーナの首元をなぞる……金属の冷たさが生々しく感じられた。

「では……あの世で父親に会えるといいわね……」

剣をリズムに合わせて横に振る……タイミングを確認していくようだ。

アシュリーナの目の前に死が迫ってきた……父さん、母さん……ごめん……仇が討てなかつた。

頬に涙がこぼれたとき、不意にサルーシェが剣を落とした。はつとして見ると、腕に一本の矢が刺さっていた。

矢が飛んできたであろう方向を向くと、衛兵に支えられたヨシュ

アの姿があつた。

「ア……アシュア……！」

彼の姿を見て安堵した途端アシュリーナは意識を失つた。

**戴冠記念祭　＝5月3日　中編＝（後書き）**

次は後編です！

負傷したアシュリーナとマンドレアはどうなるんでしょうか？

終わりが見なくなつてきました……。無事完結できるよう頑張りますので、今後ともよろしくお願いします！！

**戴冠記念祭　＝5日目　後編＝（前書き）**

時は夕方。アシュリーナが意識を回復したところから始まります  
では、本文をどうぞ！

目が覚めると西口が傾きかけていた。

「う……」

「姫さん……お目覚めですか？」

呻いた彼女に声を掛けたのはカイルだつた。

「カ……イル……か」

起き上がるうとした……が、体が鉛のように重く、腕が痛み起き上がる」とは出来なかつた。

「姫さん……どうかそのまで」

「うん……この腕……本当に折れたんだ？」

「ええ。侍医に固定してもらいましたので、大丈夫だとは思ひますよ」

ふとカイルの体に視線を移す……その体には包帯があちこちこ巻かれていた。血が滲んでいるところもある。

「カイル……それ……」

「ああ、これですか？大したことないですよ……それより……」

「？」

カイルは続きを言おうとしたしない。まさか……！？

「今度はアンドレア将軍が重体です」

……やつぱりね

「従者が重体なのに見舞いに行くことができない……なんか情けない」

「そんなことないですよ！アンドレア将軍も言つておられました

……どうか心配しないように、と」

「……何があったんだ？私が意識を失った後……ヨシュアがやつ

て来たところから、私には意識がなかつたんだ……あの後ビリになつたんだ？」

「そうですね……」

カイルはぽつりぽつりと話し始めた。

「エリ様っ……！」

ようやく起き上がつたサクが叫ぶ。

「私は大丈夫だ……！それより女王を倒したぞ！」

その言葉に、交戦中だつた女たちの間から嬉しそうな声が漏れる。

「アシュリーナ……様……」

ヨシュアがか細い声で言つ。

「将軍！しつかりしてください……！」

支える衛兵が、今にも倒れそうなヨシュアに言つ。

「私のことは良い……それより……」

ヨシュアが指差す方向には、仰臥したまま動かないアシュリーナと、腹部から出血しても尚、戦い続けるアンドレアの姿があつた。

「陛下っ……！」

衛兵が叫ぶ。それを受けた矢を抜きながらサルーシュ……いや、

『エリ』と呼ばれた女が見ていた。

「心配するな。まだ死んではない……腕は折らせてもうつたがな」

しつと返されヨシュアはキッとエリを睨む。

「お前がやつたのか……！」

「まあね」

「……おい衛兵。もう一本弓をくれ

手を出す。が、そんな無茶な！？と衛兵に言われた。

「将軍は本当はまだ安静にしていいなくていけないのですよ！？少

しだけとこうから連れてきたものの……それだけは許しません!」

「……ちつ

舌打ちをして、衛兵を睨んだ。その田 線のよつな細い田に衛

兵は竦みあがる。

「役に立たん奴だな……」

腰に下げていた剣の柄に手を伸ばす。

「手負いだからってなめるなよ」

「ほあーお前が来るのか……てっきりカイル将軍が来ると思つて  
いたよ」

「望み通り行つてやうつか?」

カイルがエリの元までやつてくる。確かに交戦していた女は……  
肩から大出血をして蹲つていた。

「なんなんだ、お前?姫さんといい、アンドレア将軍と言つて……  
何の恨みがあるのか?」

「それは勿論

カイルが綺麗に被せて言つた。

「ムスリ滅亡の仇か?」

「そうだ……このままでは主上が浮かばれない……！」

「あのさあ……そういうのって《ハツ当たり》って言つんじゃな  
いのか?」

「黙れ……《ハツ当たり》ではない!れつきとした仇討ちだ!!」

エリが怒りをあらわにしてアシュローナを蹴飛ばそうとする。し  
かし、それは叶わなかつた。

「エリ様!大変です!!」「の方」が 来られます……!!

エリの顔が強張る……明らかに動搖だ。一呼吸置いた後言った。

「……それは本當か？」

「そうです！」

エリは少し考えた後、踵を返し大広間から出て行った。

「待て！！」

カイルが叫ぶ。エリは立ち止まり応える。

「……今お前たちは殺されなくても、どうせ明日は死ぬ……寿命が延びたな」

フフツと笑う。

「明日はせいぜい足搔くことだな……無事なのはお前しかいない。女王も無防備だ……残念ながらこの国は砂漠の砂と化すだろうよ……楽しみにしていなさい」

そう言つてエリは仲間たちと出て行つた。

はあーっとアシューリーナは息をはぐ。

「サルーシュの本名はエリ……やつぱり偽名だったか。そして……明日その『あの方』というのが来るのが来るのか……。カイル、何か思い当たる節は？」

「ないです」

「そう……ソネアはどうなった？」

「先ほどまで起きていましたが、また眠りました……姫さんはごめんなさい」と言つてましたよ」

「そりゃどうも」

「兄さんは無理が祟つて発熱してましたが、もう下がつたことでしょう」

「……怪我人は寝てればいいものを。カイルも疲れたでしょ？ もう今日はお休みなさい」

「え……でも」

「でも、じゃない。あなたは今日一番働いたんだからもう休みな  
さい」

「…………わかりました……姫さんも大事に」  
はいはい、と手を振つてアシュリーナもまた深い眠りへと落ちて  
行つた。

戴冠記念祭　＝5月＝ 後編＝（後書き）

長文すみませんでした m ( - - ) m

6月についに『あの方』が出来ます！

更新はいつになるかわかりませんが、楽しみにしていてください

ありがとうございました

戴冠記念祭　＝6月田　前半＝（前書き）

6月田に入りました！

予告通り『あの方』が登場します

では本文をどうぞ

アシュリーナはもう既に起きて大広間へと向かっていた。王宮はいつも無く静かだった。それは多分賓客は外出を控えるように伝達し、ダングラジエの武官・文官、侍女などにも必要最低限の外出しか認めていないからだらう。

腕に痛々しいギブスを巻き、険しい顔で歩き続ける。すると途中でカイルに出会った。

「姫さん、おはよ！」

「おはよう……アンドレアとヨシュアのところには行つたの？」

「ええ勿論……將軍は寝てましたけどね。顔色も昨日よりは格段に良かつたですよ。兄さんは相変わらずです。熱は下がつたからいい、つて支度してましたよ……無理するなとは言つておきましたがね」

「それでいいよ……『あの方』とやらはもう来てると思つ？」

「……衛兵たちが騒いでないからまだじゃないんですかね？」

無言のままアシュリーナは大広間へと入つて行つた。

大広間にはまだ誰もいなかつた。

「……あいつらもまだ来てないってか……」

すたすたと玉座の両隣にある神像へ向かう。そしてそれに向かつて跪く。

「……今日こそは私たちに助力を願います……父さんと母さんと犠牲になつたみんなの仇を討ちたいんです……どうかお願ひします」

必死に祈つている姿は小さかつたが、なにか神々しいものを感じた。

そこへヨシュアが入ってきた。

「アシュリーナ様……『無事ですか』

「ヨシュア……お前、無理するなと言つたでしょ！何でちゃんと休まないの！？」

「……貴女様には私の気持ちがわからないのです」

「なんだつて？」

「一人だけ刺客の刃に倒れ、肝心な時に出動できなかつた……将軍なのに務めを果たせないこのやるせなさ……貴女にはわかりますか？」

「……わかるさ」

ヨシュアは細い目を少しだけ開く。

「この国の王なのに私は誰かに守つてもらわないと王座に座つていられない……自力では私はあまりにも非力で小さい人間なんだ……それがお前にはわかるか？」

「……わかります……すみませんでした」

ヨシュアは俯いた。アシュリーナはヨシュアにそっと抱きつくる。彼もそれに応えてただ佇んでいた。

「もういる……あつ、ヨシュア将軍がいる……元気になつたんだねえ～よかつたね」

体力を回復したロザが声を上げる。その後ろからゾロゾロとムスリの女たちが出てきた。しかし若干人数が少なかつた。

「カイル将軍のおかげで戦闘要員が減つたわ……まあ今日は『あの方』がお見えになるから、どうつてこともないけど

1人の女がクスッと笑う。

「『あの方』って誰なんだ？」

「『あの方』……今まで5年間の間に3個国を滅ぼしたお方よ」

「……それって本当か？」

「本当かどうかはこれからわかる」とじゃない?」

「ふざけないでほしい……」

エシュアが弓をつがえ、カイルが抜剣する。しかしロザが思いつき手を振る。

「ちよつとー今日は『あの方』が来るまで待つてないと、体力の無駄だよー。ボクだって嫌だよ……乗り移る奴いないし

「なんだと……」

今にも2人が飛びかかりそうだった……が、そこでサクが歓声を上げた。

「見てーーーといひう来られたわーーー！」

アシューリーナたちは一斉に振り返る。そこには馬に乗つて優雅にやつて来た1人の少女がいた。見た目は15歳ぐらいの小柄な少女だった。とてもじゃないが国を簡単に滅亡させるような感じじゃない……しかし何やら異質な雰囲気を誰もが感じた。

少女はみんなの前までやつてくると、馬から華麗に飛び降りた。そしてフードを払つ。

「女王陛下、ごきげんよう」

もう笑いかけた彼女の目は薄紅と緑の神秘的な瞳ワインレッド オッドアイだつた。

戴冠記念祭　＝6月三　前半＝（後書き）

どうしてもオッズアイな人物が欲しかったんですね……許してください（何を？）

では、読んでくださいありがとうございました（・・）

戴冠記念祭　＝6月日　後半＝（前書き）

ついに『あの方』も登場し、物語は急展開を見せます  
では、本文をどうぞ

「女王陛下、『さげんよ』」「<sup>オットド・アイ</sup>神秘的な瞳の少女が言つ。ムスリの女たちはその姿を認めると走り寄つて行つた。

「宗主様……『ご無事でしたか』

「ええ……それより、あの子が立つてこるところとは任務失敗かしら?」

彼女らはその冷たい声に体を強張らせた。

「……申し訳ございません……しかし、『』の將軍を2名負傷させることができました」

「言い訳はいいわ……私は結果だけを知りたかったのくつ、と声を漏らしその女は引き下がる。そして少女はエリの元へ悠然と歩いて行つた。

「エリも良い様ね……『』に傷を受けて……」

「すみません」

「他の子も何やつてゐのかしら」

その一言にみんな一様にしゅんとなる。

「お前は一体誰だ?」

アシューリーナは少女へ尋ねた。彼女はゆつくつと顔を『』に向ける。

「ああ、挨拶がまだでしたね」

につこり笑つて続ける。

「私は『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>と申します」

深々とお辞儀をする。しかしアシューリーの顔は険しかった。

「そんな趣味の悪い名前にする親はいないだろ?……私は組織名を訊いているのではない。貴女の名前を訊いているんだ」

「私の名前ですか」

『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>と名乗った少女は考え込む。そしてじばらくした

後解答した。

「私は名前を捨てたんです……強いて言つなら『マリア』、とでも呼んでもらいましょう」

「『マリア』、か……変な趣味だな」<sup>イエス・キリスト</sup>

『マリア』……遙か昔この世に救世主を産み落とした聖母の名前だ。彼女は慈悲の象徴であり……神たる救世主の産みの親、つまり新しい世界の根源に位置するものだ。

わざわざ組織名を『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>とするのには、神が見限った国は滅ぼされる……文字通り、国は『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>を迎えるといふことなのだろうか。自分たちが神になつたつもりか?

「では『マリア』……なぜ貴女は我が国を滅しよつとするのだ?」

「別に……私が指示したわけではないわ。ただ私は手助けしてい るだけよ」

クスクスッと笑う。

「私たちは何かしらの絶望を抱えて集まつた者たちで出来ているの……一個人の時もあるし、この子たちみたいに集団の時もある……復讐の種に私が水をやつしている、それだけのことよ」

楽しそうに笑う……笑うところじやないだろ?がー…

「そうねえ……ここは一筋縄には行きそうにもないわね。思つたより頑張ってるわ

「何つ!」

カイルとヨシュアが反応する。それを見て、また面白そつに笑う。

「一旦私たちは引きましよう……何も連れて来なかつたから、さすがにここで滅ぼすことは出来ないわ……何事にも用意が肝心」

『マリア』は翻つて自分が乗つてきた馬に乗る。

「今度来るときは……そうね、バジリスクでも持つてくるわ……

そうすれば、反撃できないでしょ？」

その言葉に衛兵たちが顔を強張らせる。バジリスク……伝説上の妖怪を彼女らは手にしているということなのか？　そういう動搖が走る。

「エリ……他の子も帰るわよ」

乗馬したまま言い放つ。それにエリたちは従つた。

「またいつか会えるといいわね

「良くないわ……貴女たちは砂漠で野垂れ死にしてくれた方がいいわ

「まあ、そんなこと言うの？ 酷い女王様ね」

また笑つた……彼女の敵はあるでいないかのようだ。この状況でさえも楽しんでいる……そんな雰囲気を出していた。

「では……私に会う前に死なないでね

彼女らは去つて行つた。それをダングラジュの女王とその部下一同が見ていた……アシユリーナの顔はいつも増して険悪だった。

「バジリスクってなんですか」

そんな方がいらっしゃるかと思いますので、某小説に載っている説明を書かせて頂きます。

「バジリスク」

ヨーロッパ及び中近東や北アフリカでは、バジリスクが世界で最もおぞましい生物だとされている。だが、バジリスクを見た者はほとんどが殺されてしまうので、その姿は想像で描くほかない。雄鶏が産んだ卵をヒキガエルに少なくとも1日は温めさせる。すると生まれてくる。その鳴き声は聞いた者の麻痺体を麻痺させ、その視線は植物を枯らし、飛んでいる鳥を焼き殺す。

大きさは蛇よりも小さいが、上記の威力は凄まじい。

では、次話も楽しみにしていてくださいね

**戴冠記念祭 = 最終回 = (前書き)**

ついでに戴冠記念祭も最終回を迎えました

長かったのですが、これで終わりです（話はまだまだ続く予定ですけどね）

では、本文をどうぞ

嵐が去った翌日、賓客たちは自國への帰路に着くことになった。

アシュリーナが彼ら一人一人に挨拶していく。

「今回はどうもすみませんでした……貴国を危険な目に令わせるなんて……私どもの監督不行き届きで御座いました。まことに申し訳ございません」

深々と頭を下げる、賓客たちは笑つて手を振る。

「そんなことないよ……陛下はまだ幼くていらっしゃる。初めての失敗で嘆くことないよ? 大丈夫だ! 奴らがまた貴国を攻めてきたら、いつでも言つてくれ。すぐに助けに行くからな」

「ありがとうございます」

「そんなかしこばらなくていいよ! 小さい子は何にも悩みがないように笑つてるのが一番だ! では……陛下お元氣で」

優しい一言に涙が出来そうになるのを堪え、アシュリーナは一ヶ口笑つた。

そうだ、その顔だよ、と先ほどの男は言つた。他の賓客もそうだ……何かあつたら援護するから気兼ねなく言つてくれ、とみんな笑顔で言つてくれた。

賓客たちの見送りが済んだ後、アシュリーナは深い溜息をこぼす。

「いろんなことがありすぎて……わけわかんない」

不意に涙がこぼれる。

「姫さん、しっかりしてください……大丈夫ですよ、僕たちはいつも姫さんの傍にいる。大丈夫だって! ……」

カイルがいつも調子で励ましてくれた。

「ありがと」

さらに涙が溢れ出す。優しい臣下に恵まれたことに感謝しかなかつた。

その時、タルカシが走り寄つて来て、アシュリーナとカイルに向かつて叫んだ。

「アンドレア将軍がお目覚めになりましたー！」

「アンドレア……『めんなさい』

アシュリーナがベッドに横たわるアンドレアに向かつて言つた。

「『めんなさい……つて何ですか？』

「私の事情に無理やり引き込んだせいでアンドレアが大怪我してしまつた……本当に『めんなさい』

「いやだな……今日はやけに殊勝じやないですか……いつものアシュリーナ様に戻つてくださいよ」

血の滲んだ包帯を腹部に巻いたまま、アンドレアが笑つて答える。

「それに、これはアシュリーナ様だけの事情ではないんですよ……貴女の父上様・母上様の臣下でもあつた、私たちの仇討でもあるんですから……こんな大きな荷物、貴女の小さい肩では背負いきれないでしきう？……強気のアシュリーナ様も良いですけど、たまには私たちを頼つて、甘えてくださいよ」

「アンドレアの……バカつ」

アシュリーナがワンワン泣き出した。それをアンドレアとカイルが微笑ましそうに見守る。丁度その時入ってきたヨシュアは何が起きているのかわつぱり分からず、啞然としていた。

「それで、カイル将軍」

アンドレアが口を開く。

「あのムスリの女たちは一体何者だったんだ?」

「ああ……昨日奴らの宗主なる人物が来てましたよ。歳は……14・5ぐらいだったな……。そいつも女なんですけど、またいざれ来るつて言つて帰つて行きましたけどね」

「そうか……まったくもつて変な輩だな」

「カイル……奴らはいつ来るつて?」

「それがさあ、兄さん。わかんないんだよ……ほら『天災は忘れたころにやつてくる』っていうノリなんじやないの?」

「おい……まあそれにも一理あるな」

「とにかく、奴らがいつ来てもいいように我々は一層精進せねばならないってことですね。これからもアシュリーナ様をお守りし、この国が繁栄するように頑張りましょう、……ね、アシュリーナさ……」

…

アンドレアが言葉を切らす。彼の目線の先を辿ると……さつきまで泣いていたアシュリーナがベッドの縁でスヤスヤと寝ていた。

3将軍は互いに顔を見合わせ、フフッと笑う。

「……いろんなこともあってアシュリーナ様もお疲れなのだろう

……ほら、タルカシ殿!アシュリーナ様を寝室へお運びください」

「はい……まあアシュリーナ様!こんなところでお眠りになつて本当にお疲れ様でした」

タルカシが優しくアシュリーナを抱きかかえる

ダングラ

ジエにも平和な日々が再び訪れようとしていた。

**戴冠記念祭　＝最終回＝（後書き）**

はい、いよいよ次回から新章突入です

ちょっとだけネタバレすると……5年後の世界が舞台です！  
当然アシユリーナは14歳で……ここからはトップシークレットです（笑）

では、次話もお楽しみに

長い間「精読ありがとうございました」とおまけたm（ - - ）m

## アシュローナの報告（前書き）

予告通り14歳になつたアシュローナからこの5年間にあつたこと  
を報告してもいいが、ところが無責任な回です……（笑）

では、本文をどうぞ

## アシューローナの報告

14歳になりました……戴冠記念祭から5年が経つたといつゝと  
ですね（笑）

まず、一番変わったことと言えば……ヨシュアが結婚したことです  
かね？カイルも結婚したんですけど、別に「ああそう」で終わります  
よね？あのヨシュアがですよ！？聞いた時には我が耳を疑つた  
ものです……しかも双子が出来ましてねえ……実はムツツリスベ  
だつたということかしら？名前は確か、女の子のほうがシャイ、男  
の子のほうがナルだつたような……？どっちも顔が似てるからわか  
んないですよ。というか双子の片割れの子供も双子というのは、微  
妙ですよ。うちに双子が2組もいるんですから、……ここは学校じや  
ないんだよ？……失礼。因みにカイルのところは子供はまだいなく  
て、アンドレアは依然独身ですよ。彼曰く「募集中」とのことです  
ので、みなさんいかがですか？まあ私はお勧めしませんけどね

あの『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>たちはこの5年間ここには来てませんね……  
私の最後の言葉通り野垂れ死にしてくれたらいいんだけど。調査に  
行かせたら、死体なんて残つてないし、原因不明で滅んだ国もいく  
つかあるから、生きてるんでしょうね……まったく鬱陶しい奴らだ。  
どこかで返り討ちに遭えればいいものを……そしたら私たちの手を省  
くことができますしね

王宮にいるみんなはいつも通り元気です……ホントにうるさいぐ  
らい元気です。原因はチビが2人増えたからでしょうね。

私は海辺の国、トステムの王の戴冠1周年記念で呼ばれたから行くことになりました。初めて海を見るんですーー楽しみですねー（笑）

独身男が私を呼んでるんで、この辺で。さよなら

## アシューリーナの報告（後書き）

……「こんな感じです 相変わらずダングラジエは平和です！」

ではノシ

## 出発前のHulu（繪葉や）

前回も書きました通り、アシュリーナたちは海辺の国、トステムに出発するんですが、その少し前のことを書きたいとおもいます

「アシュリーナ様！！準備はよろしいですか？」

タルカシの声が響く。

「大丈夫だつて！全部侍女に任せたから」

14歳になつた女王、アシュリーナが答える。

「全部つて……アシュリーナ様！！」

「ああ～うるさい、うるさい……少しは黙つて。つたくタルカシはいつも怒鳴つてばっかりなんだから……」

タルカシの怒りから逃れるためにアシュリーナは剣を持って部屋を出た……自由奔放な性格は少しも変わつてないようだ。

中庭に出ると、抜剣し、それを振り始めた……練習しているのであって、周囲を傷つけようとしたわけではないらしい。

5年前の日に誕生日の贈り物として例の女　エリにもらつたものだ。

いつか私を超えてみせて

その言葉が今も耳に残つている。それを胸に今までアンドレアたちと練習してきたものだ。かなり上達している。あの頃はアシュリーナも小さく剣はそれなりに大きいものだったが、今は背も充分伸び、すらりと伸びた手にフィットする大きさだ。

「「あしゅりーなさまあ～」

幼い声が聞こえた……一重奏。これは誰が何と言おうと間違えない。ヨシュアの子供、シャイとネルだ。

「まあ、よく来たわね……ちゃんと名前を憶えてくれたし……いい子ね、シャイ、ネル！」

名前と顔が一致しないから、なるべく一緒に名前は言いつ。そして走り寄つて来た2人の頭をなでると、2人は撫つたそつに笑つた：「まだこのころは可愛い。でも将来あんな堅苦しい父親に似ないでもらいたいものだ。

「誰が堅苦しい父親ですか、アシュリーナ様？」

ヨシコアが現れる。

「勿論あなたのことですけど？違つたかしら？」

負けじと言い返す……ヨシコアが眉をひそめた。

「いい加減にしてくださいよ……私をからかうのは止めてもらいたませんか？妻からもからかわれるんです」

「まあいいことじやないの！私が奥様」もつとヨシコアの弱点を言つておいてあげるわ」

ヨシコアの顔が青ざめる……そして深い溜息をついた。

「「おとうさん！あそんで！」」

シャイとネルがヨシコアに駄々をこねる。

「駄目だ……お父さんはトステムに行く準備をしなければいけないんだ」

……自分で『お父さん』って言つてる……ブツ（笑）

「なんですか、アシュリーナ様……？」

「いや、なんでもない……よし！シャイ、ネル！私と遊ぶか！？」

「「やつたあ～」」

ひとつアシュリーナに張り付く。

「ほら、ヨシコア！準備して來い」

「わかりました……2人ともいい子にするんだよ」ヨシユアが優しく言った。チビたちは元気よく返事をした。

……出発2時間前のことであった。

## 出発前のH宮（後書き）

はい、こんな感じです

勿論シャイとネルはお留守番です（笑）ヨシュアの奥さんは一体誰  
なんでしょうか……？いつかは明かすつもりです。w

こんな感じで新章が始まります！

## 旅路（前書き）

いよいよ出発です

さて、今回はゆるーい感じで書きました（笑）

それでは本文をどうぞ

チビたちと遊んでせっかくの服が汚れてしまったのでタルカシにお叱りを受けたが、いつもの通りスルーして、先ほどアシュリーナ一団は出発した。

今回はダングラジエからはかなり遠く、砂漠を超えたところにあり、海を臨む国トステムの新王の即位1周年記念に招待された。5年前に自分も1周年記念でここに先王に来てもらつたような気がするので行くことにした。というより彼女はそんな儀式よりも、初めて海を見るという体験に心が動いたようだが。

「……どうにかなんないのこの景色……どこに行つても砂の海しか見えないじゃない！」

そんな当たり前のことを言われ従者は困惑していた。

「アシュリーナ様……まだ出発して何時間も経つてないのですよ？というよりも我が国は砂漠の中心にあるのですから、まだまだ砂漠を超えることは出来ません……少なくとも5日はかかるでしょうね」

アンドレアが答える。それにアシュリーナはふてぶてしく言った。

「……行進速度を速めることは出来ないの？もう私飽きちゃつた」「……アシュリーナ様……飽きたは無いでしょう？貴女は砂漠を統べる王なのですよ？ここも貴女の領土なんですよ？」

「だったら切り捨てようか……代わりにオアシスらへんをもつと手に入れようか」

そんな恐ろしい独白をするアシュリーナを見てアンドレアが溜息をつく……それ本気で言つてますか？

「冗談に決まってるでしょ！そんなバカげたことするわけないで  
しうがつー！……ホントあんたって頭が固いよね」

ケラケラ笑いながらアシュリーナが言った。

「……まあ旅は始まつたばかりですから大人しくしていくください」

「はあーと溜息を再度ついた……溜息をつくな、トマソンドレアの  
頭に拳骨が落とされた。

その日の夜……澄んだ空に星が輝いていた。

「やつと1日が終わつた……あと4日も砂の上かよー背中痛いし、  
もう嫌」

アシュリーナが砂の上に立てたテントの部屋で嘆ぐ。

女王なので他の奴とは扱いが違う。彼女はラクダに引かせた狭い  
御車で移動するのだ。お蔭で足は延ばせないし、とにかく身動きを  
取りづらいから姿勢を変えることなんて不可能に近い。しかも降り  
たいと言えば例の3将軍に止められる……とにかく息が詰まった。

「そんなこと言わないでください」

そう言いながらヨシュアが入ってきた……その後ろにカイルがい  
た。

「なに勝手に入つてきてんだよ」

「別にいいじゃないですかあー。何もするわけじゃないし……そ  
れよりこれ

カイルが籠を差し出す……中には新鮮なブドウが入っていた。

「これどうしたのよ……ここはブドウなんか一房もならない不毛  
地帯のはずよ」

「パアーッとカイルが笑う。

「さつきキャラバンの人たちに会つてね、これビッグで

「ふーん」

「そう言いながら一粒口に運ぶ……瑞々しくて甘い。

「おいしい……2人とも食べなよ」

そう言つて差し出すと、どうもと言ひながら2人もつまみ始めた。

「これで機嫌直してくさいよ？まだ先は長いんですから」  
カイルがブドウをパクパク食べながら言つ……彼だけでもう半分  
は食べてそうな勢いである。

「はいはい、わかりましたー……もう寝るから出てつて  
シッシと手を振る。

「ではこの辺で……おやすみなさいね~」

アシュアが一礼して、その後ろにカイルがついていく……手をピ  
リピリと振りながら。

2人が出て行つたあと、いつも通り彼女はまだ見ぬ海と若い王を  
想像した。

海の国の王は自分と同年代らしい。その王が統べる海とは……？

一時思いを馳せてから、アシュアーナは眠りについた。

トステムの王様はどんな感じなんでしょうか……

砂漠で育つたアシュリーナはまだ「海」を見たことがないんですね  
（・・＊）

私も厳密にいふと海に行つたことがありません……見たことはある  
んですよ？なんたつて住んでるところが海に囲まれていますから（笑）

では

## 旅の空へ（前書き）

旅の詳細はすつ飛びして、こやなつら四三四の話です

その間特に何もなかつたので安心していくださること（何事も）

では、本文をどうぞ

毎日ちまちま歩いて、ようやく4日目が終わる5日目が来た。

「今日でこの旅も終わりね……やつと終わるかあ」

アシュリーナが名残惜しきでなく、嬉々とした声を漏らす……それをばっちりアンデレアが聞いていた。

「何喜んでるんですか？トステムに着いたら、アシュリーナ様の嫌いな祭典があるんですよ？しかも全日程いるんですから早く帰れませんよ？」

フツフツと怪しい笑みをこぼす。

「わかつてないなあ……確かに私は祭典が嫌いだ！だけど今回の主役は私ではなく、トステムの王なのだ！私はちょっと隅の方にいて、嫌になつたら海に行く……寧ろ楽しみだぞ」

……まつたく何考えてんだ、この女王様

そう従者全員が思つた。

「ホンと咳払いしながら、アンデレアが代表して言つ。

「アシュリーナ様……海を見たことが無いから楽しみになされてるのはわかります。が、私たちは招待されたのであって、謂わば『賓客』なのです……祭典がつまらないからと言つて、途中で抜け出すなんてナシですよ」

「こりうのはばれなきやいいんだよ？知つてる？」

アシュリーナがしがれつと言い返す。それに、と言葉を続ける。

「あんただつて楽しみなんでしょう？この国は美人が多いからし

いから……あんたこそ物色しないでよ？ダングラジュの将軍が他の國の記念式典に行つて女を連れて帰つた……なんて恥ずかしいことしないでよ」

アンドレアが顔を真っ赤にして反論する。

「アシユリーナ様つ！なんてことを仰るのですか…？それぐらいのことは心得ております！私は…断じてそんなことを…！あなたのお父上様に顔向けができなくなります…！」

「大丈夫よ。あんたがそんなことするはずがないってこののは私が一番知ってるから…まあ、そのうちいい人見つかるよ（笑）」

「……最後の一言は余計です」

アンドレアがしゅんとなる……意外と気にしてるのか？まあ大丈夫でしょつーまだ若いから…！

そういづしていのうちニ、ダングラジュでは嗅いだことのない独特な匂いが漂ってきた。

「臭い…」

アシユリーナが思わず鼻をつまむ。するとエシュアとカイルのテンションショーンが少し上がった。

「アシユリーナ様！これは潮の匂いですよ」

「潮…？」

「そうです……トステムに近づいてきたといづ証拠でしょ…」もうすぐ海も見えると思いますよ

それを聞いて、やつたあと声を上げて喜んだ。

「これが…海の匂い…！」

ショッパいような生臭いという変な匂いが漂つてきたがアシユリーナは気にしてない…初めて海の匂いというものを嗅いだ彼女にとっては、とても新鮮なものだつたからだ。

しかししじばらぐするとやはり我慢できなくなつたのか、顔をしかめる。

「臭い…………です…………早く着かないの？」

「もうすぐですよ…………懐かしいなあ」

カイルが呟く。

「どうして？」

「義父に連れて行つてもらつたことがあるんですよ…………寂しいだろうからつて」

この双子ヨシコアとカイルは幼いころ家庭の事情で養子に出された。そこの中親は道場を開いていて、多くの門下生を抱えていた。そして大層な旅行好きだったとか。

「僕たちも海を見たくて2人で一生懸命頼んだら連れて行つてくれました…………いやあ、懐かしいなあ！」

心なしかヨシコアの顔も綻んでいる…………2人にとっていい思い出だつたことには違ひない。

「陛下……町が見えてきましたよ……」

そう先頭を行つていた兵士たちが嬉しそうに戻つてきた…………あんたたちも見たかったんだね。

潮の恋（後書き）

ひとつトーストリームに着きました

次回は王様も登場する予定です……予定ね。

では、あつがといひをしました（・・）三

トステム王（前書き）

では、本編をどうぞ

## システム王

「ダングラジエ王国の国王陛下。到着をお待ちしておりました」

システムに着くと、正装した男たちがアシュリーナたちを出迎えた。

「お心遣いありがとうございます」

アシュリーナもそれに応えた。後ろから続々と同行してきた人間が続く。

全員が来るのを確認して、男たちが笑顔で言った。

「それでは、みなさまのお部屋へご案内いたします。式典は明日行われるので、今日は長旅の疲れをお取りください」

丁寧にお辞儀をされた。それを見た兵士たちが、おおっと声を上げる……丁重な処遇が初めてだったのか、それとも自分たちがしたことがないのか……いずれにせよ恥ずかしいから声は上げて欲しくなかつた。

案内人の男がニコッと笑つてアシュリーナたちを先導していった。

部屋は白を基調としたシンプルだが美しいものだった。備え付けてある窓からは碧く輝く海が見えた。

「すごく綺麗ですね……」

「そう言つていただければ幸いです。我々も自慢の部屋なのですよ。後でシステム王が伺いますので。何かあつたらお気軽にお申し付けください」

一礼して彼らは去つて行つた。

「トステムつてす」いなあ……」

アシュリーナが呟く。そうですね、とアンドレアが返す。

「私ここにずっとといてもいいな……って、嘘に決まってるでしょ  
つ！そんな顔するな、うつとおしい」

先の発言にアンドレアが顔をしかめたので、慌てて訂正した。

「アシュリーナ様は婿入りされても、あなた自身が嫁入りするこ  
とはないんですよ？」

「いや……そういう意味じゃないんだけど……というか私結婚す  
る気ないし」

「え？……血が絶えますよ？」

「それなら遺言で『ネル』に継がせると言つから安心しなさい！」

「お止めください、アシュリーナ様……あれに王位を渡すなんて  
バカなことを」

「黙つときなさい、ヨシュアービツセ私が死ぬ頃には、あんたは  
既に墓の中だからいいのよ……」

「なんと……」

途中参戦したヨシュアも呆れ顔をする……絶対につくるからな！

「いやあ……これは驚いたー・ダングラジHの皆さんほとんでも仲  
がよろしいのですね！」

突然背後から声がしたので、ビックリして（盛大に喧嘩していた）  
3人が振り向いた。

そこには綺麗に手入れされた金髪に健康的な小麦肌をした、少年  
が立っていた。その目は海のように青かった。

「どうひきまでしょ？……？」

アシューリーナが取り繕つたように声をだす……先の発言からして絶対聞いてたな、こいつ。

少年がああー！と声を上げて一コツと笑つ。

「申し遅れました。私がこの国<sup>トステム</sup>の王、レンです。以後お見知りおきを」

この国の専売特許であるスマイルを見せる。

……ちょっと待つて？今この人自分がトステムの王って言つたね……？最悪だ……さつきの会話、完全に聞かれてたよ！？

アシューリーナはフラッとなりそうだったが、なんとか堪える」とができた。でも多分、顔面蒼白。ヤバい……！

## トストーマ (後書き)

出つもしたよー。まかせ……

次回はちやんと五つめかよー。ちひと五種を盛りやつもあよー。

では次話もお楽しみ!

## 春風到来（前書き）

……お久しぶりです　？前の話で書くべきでしたがすっかり忘れていましたw

覚えていてくださつて感激です（泣）

それでは、今回は意味深なタイトルです……え？ そつでもない？ まあそう言わずに、ね（笑）

「「Jの度は私の即位記念祭にお越しいただきありがとうございました」

ありえないほど丁寧に挨拶された……去年そんなことを書つたっけ？絶対言つてないな、うん。少なくとも、団体一つ一つには書つてない。

「「J、いらっしゃりお招きいただきありがとうございました」」Jの国は何もかも美しくて気に入りましたわ」

今私にはこれしか言えない……最高レベル。満点。

そんなアシュリーナの様子を気にする風もなくニバツと笑つてレンが言つた。

「そうですか！いやあ～よかったです！……あ、どうでも。御掛けになつてください」

すつ、と備え付けられてあるソファーに手を差し出す……言葉もさることながら所作も自然で、ホントに王様つて感じがする。私と比べるなよ？

改めて顔を見る……キリッとした顔。いつも海に出ているのかと思うほどその肌は日焼けしていた。でもアシュリーナたちみみたいな砂漠の民の焼け方じゃない。優しい太陽の恵みを受けた感じ……説明になつてない？それは氣のせいですよ。そして輝くような金髪に海のように深い青色……顔全体でトステムを表しているかのようだつた。

そんな顔にも一つ気になるものがあった……頬に入った、3本の線。互いに交じり合つて\*のような印になつていた。まだ新しい傷なのか、周りの肌がほのかにピンク色をしていた。

それに視線を集中させていると、レンがそれに気づいたようだつた。そして恥ずかしそうにポリポリ搔いた。

「これは、トステム王の証なんです……男王は頬に、即位したときに入れるんです。最も女王はこの国にはいまだかつて現れていないので……」

「そうなの……へえ……」

しまつた！やらかした……もつ普通にアンドレアたちと話しているようなノリになっちゃったよー？

……クスクスと笑われた。

「確かに名前はアシユリーナ様、でしたよね？」

「はい……」

「噂通り、本当に可愛らしい方だ」

「はい？」

「いえ……去年はわざわざお招きいただいたにも関わらず、お伺いすることができなかつたので、今日までにお会いした諸国の中の方々にお尋ねしたんですよ。自分と同年代の女王陛下はどうな方なのか、と。」

「……それでみなさま『可愛らしい方だ』と？」

「ええ。噂にたがわづ、可愛らしいですね」

「ハッと笑う……お世辞？お世辞だよね？」

そう思つたのになぜか顔が真つ赤になつた。

社交辞令 といつ言葉があるように、そういうものは大抵間違つていることが多い……今回のことも間違いという方針で。うん、そうしてほしい。

そう自分に言い聞かせ落ち着こうとする……が、依然として顔は赤い。それを見てレンは笑つた……が、カイルがむつとした。

「レン様……アイルダから国王陛下がお見えになりました」  
丁度その時、トステムの、あの案内係を務めていた男たちがやつて來た。

「ああ、そうなの？じゃあすぐ行くよ」

彼らに声を掛けた後、二ヶコリ笑つてアシュリーナたちに言つた。  
「では失礼しますね。どうぞじゆるりとお過いしください……本日はまことにありがとうございました」

ソファーから立ち上がり、悠然と立ち去つて行つた。それを思わず目で追つてしまつた。

不機嫌そうなカイルがボソッと呟く　アシュリーナ様に春嵐が来そうだね。

## 春嵐到来（後書き）

カイル嫉妒。そんなキャラにした覚え無いんですが、自然とそうな  
りました（笑）

『春嵐』が何を指しているかもつお分かりですね？」この章ではこんな  
な感じで話を進めていきたいと思つてます

では、次話もお楽しみに

## 不機嫌到来（前書き）

前回の続きです……多分。

今回もドタバタ劇です（笑）そしてレンとその側近も最後の方で出てきます……どんな側近なんでしょうかね？

では本文をどうぞ

あ、それとついに本作を読んでくださった方が延べ人数で1000人を超えた  
みなさんありがとうございます！まだ続く予定なのでこれからもよろしくお願いします（・・）

「姫さん……なんかあい……じゃなかつたトステム王つて僕とキヤラ被つてません!?」

そんなことどうでもいいよ……別にトステム王とあなたのキヤラが被つていようが被つていまいが。

「そんなことないです!なんか僕の存在感が薄くなりますよおー」

「?」

「陛下。声漏れでます」

「あつわづ」

完全に上の空。

『尊にたがわづ、可愛らしいですね』

笑顔のトステム王……忘れられない、たとえ社交辞令だとわかつても。

そんなアシュリーナを見て、カイルが文句を言つ。

「だいたいあの王ときたら、姫さんに馴れ馴れしくないですか! ? そう思いません? アンドレア将軍! ?」

「……はい? ああ……まあでも歳が近いようですし、親近感を覚えていられるのでは?」

「親近感! ? はつはーん……歳が近いかりつて姫さんは一国の主ですよ! ? それなのに……」

「色目使いやがつて、てか? カイル……豊かな妄想力ありがとう」アシュリーナからの鉄拳(しかも笑顔)。直撃したカイルは痛みに悶絶している。

「だいたいねえ！トステム王が私なんかに気を留めるわけないで  
しょう！！バツカジやないの！？」

「でもアシュリーナ様もまんざらでもなさそうでしたよ？」

「話がこんがらがるからアンドレアは黙つて」

まあ確かに他人から『可愛い』と言われてうれしかった……しか  
も歳の近いトステム王に。そして彼の外見的な魅力にひかれたのも  
事実。だけど、そういう『恋』とかそういう感情じゃない（と思う）  
。

「姫さんー僕は反対ですよ」

「何に？」

「姫さんがあんな男にキヤーキヤー言ひるのは」

「絶対に言わないからー安心しなさい！私はどんな男が目の前に  
立つっていてそんな事言つつもりはないからー」

「果たして……」

「ヨシュアも黙る！」

「僕泣きますからね？」

「なんでー？といふか一旦トステム王から離れなさい！」

「アシュリーナ様、顔ま……」

「黙れって言つてるのーあんた聞こえないのー！？」

アンドレアがひそかにため息をついた。

ここはトステムの王宮の一角。

ここでは静かに時が流れ……普段は。

今日アシュリーナたちがやってきて、すじぐにぎやかになつた。  
今もなにかを大声で話し合つている。話題はわからないが……

今回トステムに来てくれた諸外国の王たちに挨拶周りをしている、

トステム王レン。

アシュリーナたちの喧騒を聞いて思わずクスッと笑う。

「あの方たちは本当に楽しそうだね」

側近のアダムが答える。

「そうですね……一気に花が咲いたようですね、レン様にも」

「……アダム、お前何言つてんだ?」

「いえ、ただの戯言ですよ」

「そう聞こえないんだけど」

「でも、あの方たちが楽しそうだというのは私も思います……」  
「では気兼ねなく話せる人間なんていませんからね」

「そういう人間はお前ぐらいだよ……でもお前も堅苦しいのがわ  
かつた。従者とあんなに仲がいい國の王もいるんだね」

「驚きですね……私が堅物だと言われたのは生まれて初めてです

「そっち?」

ふつと吹き出す。アダムが怪訝そうな顔でこちらを見返す。

レンとは対照的な、透き通るような白い肌。切りそろえられた黒  
髪。そして緑の目。

そんな彼をレンは見つめ返す。

「でも俺はお前のことが好きだよ……勿論従者としてだよ」

「そう言つていただけると嬉しいです……私もレン様のことを慕  
っていますから。勿論王として」

「当たり前だよ……堅物でもお前が側近じゃないと俺は多分ダメ  
だと思うよ?だって王様がこんなんだから」

アダムが初めて笑つた……というより微笑んだ。

……記念祭は明日に迫る。

不機嫌到来（後書き）

アダム氏がこれから出でてくるのは不明です（おこ）多分出でくるでしょう』

アシュリーナたちは多分自分たちが賓客だといふことを忘れていました。そして次話は記念祭当時の様子を書きたいと思います

……ひとつお知らせです（・・・）〇〇〇

もう一つの連載作『咲かせ屋』との兼ね合いから本作の投稿日を日・月・水・金に決めたいと思います！……もちろんテストとか、私自身がこれを決めたことを忘れていたり……なんてこともあります（笑）

では、ありがとうございました

## 海が田の前です（前書き）

今日はアシクリーナの話を投稿します。ひととおりつまつた……はたしてこつまで続くのやうに。

もつタイトルテキトーですね（笑）気にしないでください……私の  
やけにやけい脳みそで頑張って考えました（笑）

## 海が田の前です

アシューリーナは感激の声を上げた……田の前が海です。海だよ、  
海！！

砂漠にも『海』はある……『砂の海』といつ一面黄土色の海が。  
そしてそこに住む生物なんてほとんどいない。いたって茶色とかく  
すんだ赤とか……とにかく単色系。

しかし田の前に広がる『海』は青かったり、青緑色だったり。生  
き物なんてすこすぎる！黄色でしょ、水色でしょ、鮮やかな赤でし  
ょ……しかも水の中に海藻といつものが生えているらしい……サボ  
テン？いや、それはないな……。聞くところによるとワカメとかコ  
ンブの「こと」……。あれってビリビリして生えてるんだ？

「アシューリーナ様。頭が完全に違う方向行つてますよ？」

アンドレアの声で我に返る。

「そんなことないし！ちゃんとトステム王の話、聞いてたし……」

「では、最初からビリビリ」

「……いちいちそんなもん覚えてるかよ」

「私はちゃんと聞いてましたから、覚えてますよ？」

「それはお前の頭がおかしいんだ……私は化け物頭を持つていな  
いのにな。はつはつは」

カイルがくるりとこちらを向き、人差し指を立てた。

「お2人ともうるさいですよ？他のお客様に迷惑です  
手で口を押える……うるさかったかな？お互いの田を自然と見る。  
そしてペコリと頭を軽く下げる。

満足そうにカイルが頷き、再び前を向いた……お前は先生かよ？

トステム王の計らいでアシュローナたおせ一番前での式典参加となつた。

「この国では、この國血縁（とトステムの兵士が言つてた）の海を前にして、永遠と発展を神に願つらし。やはり国によつて文化は違つものだ。レンの服装なんかまるで漁師のようだ……とは言つても漁師を見たことが無いのだが。多分こんな感じなのだらうといつ憶測で……」

「ダングラジュの陛下は退屈ですか？」

「ほえ！？」

いきなり振られた……田の前にレンが笑顔で立つていた。そしてはい、と杯を差し出される。

「これは……？」

『“海の雫”』というワインです……これを儀式で飲むんですよ。みなさんに私の即位記念を祝つてもらつんです

「なるほど……」

「半分飲んで、半分は母なる海に還す……それが我が国の伝統なんですよ」

「へえ……あつ、でも私はお酒ダメなんです」

「大丈夫ですよ。これは『ワイン』と名付けられた『ジース』のようなものです……もちろんお酒の部類なのですが、甘いので陛下もすんなり飲むことができると思つますよ」

「……飲んでみま

まずは一口……本当に甘い。

「おいしいですね！」

「でしょ？」「

お互い笑顔で見つめあつ……そしてはつ、となつてまた“海の雲”を飲む。

半分飲み終えた後、アシュリーナはレンに教えられた通り海に還した。

「陛下、ありがとうございました」

にいつと笑ってアシュリーナが手に差し出した杯を受け取った。

「アシュリーナ様あ」

カイルがなぜか『アシュリーナ』と呼んだ。

「気持ち悪いからその呼び方止めてくれないかしら」

「また……トステム王は……」

「？」

カイルの様子が変だ。それを見たヨシュアがああと声を出す。

「すみません、アシュリーナ様。カイルは多分酔っているんですね」

「は？」

「こいつはいわゆる下戸なんです」

「……」

下戸なのに飲んじゃつたわけ？いや、私もお酒を飲んだのは初めてだつたけど、普通にいけたよ？といつかお酒の味しなかつたじやん……何こいつ？

「アシュリーナ様……！」

ガシッとアシュリーナの腕をつかむ。

「やめなさい！カイル！！」

「アシュリーナ様の顔が赤いです……！」

「それは！あんたが賓客の皆さんの前で、そしてトステム王の前

でこんな恥ずかしい」としてゐるからでしょう……バカっ……」

「……はつ！」

今更氣づくなよ……カイルが顔を真っ赤にしてうわあーとしゃがみ込む。

「カイル……立ちなさい。アシュリーナ様の方がお前より恥ずかしいのだよ」

ヨシュアが兄らしく弟を立たせる。そして一礼した後彼を連れてどこかへと去つて行つた。

海が田の前ですか（後書き）

方言が出ていたなシーン（……出でますね）があつて焦りました（汗）

だんだんアシュリーナが私に似てきました……いや、私がアシュリーナに似てきたのかな？どっちにしろお互い似ています（・・・）

では水曜日のお会いしまじょう

## 側近からの忠言（前書き）

もへ、ぐつゅやべりやで何がしたいのかわかりません……が、なんとか終わらせます！そして次の次で絶対戦闘シーンを入れます！なんの宣言？

もう少し、お付き合いくらいで

29話のグダグダです！

「姫さん、本当にすみませんでした!」

カイルが部屋の前で土下座をして待っていた。

「ほんとーにあんたつて奴はあー……私がみんなの前であんなに謝ったのは後にも先にも今日だけよーバカ!」

なんかさつきから『バカ』ばっかり言つてない?

「というかなんであんたはアレ飲んだのよ?」

「え……」

「見栄、ですよ」

ヨシュアが代わりに答える。

「他の方々はアレを普通に飲んでいた……だけど自分だけアレを飲めないとなると恥ずかしいでしょう? そんな見栄ですよ」

「……飽きた」

はあーと大きなため息。

「これからはちゃんとお断りしなさい……それにもうあなたはお酒飲んじゃダメ」

「はー……でもなんで姫さんはアレ飲めたわけ?」

「だってお酒の味しなかつたじやない」

それでも酔つたあなたは凄いと黙つよ? と心の中で付け足す。

しかし3将軍は顔を見合わせていた。そしてアンドレアが口を開く。

「私たちが飲んだものは……酒氣があつました……なぜでしょう?」

?

カイルがピンと来たらしい。そして威勢よく言った。

「やつぱり！あのトステム王は姫さんを気に入っているんだよ！それで姫さんに気に入られようとして……」

「ばつ……何言つてるのよ！」

でもカイルの顔は真剣そのもの。そんなにトステム王が嫌い？嫉妬？止めて欲しいですね……邪推だよ？

「アシュリーナ様、顔真っ赤」

アンドレア……あなたはそれしか言えないの？もつと氣の利いたこと言いなさい。

助け船を求めようとヨシュアを見る……が、明らかに目を逸らした。

……結局3人とも役に立たない。なんのためにみなさん付いてきたんですか？冷やかしですか？

しかしそんなアシュリーナの思いを早速打ち壊してしまった人物がひとり。

レンの後ろにぴつとりくついている男。じい一つと無表情でアシュリーナたちを見ている。はつきり言って気持ち悪い。

「トステム王……後ろの方はどうなたですか？」

「ああ、こいつですか。これは私の側近でアダムといいます」

ペコッとアダムが頭を下げる。

「それは失礼いたしました。アダム様、私はダングラジュ王国のアシュリーナと申します。後ろにいいますのは私の側近、アンドレア、ヨシュア、カイルです……頭下げなさい」

カイルが頭を下げなかつたから小声で注意する。しかし下げない。しかもしかめつ面して立っている。

それを見てアダムは何を思つたかカイルにつかつか歩み寄つた。

「ア、アダムさん！なんです……」

「あなた、そんな顔していたらみなさん驚きますよ？」

「は？」

「あなたは仮にもダングラジュ王国の1使者なのですよ？国を背負つて我が国に来ているわけでしょう？陛下や他の側近のみなさんが取り繕つても、あなたの顔ですべてが台無しです……それをお分かりでそんなしかめつ面を？」

「なつ……！」

カイルが明らかに狼狽する。でもアシュリーナはおおーと小さく声を上げた。

「アダム！お前は本当にバカじゃないのかー？」

真っ青なトステム王がアダムを引き寄せた。

「お前……どうしてお客様にそんな歯に衣着せぬようなことをすげづけ言つことができるんだ？……ああー、もうほんと最悪」

「なぜですか？私はカイル様のことを思つて申し上げたまでです…

…」自分がどんな立場かお分かりであれば私の言つたことに狼狽な  
どするはずがありません

しつと戻す。カイルが赤くなつていいく。

「本当にすみません！アシュリーナ様……私の側近の無礼をお許  
しください」

「いいえ、とんでもない！許すも何も私はその言葉を求めてい  
たのですから、実際アダム様に感謝しているぐらいですよ！アダム  
様、ありがとうございました！」

ペコッと頭を下げる。いえ、出過ぎた真似をしました、とアダム  
が引き下がる。

……しかし、依然としてカイルとアダムの間に火花が散つていて  
よつた気がしてならなかつた。

## 側近からの忠言（後書き）

アダム氏……なんかもう出れないかもしないとか言つときながら、もつ準主役級のキャラになつてしまつた……！自分の中では印象が強すぎて『レン×アダム』です！レン様、ごめんなさい！

最近知つたんですが、『アンデレア』って女性の名前なんですね（泣）

では、ありがとうございます！……無事戦闘シーンを書けるよう持つていきます！

## カイル謹慎（前書き）

はい、タイトル通りです。カイル氏が謹慎になります……  
というのは私の癖です。大体の人は「～氏」と呼びます……え？意  
味わからん？スミマセン（汗）

やつとりの話しきました では、本文をどうぞ

## カイル謹慎

夕刻の宴。アシュリーナたちは勿論招待された。が、彼女らの中にカイルの姿はなかつた。

\* \* \* \* \*

「あんた、謹慎。宴に来なくていいわ」

レンとアダムが帰つた後、そうカイルに言い渡した。  
アンドレアたちにも動搖が走る。

「ちょっと、アシュリーナ様！ それは……」「私たちだけでアシュリーナ様の護衛を？」  
ふん、と鼻を鳴らす。

「別にカイル連れて行つたつて、トステム王と喧嘩するでしょ？  
トステム王だつて折角の祝いの席なのにいい思いしないわ。それに

……」

「それに？」

「カイルは迷惑かけすぎ。護衛に不安があるなら将軍職を降りなさい……私だつてもうあの時と違つて自分の身ぐらには守れるわ」

あの時 5年前の戴冠記念祭。

『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>一団の襲撃でアシュリーナもアンドレアもヨシュアも、みんなみんな傷ついた。アシュリーナは当時8歳。自分の身を自分で守れなかつたことに強い自責の念を感じていた。『幼いから』では済まない。そう思つて事件の後から3将軍と、エリからもらつた剣の稽古をしてきた。結構な実力であると誰もが認めるようになつた。

「私だって成長したんだから、別に1人欠けたところでどうつてことないでしょ？」

「しかし」

「もう、みんな国に帰つたら！？」

怒鳴り声……久しぶりに聞いたなあ、とつい思つてしまつた。

モ「私知らなかつてす」  
「く恥ずかしにんたか?」

お迎えに上がりました、という声が聞こえアシュリーナはスタステ行つてしまつた。それにカイルを除いた将軍がついていく。カイルはただ窓の外を見ていた。

「あれ？ カイル様は？」

レンガノシニリナたせを迎えたが云ふれる

「ええーー！？」

レンが驚きの声を上げる。

そんな迷惑ななんて……そんなことないですよ!「

「少佐。セシル様子を見たところ、以前はお嬢様の

つ  
た。

「陸ノア」

トステムの侍女がアシュリーナに飲み物を渡す。

「ありがとうございます」「やいります」

「ぐつと一口飲む……甘いが微かな酒氣。

「ワインですよ」

レンがニッコリしながら言つ。

「本物の、ですか？」

「ええ、まあ。でも甘くて飲めないことはないでしょ？」

「そうですね……このワインは甘いのですね」

「そうでもないですよ？ なんなら持つてこさせましょうか？」

「……いいえ、結構です」

もうつたワインをちびちび飲むだけで精一杯です、はい。

ちらつと後ろに控えていたアンドレアとヨシコアを見る。

彼らもなにかを飲んでいる……まあワインなんでしょうけどね。

そう思つとカイルの姿が浮かんで、少し胸が塞がるような思いだつた。

つた。

宴も中盤。酔つている人間も何人かい。トステム特有の陽気な雰囲気に誰もが酔いしれていた。

「遅れましたあ」

突然の声、そして向こうの方から近づいてくる人影。門兵がざわざわしている。押しとどめようとしているらしいが、その人物は無視してどんどん歩いてくる。

「誰だつ……！」

立ち上がったトステム王の顔に焦りの表情が浮かんだのを見た。

「どうなさつたのです……」

アシユーリーナが声をレンに声を掛けたのと同時に近づいてきた人

間が喋つた。

「義兄さん！お待たせしました」

ぱわつとフードを外す。レンと同じく金髪碧眼の男……義兄さん！？

## カイル謹慎（後書き）

新キャラ登場させました……が、なにやらレン氏と因縁がある様子  
……

これからちょこちょこその因縁を明かしていきたいと思います！  
乞うご期待ですね では……予告通り戦闘シーン書きますよ、下手  
だけどｗ

それでも読んでくださると嬉しいです（・艸・＊

## 義兄と義弟（前書き）

前回の続きをですね……いつもそつですけど　≡

今日は宣言通り戦闘シーン入ってます（…?）でもなんかなあ  
…………ううん…………誰か書き方教えてくれませんか（泣）

「なんでお前が……！」

レンの顔に明らかな動搖が走る。

金髪男がクスクスと笑う。

「だつて義兄さんの戴冠記念祭でしょ？ 義弟おとうとが来るのは当たり前じゃない？」

「……お前は招待していないはずだぞ！ なぜ来たんだ」

「だからあ……ふう、話すのもめんどくせくなってきた」

「帰れ……私はお前のことを弟だと思つたことは一度もない。早く國に帰れ」

「相変わらずひどいなあ、もつ」

ケラケラ笑わらわら……義弟とはどうしてことなのか……。腹違はらたがいの弟とか？

「こわいは義兄さんの恋人？ 可愛いねえ！ 義兄さんもやるじやない」

ずいっと顔を覗きこむ男。うわっと思わず声を上げる。

「ち、違います！ 私は……」

「帰れって言つてるんだよ……お前の顔なんか見たくない！」

レンが男を突き飛ばす。男の目が妖しく光る。

「いつたいなあ……」

レンが彼を睨みつける。アダムがつかつかと歩み寄つて男を外へ連れ出そうとした。

が、アダムが突然悶もんえ始めた。顔が真つ青だ。見ると腹から真紅に染まつた銀色の鋼こうが突き出ていた。

ニヤリと男は笑う。

「アダム、お前には用はないんだよ……引っ込んで、ここの裏切

り者！」

思い切り蹴飛ばす。悲鳴があちこちから上がる。

「あなた、何しているんですか！」

アシュリーナが叫ぶ。血糊を振り落した男が「こちらを向いた。

「ああ、見てわかりません？裏切り者を消したんです。私は義兄さん用があるのでね……それなのにあいつは……邪魔しやがつて」

「貴様……許さない！」

レンがすらりと剣を抜く。

「衛兵！皆さんを避難させろ！」

アシュリーナも避難を促された。が、彼女らは男の後ろから武装した男たちが続々と出てくるのを見た。

「トステム王！後ろから兵が来ます！……アンドレア、ヨシュア！私たちも応戦しましょう！」

そう言つてアシュリーナもあの白銀の剣を抜く。

「アシュリーナ様！？早くお逃げください！」

「そうですよお、俺は女の子と戦う趣味はないですから～」  
男がへらへら笑いながらアシュリーナに向かつて言つた。

「女だからって……諒めてもらつては困ります！」

3人はトステム王と金髪男を中心にはじめ、広間の後方、武装兵が押し寄せている場所へ突っ込んでいった。

「お前、用事つてなんだ……早く言え」

「ええー言つちゃつていいんですか、義兄さん？」

悪魔的な笑みを漏らし、一呼吸置いた後言つた。

「この国、もういやおつ……ところです、義兄さん」

「な……、貴様！そんな」とはせん！妹と……母上を奪つておいてこれ以上私から何を奪つつもりだ！」

はつ、と短く掛け声をだし、金髪男に飛びかかって行つた。

それを悠然と受ける男……全然手ごたえを感じていない。それどころかニヤニヤ笑つている。

「妹？ああソネアのこと？……あれはしじうがなかつたんですよ。それにお母様は勝手に侵攻してきたんだから一国の王として防衛しましたまでさ……俺はなんにも悪くない」

「黙れ！そやつて俺の……俺の大事なものを……あああああ！……受け止められていた剣を払い、体勢を低くする。そして懐に入つて剣を薙ぐ。

鮮血が飛ぶ。

「がつ……！」

はあはあと肩で息をするレン。そして蹲つた男。

レンはさりに剣を正眼に構え、男を叱咤する。

「立て！そんなんでは私は倒せんぞ！そんな甘い気持ちでこの国を取りにきたのか！」

「くくく……勇ましいなあ、義兄さんは……」

すくつと男は立つ。ぽたぽたっと血が落ちる……はずなのになにも出て来なかつた。

「……？」

「くくく……おかしいよなあ？わしが確実に斬つたはずなのに。だけど……」

裂かれた胴着を脱ぐ。そこには赤い染料の入つた皮袋がクッションとして這つていた。

「なん……だつて……？」

「残念だったなあ……だから義兄さんは好きなんだよ……単純だから？」

「くつー・アダ……だめだ！」

「じゃあその王座は俺のものとこい」と。ソネアによりじく義

兄さん

男が上段に剣を振り上げる。アシュローナは武装兵を倒しながら、  
そのシーンを見てしまった。

「トステ……レン様！」

ピーンといつ耳障りな音がして、何かが目の前を通り過ぎて行つた。

「ー?なんなんだ、これは!くつ

よりよりと男が後退する……その腕には一本の『』。

「ミシコア……?」

ミシコアは『』の名手。彼が射つたのかと思ったが、その手には『』はなかつた。

「誰……?」

「僕ですよ、姫さん」

広間の入口に『』をつがえたカイルが立っていた。

## 義兄と義弟（後書き）

なんか見たことのある名前が一人。。ソネア氏です。。知らない人は無視してもらつても構いません。が、一応『戴冠記念祭編』の2日目から途中まで出てきます。興味があれば見てください……ああ懐かしいなあ（笑）

レンとソネア（いや、書いてるからわかるよ）、アダムそしてあの金髪男。どういう関係があるんでしょうか……。これからアシュリーナが国に帰るまでには明かします（・・）／

では読んでくださいありがとうございました

……こんなところで難なんですが、日本語をラテン語に翻訳するサイトって知つていらっしゃる方いますか？もし知つていらっしゃる方がいるなら教えてほしいです……何に使うかはまあ……その……カンニングとかではないのであしからず！では！

## 勝負の行方（前書き）

もうサブタイトルが考えられませんwどうしまじょう（泣）

今回もメチャクチャですね、はい。

## 勝負の行方

「カイル……！」

アシュリーナが驚きの声を上げる。

「なんで……？」

「そりや勿論、姫さんが心配だつたからですよ」  
ふふふと微笑む。側近としての職務を果たしただけ、と言つて  
いるのか。

「あなた……どうしてトステム王を……？」

そう言つと頭と手を大きく左右に振つた。

「とんでもない！私がトステム王など助けるわけないじゃないで  
すか！」

「でも現に助けたわ」

「それは……姫さんが泣いていいるところを見たくないからですよ」  
最後の部分はやつと聞き取れるぐらいの音量。それでもアシュリ  
ーナにはちゃんと聞こえた。思わず涙がこぼれそうになる。

「カイル……アダム様をーお怪我をなさつてーいるのー早く医者に  
見せないと

「はいはい……あんなこと僕に言つておいて無様あ

咳きながらトコトコ歩いていく……と、あの男に阻まれた。

「お前がやつたのか……！？」

「なにを？」

「くそがあーどいつもこいつも俺の邪魔しやがつてー」  
持つていた剣をカイルに振り上げる。  
「カイル様！」

「カイル！…」

レンとアシューローナが同時に叫ぶ。

「うわ

咄嗟に避けた。ほつと安心する。

「もう一きなり人に剣向けてくんないよ」

そう言いながら帯剣していた剣を抜く。

「僕はトスティム王みたいにはいかないぜ？」

「ほざいてろ！俺たちには女神がついているんだからなー！」

そう言つて闇雲に剣を振り回す……先ほどのような正確さは微塵もない。

「ふうー……女神だらうが、なんだらうが、勝負の当事者は僕たちなんだから、勝ちも自分で掴むもんだろ？」

「へへへ……そう言つてられんのも今のうちだ！」

相変わらずテキトーさが目立つ剣の振り方。それを見てカイルが

さうに溜息をつく。

「ダングラジエの将軍が直々に剣の使い方教えてやるよ」

さつと左に動く。それに男も続く。

「いつまで逃げてんだあ！？僕に剣の使い方を教えてくれるんじやなかつたのか！？」

「まあまあそう焦らすにね」

そう言つたままどんどん左に移動していく。男はちつと舌打ちをし、全力でついていく。

そして突然カイルが立ち止まる。

「なつ！」

男は突然さ故に立ち止まることができなかつた。そして彼の行く

方向に待っていたのは、カイルの冷たい色をした鋼だった。

「……汚え……！」

「戦場に汚えもくもあるかつ！油断したお前が悪い！」

そう言つて既に男の脇腹に触れていた剣腹を思いつきり右に薙ぐ。そして罵声をカイルに浴びせながらその男は赤い海に沈んだ。

「カイル……怪我ない？」

肩で息をしながら、アシュリーナが近づく。するといつもの一口ツという笑いを見せながら振り向いた。

「全然。それよりアシュリーナ様の方は？」

「私は……大丈夫……それより、この人」

「私の義理の弟です……そしてかつて私の妹の夫だつたものです」レンが近づいてきて言う。その肩にはアダムが担がれていた。アダムはまだからうじて息をしているようだ。しかしその顔は真っ青を通り過ぎして白くなつてきていた。

「レ……れ……ま」

「アダム！喋るな！傷が開く！」

「私は……もう……」

「そんなこと言つな！お前は……お前は……！」

レンがぼろぼろと涙を、その青い目から溢れさせていた。

「早く治療を……誰か！お医者様は！……レン様。私たちの者も何かお役に立てないでしようか……アダム様を！」

「……アシュリーナ様……是非よろしくお願ひします」

「……」ういう時はお互い様です……アンドレア！侍医を呼んできて！早く！」

祝いの宴は1人の男の襲撃によつて騒然となつた。

## 勝負の行方（後書き）

アシュリーナがじやくせに紛れて、「レン様」とか言つてます。  
なんつー奴だw

そしてカイル氏。なにが剣の使い方を教えてやる、ですか！？ま  
つたく教えにも何にもなつていないではないですかっ！！……とい  
うのを今ぐるぐる書えていますw

わたくして本当にみなむどうなるんでしょうか。作者自身も心配  
です（おこつ）

では、読んでくださいありがとついでました

……この作品では宴の最中に襲われる事がパターン化してますね。  
…ダメじゃん！

再会（前書き）

この話早く終わらせたい……なぜなりば重いからです……はあー。  
な  
な  
まあ新章始まりましたし、明るく行きましょうつー……うん。無理だ

## 再会

「アダム……すまない……」

レンが俯いたまま横たわるアダムに言つ。それに応えるようにアダムはレンに手を伸ばす。

「レン様……なにを謝つているのですか……ヴィート様がこの国に関わるようになつたのも……元はと言えば私のせい……なのですから」

弱弱しくぼそぼそと言つ。レンはそれを聞いてますます涙をあふれさせた。

「ヴィート……？」

アシュリーナが呟く。多分会話の流れとして、あの金髪男の名前だろう。

丁度アンドレアが侍医を連れて広間へ入つてきたり。この国の医者とみられる人間も入つてきている。

「アダム様！なんてお怪我なのですか！……レン様は無事でしょうか」

「私ならこの通り無事だ。それよりアダムの治療をしてくれ早くしないと手遅れになる」

「おいたわしゃ……」

そう言いながらトステムの医者がテキパキと準備をし始める。それに倣つてダングラジエの医者も手伝い始める。

「アダム様の胴着を脱がせてください」

「清潔な布はありますか？それと白湯も必要です。薬は私たちが持っています」

「布……白湯……あります！薬は使わせていただきますね」

医者同士にしかわからない会話が進んでいく。アシュリーナたち

はただ見守るしかなかつた。

「レン様、ダングラジィの王國陛下。お下がりくだせ。」リリは  
私が……」

「わかりました。レン様、さあ  
涙を流しつばなしで呆然と立つているレンニアシユリーナが手を  
差し出す。

それにアンドレアたちも続く。

「レン……！がつ……」

はあはあと肩で大きく息をしながら、ふらふらと男 ヴィート  
が立ち上がる。口から血が滴っている様子が無気味であった。  
ヴィートがレンに向けて指を指す。

「俺が……ここからいなくなつても……きっと女神が必ず……こ  
の国を海の藻屑にしてくれよ。……の方は誰にも……」「

「お前、さつきから『女神』だの『あの方』だの……ちつたあ自  
分の力でどうにかしろよ。」

カイルが口を出す。

ヴィートが突然笑い声を立てた。

「お前さんは本当に威勢がいいなあ……だがな。威勢がいいだけ  
じゃこの世はやつていけないんだよ……あのアダム（裏切り者）は  
もうすぐ死ぬだろ。あの出血じゃあ助かりっこない！そして……  
あの方がこの国を……かはつ」

赤い咳をする。ようようとふらついて、とてもじやないけど立つ  
ていられる様子ではない。

「もう……お前だつて持たないんじやないのか？アダムのことを  
言つている場合じやないだろ」

レンが口を開く。するとヴィートがきつ、とレンを睨む。

「黙れ！俺は……俺は……この国を手に入れるまでは死なないんだ」

「そんなにこの国がほしいなら自分の手で（・・・・・）俺を殺せ。でなければ俺は死んでもこの玉座に座り続ける……お前なんかに渡すものか、この愚か者！」

くくくと笑う。

その時、ぐらつぐらヴィートの体が傾いだ……真っ赤な軌跡を描きながら。

「……？」

思わず身構える。が、その必要はなかつた。ヴィートはそのまま床に倒れてしまったからだ。

そしてその後ろから現れたのはあの深緑色をした田を持つ少女だった。

再会（後書き）

現実逃避したいです。。どうしてこういう展開になるんでしょうか……？それは私が曲がっているからなんでしょうか、性格が？

再会……ふう。なんか後書きが愚痴になつてませんかね？気のせいですね！？

では読んでくださいありがとうございました……ハッピー・ハンドが  
恋しいよお

## 他人の空似（前書き）

4月ですね！…うはあー……実力テストが2週間後だ。泣きたい。。

それはさておき、なんか4月でテンションmaxな方多いですね  
今回は明るい話ですよ……というエイプリル・フールなテンション  
ンw前回同様暗いですよ……同様じゃない、ますます暗くなりまし  
た。誰か止めてください（泣）

## 他人の空似

「ソネ……ア……？」

ヴィートの後ろから姿を現した少女。深い緑色の目と縁がかかった髪。長髪だったのが短くなっているのはさておき、それはまさしくソネアそのものだった。

ただ、一力所違う……明るいものを宿していたあの眼は、どこまでも深いものになっていた。どこか冷たさを感じさせむ。昔の快活さは微塵も見られなかつた。

「ソネアー！ ソネアでしょ！」

アシュリーナは叫んだ。が、少女の顔はピクリとも動かない。そしてしばらくした後、返答が来た。

「私はソネアではありません。エルマです」

「そんなはずはないわ！ あなたはソネアのはずよ……その明るい緑の髪に深緑の目……絶対そうだわ！ ただの他人の空似ではないわ！」

少女 エルマは首を振る。相変わらず無表情。

「私はエルマです。ソネアではありません。アレはもう死にました」

「『死にました』……？」

じくじくと頷く。その答えはあまりにも残酷でアシュリーナを愕然とさせた。

「ちよ……それってどうこういとよー？」

「そのままです。あなたに話はありません。私はヴィート様を御迎えに来ました」

そう言ってアシュリーナたちには目もくれず、床に倒れたままのヴィートをひょいと肩に担いだ。ヴィートの体格は小さいわけで

はない。一般男性と同じぐらいだ。それなのにあの華奢なエルマがいとも簡単に担いだので、アシュリーナたちはもつとびっくりした。

「では……ヴィート様が」「迷惑かけました」

「待つて！ソネアのこと詳しく聞かせて……そのヴィートつていう男の奥さんなんでしょう？なんで『死んだ』なんて言つて…？」

アーモンド形の目でこちらを見ている。そして口を開いた。

「アレは皇太子妃としてはあまりにも無能でした。そして王の御命令より処刑されました。ただそれだけのことです」

「どうして……無能だからって処刑されなければならなかつたの

……？」  
「アレは無能でありながら、トステム王を想い、いつしか間諜としての役割を始めたからです。王の怒りに触れるのは必然的なことです……もうよろしいでしょうか？」

ソネアにそつくりの少女がソネアの死を語る。それはすぐ不思議で気味が悪いと言えば氣味が悪い。本人に多くを語られないまま、淡々と死を告げられたような錯覚に陥る。

「もう行つてください……エルマさん」

そうレンが言つた……自分の妹似の少女に向かつて。

こくつと頷くと外へ向かつて走り出した。そして黒馬に跨つて引き返していく。

「レン様……どうして……帰したのですか？」

レンは微笑んでいた。

「私には分かつてているからです……ソネアはいないって

「……どうして許していられるんですか？」

その青い目に一瞬影が見えたが、それはすぐに消えてしまった。

「アシュリーナ様は疲れていらっしゃるようだ……早くお部屋に

戻された方がよろしいかと……」

「そんなことはありません！――」

明らかにレンが話題を逸らしたようにしか思えなかつた。

そしてアンデレアたちに付き添われ（どこつか勝手についてきて）  
アシュリーナは部屋へ戻る羽目となつた。

## 他人の空似（後書き）

わたくしてどう話が進むのやら……もあらん考えてはいますけどね w  
……これからも暗さ max です、多分。といつよりこの章全体が暗  
くなりますね、うん。それでもいいという方は、これからもよろし  
くお願いします m ( -\_- ) m

……それとお知らせ (?)

アシュリーナの話 (てつとり早く言えば Legend of Gi  
rly)、多分夏ぐらいに終わります。。多分ですけどね w

海辺の邂逅（前書き）

……書くことがないなあ…… w

まあ話もタイトルそのまんまですから w

## 海辺の邂逅

トステムの民は歌い、踊る。町には光が溢れ、音が満ちている。

しかしアシユリーナの部屋は違つた。誰もが黙り込み、明かりの一つもついていない。そう彼女が命じたからだ。  
そしてアシユリーナは窓の外を見ていた。その頬に一筋の涙が伝う。

「ソネア……」

膝を抱え込み、ぎゅうっと頭をうずめた。

「お姉ちゃん！」

そう言って彼女はアシユリーナの元へ飛び込んできた。まだアシユリーナは9歳、ソネアは6歳だった。

「遊んで！」

その深緑色の目に見つめられ、誘われるままにソネアと遊んだ、久しぶりに羽目を外して。王宮で同世代の子供と会うことなんてまず無いし、その時は気分がこころなしか沈んでいた……勿論戴冠記念祭という重圧のせいで。

そんな昔を思い出し、一層膝を抱える手に力を込めた。

～～～～

ふと顔を上げる。町人が歌う、陽気なメロディーとは違い、どこか寂しげな旋律。

そろそろと窓から半身を乗り出す。そして田の前に広がる海を見る。

夜の海は暗く、明かりなど見当たらぬ。  
浮かぶ影が人魚のように見える。  
そしてどうやら

人魚は本当にいるのかしい?

人魚のその歌声は美しく、人を惑わすと言われている。そしてその口から訪がれる旋律は夢遊で、人の幸せこは明るい歌を、不幸こ

は寂寞とした歌を歌う、と言つ。

「あなたたちもソネアの死を悼んでいるのね」

そう思つたとか慕つた  
そして窓からひいと下は広がる  
大地へと降りて行つた。

\* \* \* \* \*

「あら、レン様」

アシコリニカほ海へ來た。モジモレンシヨリ主命にた

「ああ、アシリーナ様ですか

「ええ、隣いいですか？」

卷之三

レンの隣に座る 湯が足元まで来て冷たがりながら、全のアシナリーナには気持ちのいいものだつた。

部屋から誰かが歌う「声が聞こえました……私は人魚かと思いま

するとくすつとレンが笑つた。

「あれは私のです……昔母がよく歌つてくれたものでした。気持ちが落ち着かないときにここに来て、よく歌つてるんですよ」

「アシユリーナ様のお母様は？」

首を振る。それからしばらく二人は口を利かなかつた。

「ソネアのことですが……」

突然レンが話を切り出す。アシュリーナは思わずびくっと体を震わせる。

「寒いですか？」

そう言つて上着をかけてくれた。

「ありがとうございます……」

「いいえ。夜の海は冷えますから」

レンは微笑んで、再び口を開いた。

「アシュリーナ様の話は以前ソネアから聞いていました」

「ああ……5年前の戴冠記念祭の時ね」

「その節は……」

ペコリとレンが頭を下げる。

「レン様、頭を上げてください……あの……失礼ですけど、でもどうしてレン様はあの時いらっしゃらなかつたのですか？」

10歳のレンに会つてみたかったのも事実。何故、妹に行かせたのかがかなり気になつた。

レンはふふと笑つて答えた。

「私、幼い時は体が弱かつたのですよ……それで母上が許してくれなかつたのです。それで代わりに妹と、父が行きました」

「父？お父様が王でなくつて？」

「違うんですよ、それが。母は王家の者だつたんですけど、父は身分の低い貴族で。それで両親が結婚したとき、どちらを王位に据えるかもめて……結局去年、私が即位するまで空位だつたんですけどね」

なんか複雑だな……ダングラジュではまずありえない。なんせ8歳の私が王になれたから。

「それで、本題に入りますが……」  
レンがそう言つたとき、丁度冷たい風が吹いた。

海辺の邂逅（後書き）

レン様、微笑み過ぎ。。。でもそれが彼なのですからw

……書くのを忘れてましたが、アダム氏どうなったの！？

では読みにくださりあつがといひございました

a v i 薔薇（前書き）

今回は無駄に長いです。多分初めて2000文字超えました（汗）  
前編後編に分けてもよかつたんですが、事の成り行き上こうなりました。

風が収まつた頃、レンは再び口を開いた。

「エルマつてのが今日来たでしょ？」

エルマ ソネアによく似た容姿だった。絶対ソネアだと思つたのに否定されだし、ソネアの死まで告げられた。それを思い出すと、また涙が出そうになつた。

「アシユリーナ様？」

「あ、いえ、大丈夫です……話を続けてください」

「そうですか……では」

「ほんと咳払い。一呼吸置いてぼそつと言つた。

「あのエルマとソネアは同一人物です」

「嘘つ……あ、失礼しました」

思わず叫ぶ。それぐらい衝撃が来た。……やっぱり同一人物じやないかっ！でもどうしてエルマは否定したんだろうか。

「でも、ソネアは処刑されたのでは……？」

「確かにソネアは諜報として働いていました。それがあそこの王に露見して、処刑宣告されたのも事実らしいです。そうやって手紙が来ました

ふうーっと息を吐く。

「でもソネアは処刑されなかつた……？」

「そういうことになります。で、妹は処刑の代わりに人体実験されたらしいです。なんでもあの国は新しく洗脳の方法を見つけたようで、ソネアを第1号にしたらしいんです。それで見事成功して、『ソネア』という人格は完全に意識が消滅。代わりに『エルマ』と

いう人格を作り上げ、彼女をヴィートの昔からの家来だと思わせている

「……複雑ですね。ソネアの肉体は朽ちてない。けれどもその体には『エルマ』という別人格が宿っている……それを知っているといふことは、レン様は何度かエルマに接触しているということですか？」

うん、と小さく頷く。

そしてソネアの殺害（実際にはしていないけど）を理由に母親がヴィートの国に攻め込んだことも話してくれた。そして母親が戦死した後、レンが即位し、あのヴィートといふ男が付きまとうにつになつたらしい。

「すみませんね、こんなに暗い話をしてしまって……」

「いいえ、とんでもありません！私だって真実を知りたかったのですから」

するとすつとレンがチューイックのポケットから何かを取り出して、アシュリーナの首にかけた。

「これは……」

「サンゴの首飾りです。この国の特産品ですよ」

にこりと笑つてレンが言つた。

確かに特産品と言つてもいよいよ良質なサンゴで、全般的に朱色を基調としたデザインとなつていた。でも、市場とかでは売つてないような高価そう たとえば、あちらこちらに小さな金や銀があしらわれている、それぐらい貴重そうなものだった。

「私がもうつてもいいんでしょうか……？」

「ええ。もう受け取る相手がいませんから」

「受け取る相手……？」

「それはソネアにあげようと思つていたんです。12の誕生日に

ね。でももうソネアはいないから……アシュリーナ様にあげます

「そ、そんな大切なものを私が受け取るわけにはいきません！」

急いで首から外そうとする。が、レンがそれを押しとどめた。

「アシュリーナ様、“a v i”といつもの知っていますか？」

「“アヴィ”……？」

「そうです。“a v i”です。これは古い言葉で“誓い”を意味する言葉です」

「“a v i”……それがどうかいたしましたか？」

“a v i”なんて聞いたこともないし、ましてや口にもしたことがない。古い言葉と听つてもどれくらい昔の言葉なのか、見当もつかないし……

そんなアシュリーナを見て、レンが微笑む。

「私は誓ったんです……この母なる海を統べる海神わだつみに。ソネアがヴィートの妻になるとき……妻と言つても名田ですから。本当は人質ですよ……妹をこんな目に合わせなければいけなかつた、自分の非力を憤りました」

あつ、とアシュリーナは思つ。両親が殺害されたときも、5年前も自分もそう思つたことを、同年代の少年王も感じてゐる。自己の非力を苛んでゐる。

そこになにかを感じた。けれどそれがなんのかはわからなかつた。

レンは続ける。

「だから自分に問うたのです、王あるまじき姿とは一体何か。私は文章の中でしか王に会つたことがありませんでしたから。だけど勉強しても答えは見つかりませんでした。結局行き着いた先は……今です」

寂しそうに微笑む。

「でも私は誓いましたよ、国家のためになる王になると。こんなこと誰でも誓うことでしょうけどね。でも私にはこれしか思い浮かばなかつたし、ソネアの仇とかも思いつきましたけど、それでは王の役目は務まりません。利己主義な王はつぶれますから」

「それがレン様の“<sup>誓い</sup>a v i”？」

「そうです……笑つてもいいですよ?でも私はいつだって本氣です。そしてそれ……」

サンゴの首飾りを指差す。

「私の感謝の気持ちです。受け取つてください。それに……」「それに?」

「本気でアシュリーナ様と友達になりたいんです。貴女は大切な人だから。あ、勿論国交の方もね……だけど純粹に友人が欲しいんです」

「では、それを私の“<sup>誓い</sup>a v i”にしましょう……私は友人を裏切らない、とか?」

くすくすっと笑うと、レンも笑い始めた。

「そうしてください……では、受け取つてくださいますね」

「くつと頷くと、レンは満足げに立ち上がった。

「あ、そうだ」

レンが振り向く。

「アダムの治療は無事終わりました。アシュリーナ様たちのおかげです……ありがとうございました」

「ありがとうございますなんて言わないでください……さつき誓つたでしょう?困つたときはお互い様ですよ」

そう言つてアシュリーナも立ち上がり、レンの隣へ走つて行つた。

## a v i 誓い（後書き）

無駄に長くてスミマセン（汗）でも洗脳を人体実験といつのか……  
疑問ですけど書きました（おい）

あと、“a v i”は（多分）ラテン語で意味は（多分）「誓い」です。  
「使い方ちがーよ」と思われた方は指摘してください…とい  
うか教えてください…！

では、次から新章突入です 読んでくださいありがとうございました！

## こつもの朝（前書き）

これからアシュリーナたちは帰国します。。（と言つてもまだ一日残つてますけどねw）

でもその前にアシュリーナたちはどこかへ行きたいよつです。

## こつもの朝

「で、アダムさんはヴィートの元副官ですか……」  
すっかり日が昇つて朝になつた。アンドレアたちも起きて、アシユリーナの話を聞いていた。

アシユリーナはあの後、レンからアダムとヴィート、そしてソネアの過去を聞いた。

なんでもアダムはヴィートの元副官。<sup>あの金髪男</sup>で、彼はヴィートのはけ口。手酷い暴行を受けていたそうだ。

彼はなんとかヴィートの元でやつてはいたが、<sup>主君</sup>ヴィートのある計画。謎の一団に加担して、トステムを滅ぼすというものを耳にしてしまつた。

それで彼はヴィートの元を脱走。この国にやつて來た。そのとき、彼の身体中には生々しい傷の跡があつたらしく。

そんな彼を見てレンの母親がアダムを保護。彼はそのままレンの側近になつたらしい。

一方でアダムの脱走に気づいたヴィートがトステムにやつてくる。理由はアダムの奪還。しかしそれが叶わなかつたので、代わりにソネアを要求。名田上は正室だが、まあ彼女もまだ幼いわけだし、事実上人質として、ヴィートの國へ渡つた。

それから後の話もアンドレアたちに語つた。

「はあ……複雑ですねえ……」

「まあどうな形にせよ、ソニアが生れてもとわかつたから良かつたわ」

ほうつと息をつく。それが本心だから。

「姫さん、それなんですか？」

カイルがアシュリーナの胸元に朱く光る首飾りを指差した。

秘密

は、こり笑って返すと、カイリは何かを察知したらしく、つ言つていた。が、まあ良かつたですね、と渋々答えた。

「ありがとうございます。」

物語の書籍を購入する

\* \* \* \* \*

「アダム様は……」

アシュリーナたちは、午前中のうちにアダムの様子を見に行つた。するとレンがアダムの横たわるベッドの横に座つていった。

「あら、アシユリーナ様。それにアンドレア様、ヨシュア様、力  
イル様」

一人一人の名前を言つてから軽く会釈する。

万タツ様のお見舞いは来ました

「アーリー・エイジ」の初期が

もまだ青いし……」

つた方だ。

それを見てひとまず安心する。

「今は安静にしていらしたらいいですよ。無理せずにね」ちらつとヨシコアの方を見る。彼は俯いていた。

ふふっと微笑んでレンの方に向き直す。

「明日、私たちは国に帰ります」

「あ、そうなんですか……残念ですね」

アシュリーナの唐突な発言に寂しそうに微笑む。

「なので今日はこの3人と海に行つてみよつかな、と思つていま  
す……またいつ見られるかわからないので、見納めに」

「それでしたら私が町にご案内しますよ」

「ええっ！？レン様が直々につ！？」

思わず咳く。

「しかし、アダム様はよろしいのですか？」

「ええ、ちゃんと侍医がつきますから……というか、私がここに  
いたら邪魔だとか言ってくるから。ですから一緒に行きませんか？  
どうする？という田で後ろの3人を見る。警護で（いらんけど）  
ついてくる？ここに残る？

「私は……残りましょう」

そうヨシュアが言つた。

アンドレアも残ると言つていた。で、肝心のカイルは……

「行きま……ふえ！？」

行く、と言つてからにこなつたところにヨシュアが口をふさぐ。そし  
てこの通りですよ、と無愛想に言つ……意外と空氣読むじゃん。で  
もやり方が気に食わない。恥ずかしいなあ、もハ。

くすくすつとレンが笑つて、じゃあ行きましょうか、と椅子から  
立ち上がり、出口へ向かつていった。

## こつもの朝（後書き）

はい、次からトステムの首都探検です（1年生ですかっ！）

ヨシュアさんは俯いています……理由は5年前、自分が無理してばたんきゅうしたからですww

では、読んでくださいありがとうございました

首都探索 その1（前書き）

そのまんまです（笑）

あと、なんか投稿日ミスってましたね。。スマスマセン（泣）といつ  
わけで2日連続投稿ですが許してください（^人^）  
ではじめ

## 首都探索 その1

ちやつかりマントを羽織つて、長く伸ばした髪を一つにくくつて……一応変装をする。でも自分が一国の王だとは、トステムの国民は気づかないだろう。顔なんか知ってる人いないと思うし……それはそれでまた寂しいんだが。

で、トステムの王はというと、完璧に別人に見えるほど<sup>レ</sup>の変装振り。

目立つ金髪は黒髪のかつらを被つて、あの碧眼はサングラスをかけて外からは判りにくいようにしている。その上、服は平服。誰がどう見てもただの国民。アシュリーナもその変貌ぶりには驚いて、初めは誰かがわからなかつたぐらいだ。

そんな2人は徒歩で首都リベアへ向かつていった。

\* \* \* \* \*

「朝市、というものですか……やつぱりこ<sup>レ</sup>は国柄で海産物が多いですね」

アシュリーナは思わず咳く。

確かにここまでに、もう10軒以上、新鮮そうな魚が並ぶ店があつた。さらにその先も所狭しと店が立ち並んでいる。ダングラジエとは大違い……

「アシュリーナ様のところはどうなんですか？」

「え……うーん……ダングラジエが砂漠のど真ん中だから……あんまり生ものはないですね……どっちかというと、綿とか麻とか……とにかく織物が多いかな？」

「へえ……それじゃあ食べ物とかはどうするんですか？」

「あんまり物が育たないから、野菜は輸入が多いです。遊牧民が

多いから家畜が多いですよ。あ、キャラバンが来るのでその方と物々交換している国民もいます」

「はあ……それより」

じつとレンがサングラス越しにアシュリーナを見つめる。いくら目をサングラスで隠していてもアシュリーナはどこかとわかるを得なかつた。

「敬語、やめません？ 私たち折角、庶民に変装してこるのにお互い敬語で喋つているというのがおかしいと思つんですけど……」

「あ、そうですか？ 助かります！ 私、敬語とか苦手なんで」

にじつと笑うと、レンもつられて笑つた。

「でも私のことをレンと呼んではいけませんよ……そうですね……トウイ、なんてどうでしょう？」

「トウイ、ですか……わかりました。では私はカレンで」

「カレン？」

「私の苗字です！ なぜか人の名前みたいなんですよねえ……あはは」

ホントに人の名前。だからと言ひて両親の苗字がカレン、だつたわけじゃない。別に気に入らなければテキトーにつけていいのが、ダングラジエの風習。そのところはよく理解できない。昔からの謎な風習その1である。

「じゃあ、いじつか」

早速友達口調。まあいいけど……

「カレン！ これ見てよ」

レンが言つ。これ 美しく装飾されたブレスレットをレンが指差して、一人盛り上がつてゐる。

「まあ、彼女かい？」

店の主人らしい、ふくよかな女性がレンに向かつて言つた。

慌てて首を振る。いや、振ろうとしたがレンがその前に頷いてし

まつた。

「ちよつートウイー！」

「まあいいじゃん。これくださー」

「これ？いやあ、これよりこっちあげるよーはー」

台の下から何かを取り出す。それはレンが指差したものよりも地味なものだった。が、貝殻やら、青系色のビーズやらで作られていた。

「……ねえ、地味じゃない？」

「そうだけどね。これはペアで買うと願いがかなう、っていう噂があるのよ。でもちゃんとつけないとダメなんだって」

「へえ～……」

「兄ちゃん、彼女に買ってやりなよー因みにこれを売つてやるのはあんたたちみたいなお似合いのカップルにだけさー今まで3組にしか売つたことないよ。しかも3組とも2人は幸せになつたってさ……どうだい？」

「買いましょうーーいくらい？」

「いやあ～、久しふりにおばさんをいい気分にさせたから、お代はいいよー持つべきな」

はい、つとレンに手渡す。そしてお互いそれを手首に着ける。意外としつくらくるかも……でも、話からしてこの願いは『恋愛』じゃないか……でもお互い違う意味で幸せになれたらいいけど。

一応ありがとうただけ言つておいた。笑顔で幸せにいゝとか恥ずかしいセリフを言つてるおばさんを見て、こっちの顔が真っ赤になってしまった。

レンを見る。その顔は満足そつだつた。

## 首都探索 その1（後書き）

もう完全にカッフルですね。あははは……

それで日曜投稿はナシで。理由は……日曜日にテストがあるからです（泣）

でも学校から帰つたら投稿するので！

では読んでくださいありがとうございました

首都探索 その2（前書き）

2回ぶりですね

その2です。。

ではないが

「ねえ、お腹空かない？」

レンが言う

「え？ 朝」はん食べてないの？」

「まあね、俺朝ごはん食へなし派だから……いや、こちもアタムに怒られる」

「朝ごはん食べないなんて……体持たないじゃん」「うちはアゲハニラシナギニシ語つこう

あはは！アタムとおんなじ」と言ひでる！

笑うと「冗じやねえ！」とアンデレアとかになら言いとじねだが、レンにはさすがに言えない。苦笑い程度にどじめておく。

そんなわけでレンはなにやらカレーパンデイッチのよつなもの、アシコリーナはお菓子のようなものを買って食べた。その後もあれやこれや言いながらレンは食べ歩きして、アシコリーナはほとごとお供状態に。

「トカイ……いくら朝食べてないって言つても、それは食べすぎじゃなに? 食べはん食べりがれなくなるよ?」

「へーキ。実はこいつみえても大食いなのさ」

へへへと笑う。じつみえても…… ところのせレンの見た目。別に太っているというわけではない。寧ろ引き締まっていて、せい肉といふものを探す方が難しいと思われる。

『アルゴリズム』

……なんて羨ましい体质なんだッ！

その間、あのブレスレットを売つてくれた（いや、厳密にいうと

くれた）おばさんのようにこの2人をカッフル扱いしていろいろ押していくる商人が多数いた。

でもみんな一様に2人がトステムの王と、ダン<sup>レン</sup>グラジエの王だなんて気づいていない。自分はまだしもレンは気づかれるはずだな、とは思っていたので改めてレンの変装振りに感服。しかも「みんな友達」みたいな態度にも感心するな……

とんつ

混雜する道ですれ違いざまに誰かとぶつかった。

「あ、すいません」

後ろの人ごみに向かつて言つ。すると薄茶のマントをかぶつた女性がちらつと振り向いた。

そしてにこっと微笑んで軽く頭を下げる。

その顔を……いや、深くかぶつたフードから覗いた目を見る。

それは他でもない、あの薄赤<sup>オッドアイ</sup>と緑の目。

アシリーナは一瞬どきつとなる。

まだこちらを見ていた彼女の口端が軽く持ち上がる。  
そしてふいにその女性が横道に入った。

「あつ！」

駆け出そうとする。しかしそれをレンに止められた。

「カレン！ どうしたんだ？」

「早くしないと、あの人が！」

「あの人……？」

「後で話すっ！！」

あ、ちょっと待てよ、と叫んだレンを完全無視して人の波に向かつて駆け出す。そして彼女が曲がった道へ滑り込む。

しかしそこには人つ子一人いない、寂れた通りだった。勿論彼女

もいない。

「……あれ？」

「アアア息を切らしながら呟く。でもいない。道を間違えたはずはないんだが……」

「もう、急に走り出すから……どうしたんだい？」

レンが追いついてアシュリーナに問いかける。

「……知り合このを見かけたの……挨拶しなきゃと思つただけ……」

『挨拶』したい……できればこの手で

そんなことを一瞬思つたが、やつぱり馬鹿馬鹿しくなつてやめた。こんなところで斬りかかつても迷惑だし。

でもなぜ、あいつが現れたのか。一応レンに尋ねる。

「トウイ……あなたは『神々の黄皿』を知つてゐる？」

「知つてゐるよ」

「！」

衝撃。この国と彼女ら『神々の黄皿』が繋がつてゐるなんて……しかしこれは思い違いだつた。

「あれでしょ。『神々の黄皿』には氣をつけろってやつ

「……は？」

初耳。なにそれ？『神々の黄皿』には氣をつけろ？まあ十分気をつけなきやいけないやつではあるが……

「え、知らない？『神々の黄皿』に田をつけられたら殺されるつてやつでしょ？でも選ばれた人間は『神々の黄皿』の導き手になることができるんだつて。でも生贊が必要だから、國滅ぼしをしな

ければならない』……そういう伝説

「伝説……なの？」

「ただけど……それがどうしたの？」

「なんでもない……そ、なんでもないの。忘れて」

でもアシュリーナはそんな『伝説』を田の辺たりにした。とこりか今さつさとの『導き手』を見つけてしまった。

……砂漠でへたつてたら良かったのに

小さく舌打ちする。そしてぐるっと翻つて大通りへ戻つて行つた。

## 首都探索 その2（後書き）

私は朝は食べる派です。。ところが朝食ひやんと食べてます。。

レンの体質が羨ましいです……お菓子ばかり食べても平気だなんて……

では、読んでくださいありがとうございました

## 2人の主人

『<sup>ラグナロク</sup>神々の黄昏』には氣をつける  
その目を見たら喰われるぞ  
その声を聞いたら喰われるぞ  
みんなみんないなくなる  
一瞬で町が灰になる

『<sup>ラグナロク</sup>神々の黄昏』には氣をつける  
可愛い子供は黒フードに誘われる  
赤月の晩にパーティーへ御招待  
おいしいお肉にあつたかいスープ  
ケーキもたくさん置いてある  
そして『<sup>リーダ</sup>導き手』に選ばれる  
「明日は友達を喰つてきて」

『<sup>ラグナロク</sup>神々の黄昏』には氣をつけろ

「……はつ」

頭がくらくらする。

体中が痛い……まだ熱があるようだ。

「……レン様……？」

辺りを確認する……誰もいない。さっきまでは人がいたはずなのに。

彼の優しい声が遠い。安心させてくれる強い声。

レン様が

それを押しのけて、あの男の声が夢に出てきた。

そして『神々の黄昏の詩』<sup>ラグナロク</sup>を何度も何度も繰り返してきた。

「モウ」

まだ頭の中で停滞しているあの詩。  
どこかく忘れ去りたい過去が  
よみがえる。

+ +

「いいかい、アダム……『神々の黄昏』はねえ、今日お前を迎え

にくひんた

「そ、そんな御談を

「冗談じゃなーれ……お前は『導き手』に氣にいられてるんだ」  
——

「初論」

ニヤツヒ口端を上げる。

「お前を生贊にするためだ」

をひいて御はとかせともなく靴を取り出した

1時間後、皇太子はようやく手を止めた。

「アタシ、どうして痛がるんだ？」

「ハアハア  
なぜ

「なぜって、もうすぐその『導き手』<sup>リーダー</sup>が来るからだよ。生贊には

6

「なぜ、私が生贊にならなければいけないのです！？」

「だからセ～言つてゐるじゃん。お前は『導き手』に氣に入られて

いるんだよ」

「生贊は……生贊は何のために必要なのですか？」

「うるせーなあ……ちつたあ 静かにしる」

最後の一振り。

そしてちつと舌打ちをして、彼は奥の部屋へ行ってしまった。

「ケホッケホッ……」

「大丈夫ですか……？」

「……？」

背後から細い、少女の声が聞こえた。

後ろを振り向くと、そこには本気で自分のことを心配した表情で、華奢な少女が立っていた。

この国では珍しい緑色の髪と同色の目。服装から見てここに勤める侍女のようだった。

なんとか立ち上がる。

「大丈夫です……早く仕事に戻りなさい」

「アダム様……ですよね？お怪我なさっていますよ……どうなさったのですか？」

「なんでもない。なんでもないから……」

ふらふらどこかへ歩いていこうとする。しかし彼女が腕にしがみついてきた。しかも丁度傷のあるところだ。

「いたつ……す、すみません」

「い、いえ！こちらこそ！！それよりお手当てを……！」

「大丈夫ですから！女官長に言いつけますよ？」

そう言つてはみたが、彼女はテキパキと手当の準備を始めた。そしてさあさあと無理矢理アダムを横たわらせた。

「できましたよ……一体どうしたんですか?」「

侍女が汚れてしまつたタオルを洗いながら訊ねた。

頑なに首を振つた。

それを見て彼女ははあーっと溜息をついた。

「今日は皇太子様にお客様が来ます」

「知っています……聞きました」

「それで……私は聞いてしまつたのです

「何を?」

膝の上できゅっと握りしめた手に力を込める。

「私の故国が滅ぶのですっ!」

「……え?」

彼女はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「私は皇太子様とお客様が前にお話ししていきたことを聞いてしまつたのです!』トステムが欲しい』つて皇太子様がお話していたんですけど……それでお客様が『生贊をくれたら、必ずや御心にそいましょう』と……」

ひつくひつくと肩を震わせた。

「なぜ……それを……?」

「私はアダム様にそれを止めて欲しいんです!……あなたの傷を見て……村の家族のことを思い出してしまつて……」

「いけません……私なんかでは

「何故ですか?」

「私がその……生贊なのです」

顔を伏せる。少しした後彼女が口を耳元まで寄せてきた。

「では尚更です……どうか、私のトステムを……トステムの皇太子様へ……レン様へお知らせください!…レン様なら……助けてくだ祖国」



その腕を必死に外そうとする。が、外してくれなかつた。  
しばらくして諦めた。

「どうして……？」

レンがニッコリ笑つた。

「言つたろ？俺はお前が好きなんだつて……あ、勿論従者として  
な。別にそういう氣があるわけではないぞ！」

「でも……」

「もうグダグダ言つたまでも俺はお前のことを心配している  
！――本当に生きてて良かったと思つてるよ！」

涙がこぼれる。

「泣くなつてもう！」

そうやつて平和な暁下がりは過ぎていつた。

## 2人の主人（後書き）

今回は視点を変えてアダム氏のお話でした

『ラグナロク神々の黄昏の詩』はどうだったでしょうか……なんか変なところ  
ないですか？「おめえ、『二三の考へても變だらつ！』と思われた  
方は、こ指摘ください！」

では読んでくださりありがとうございました

帰国（前書き）

お久しぶりです

最近不定期になりましたwコロコロと更新予定期を変えてしまいます  
ミマセン（汗）  
でも土田には絶対更新できるように頑張ります！

これからもよろしくお願ひしますね

## 帰国

今日は、トステムでの最終日 つまり、アシュリーナたちがダングラジエに帰る日だ。

名残惜しいので4人で海に出かけた。

「ああー……これ持つて帰りたい」  
頬をふくつと膨らませて海を指差す。

「いや、それは無理でしょ」

「……あんた、私をバカにしてる？ それぐらい私でもわかるわよ」  
アンドレアの真面目な指摘にイラつく。

「それぐらい、海に感動したのよ……砂の海はもう見飽きたわ」  
じろんと砂浜に寝転がる。

するとアンドレアが慌てた。

「アシュリーナ様っ！ お召し物が汚れます！」

「うわあ……私、タルカシ連れてきた覚えはないんだけど」  
侍女、タルカシのようなことを言うアンドレアを軽く睨む。  
別に服が汚れたら着替えたらいいだけの話じゃない！ というか砂  
なんて払えばいいのよ。ダングラジエにいたら嫌でも砂が服に付く  
といつに……何を言つてるんだ。

ふと、横を見る。

珍しいことにヨシュアとカイルが笑つてゐる（特にヨシュアの笑み  
はかなり貴重だ）。2人は結構端正な顔立ちだから、この風景はきっと絵になる そんなことを考えてみる。

「ねえ、2人はここに来たことがあるんでしょ？」「…」  
2人に投げかける。

するとカイルがこちらに顔を向けた。

「ええ！ホントに子供の時だけね……懐かしいなあ！」J.J.で兄さんと遊んだんだよ」

「そうだったかな……義父は魚釣りがうまかったな」

「そうそう！3人で競争したけど、兄さんが一番下手だったんだよね」

「違うぞ。ドベはカイルだつたぞ」

「そんなことないつて！兄さんだつて」

……喧嘩するなつ！そんな過去の栄光はどうでもいいんだ！……栄光じゃないな。うーん……こういうのを見ると兄弟だなつて思う。見え張り合いこしてついつい喧嘩に……というのが本でよくある話。だつて私には兄弟いないし。

まだワーキャー言つてる2人は無視することにした。  
アンドレアの方に向き直す。

「あのぉ……ちょっとといい？」

離れている2人には聞こえないだらうけど小声で言つ……まあ聞こえたつていい話だけど、うるさいのが1人いるから。

「なんですか？アシユリーナ様がそんな折入つた話をしてくれるなんて珍しいですね」

「そりやどうも……あのさあ、私、レン様と出かけたでしょ？」

「はー」

「そこでああ……『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>に会つちやつたんだよね」

「……えええええつー？」

声のボリュームが自然と大きくなる。

ちらつと後ろを振り向く……が、まだ2人は喧嘩していた。OK。

大丈夫……

「あんた、うるさいのよつ！折角小声で話してる意味ないじゃないつー！」

「あ……スマセン」

ふうっと小さくため息をつく。

「まあ……彼女一人だつたし、遠くから見ただけだから何にもされてない。脇道に入つたから追いかけていつたんだけど……忽然と姿を消しちゃつたんだよね」

「なぜでしようか……彼女つて『マリア』と名乗つていたあの人でしょう？なぜ、彼女はここにいたんでしよう？」

「私が思うに……あの金髪男の言葉を覚えてる？俺たちには女神がついているって……」

「ああ、そんなことも言つてましたね」

「あの女神が『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>のことだと思つの……それに昨日話したでしよう？アダム様がこの国に来たとき、ヴィートが追つて来たつて。それでソネアを要求したつて……絶対何かあるわ……」

「まあそつだとしても、しばらくはトステム侵攻はありえないでしょう」

「どうして？」

「こいつとアンドレアが微笑む。

「だつて依頼主が瀕死ですから」

「……そうだといいけどね……もう帰ろつか」

おおい、とカイルとヨシュアを呼ぶ。そして4人で来た道を戻り始めた。

\* \* \* \* \*

「レン様。私たちは帰りますね」

ラクダに乗りながらアシュリーナは言つた。

「ええ。気を付けて……滞在中はご不便ばかりかけてすみませんでした」

「いいえ、とんでもない……寧ろ楽しかったですよーまたいつか

機会があれば来ますね

ぱあっとレンが笑う。

「そうですかっ！ こつでもお待ちしますよー！」

すつと手首を見せる。そしてはあのおばさんがくれたブレスレットがあった。

『ペアで買うと願いが叶うってこの噂があるんだよ。ちゃんとつけてないとダメらしいけどね。今までこれを買つていったカップルはどれも幸せになつたってや』

おばさんの言葉を思い出す。

くすつと笑つて、自分も手首を差し出した。

「お互い幸せになれるといいですね」

「そうですね……アシュリーナ様。ちょっと……」

レンが手招きする。

なんなんだろつかと、ラクダの上から身を乗り出す。するとレンが素早く頬にキスした。

「……れ、レン様っ！？」

レンはニヤッと笑つて、

「また来てくださいね。アダムと待つてます……そのネックレスも忘れずに」

さあ、とアシュリーナの肩を押す。そしてラクダにむやんと乗ることができたアシュリーナの顔は真つ赤だった。

「また来てくださいねえ」

レンが大きく手を振る。それに応えアシュリーナも手を振る。

これでアシューリーたちのトステム旅行は完結。

**帰国（後書き）**

はい。完結しました。

。

次から新章突入です

では

隊商（前書き）

おひやじぶつです

今日は平和な章です 平和つていーなあ  
⋮⋮⋮ w

ふあああ

アシュリーナがあくびを噛み殺す。  
彼女があくびをするときは大抵会議の時だ。王と言えども事実上  
参加していないにも等しい。

「こんなめんどくさいもん、やつてられないしつー…」

そう漏らしたこともある。

今日は朝会議。眠い+退屈といつの悪要素が2つもあるもんだから、  
アシュリーナ弱冠アシュリーナ14歳の女王にはきついものがある。だが彼女は強制的に目を開けて一応頑張っている。頭は……どこかへ飛んでいそ่งだが。

「陛下。私はですねえ……」

いつも通り尻尾を振つてご機嫌を取ろうとする大臣。でも無視。

「陛下はどうお考えですか？」

「は？」

いきなり振られた。話を全く聞いてなかつた。どうしたものか……

「ええっと……何の話？」

「聞いてな……いらっしゃらなかつたんですねー！」？

「ええ、だつてつまらないもの」

自称天使の笑みで返す。するとげんなりして発言中だった彼は椅子に着席した。

「では朝議はこれで……」

まだ若そうな青年宰相が囁つ。

そこで1人の男がやつてきた。そして宰相に耳打ちする。

「……わかつた。」<sup>(シ)苦勞</sup>

男はぺこつと頭を下げるとすぐに退室していった。

今度は宰相がアシュリーナの傍にやつてきて耳打ちする。

「どうやら隊商の一行が陛下にお見えしたいとのことで……」

「ほう。隊商がか……。わかつた。会いましょう……もつ来てるの？」

「ええ。謁見の間で待機させてありますので。こつでもどうぞ」

にこつと微笑むとアシュリーナも退出した。

\* \* \* \* \*

「アシュリーナ様。トステムで『神々の黄昏』に会われたのですから、警戒を怠りませんよ!」

「もう、タルカシ! わかつたつて! ! わつかから何回言つてゐるの? ……ちゃんと佩刀していけでしょ? してゐじやない」

「でも私は心配なのですよ」

「あーはいはい。父さんと母さんに言はれてる、でしょ? もうなれ何回聞いたことか……行こつ、アン……ひやつ! !」

何かが膝上の辺りを通り過ぎた。きやつときやつとこつ笑い声も聞こえる……正体あばけたり。

「ちよつ! ネル! ! シャイ! ! ……私用事があるのつ……」

まだ幼い双子がその大きな目で見上げる。少し潤んできている。

「あしゅりーなさま……」

「ああ! ……タルカシ、バス」

「まったく……ほら、シャイちゃん、ネルくん。こひひアシュリーナ様の御仕事が終わるのと一緒に待ちましょうね?」

「やだあ!」

「私たちもあしゅりーなさまといくう！」

2人がそろつて駄々をこねる。泣く子（特に幼児）の扱いはすぐ困る。あ、もう涙が……！

「と、とにかく！タルカシ、よろしく！…シャイ、ネル！タルカシの言つことをよく聞いて大人しくしてよつ！…」

「やだあ～」

まあこういう場合の対処法は、とにかく逃げることだ。それに尽きる。全力で走つたら追いつけないし……我ながら大人げないな。でも仕方がない。

「アンドレア！走れっ！…」

謁見の間までダッシュする。軽装を許してくれなかつたので、着物の長い裾が邪魔で走りにくいがとにかくダッシュした。

後ろから泣き声が聞こえるよつな、聞こえないよつな……無視敢行。2人には我慢してもらおつ。

\* \* \* \* \*

「お待たせいたしました」

謁見の間にいると、おじさんを先頭に人々が玉座に向かつて低頭しだした。彼らの背後には荷物を積んだラクダやらなんやらがあつた。

「私はこの隊商のリーダーを務めています、ファルと申します。キャラバン

以後お見知りおきを」

以後お見知りおきを、つていうことはこの後もちょくちょくこいを出入りするということ?それは……

「え、ええ……どうぞ顔をお上げください。それで御用件と言つものは?」

するとニコッと日に焼けた顔が笑つた。

「あのですね、これから『赤の砂漠』を越えようと思いまして。

なにかと盗賊も多いところですか?……それで少し兵士をお借りしてもよろしいかと……」

「はい?」

何、兵士を借りたい?そんなずつずつしき。

『赤の砂漠』 そこは大した村も街も無いから警備兵もない。だから死角となりやすく、盗賊やら未知の怪物がいるとかいないとか……だから隊商の人たちもなるべく避けて通るという、別名、魔の砂漠。

「あ、あの、そこを通らなければいけないのでしょうか?」

勿論、兵士たちだつて嫌がる道だ。喜んで同行するものなど皆無だろう。

「いや、そこを通るのが最短距離なんですよ、『赤の砂漠』の途中にある町に寄るには、遠回りして行つてもいいんですが、それにはちょっと食料が……」

「で、では、食料をお渡しします!それで如何でしょうか?」

するとますます顔に笑顔を広げていった。

「ありがとうございます!」

それが目的だったのね……そつならそつと言えばいいのに。

「ではお詫びに陛下に珍しい品を献上いたしますね……ほり、メシー、こっちへおいで」

メシーと呼ばれた、妖艶な美女が荷物を積んだラクダを引いてきた。

「これはなるは遠い東洋の国の織物です。特別な方法で織られてゐるから丈夫ですし、何と言つてもエキゾチックでしょう?」  
「ではまず手に入りませんよ」

「はあ」

それからじんじん異国の品を紹介していく……つまらない。

ふあああ

小さくおへびました。

隊商の青年（前書き）

土・日がちょっと来れないの……今日更新です

「……今すぐ、食料の手配を……」

ファルからの執拗な商品の勧めを受けて、すっかり疲れてしまった。

まあ、受け取らないわけにはいかないから、テキトーに物をもらつておいた。それが礼儀だよね？

彼らは当分町に泊まるらしい。で、食料の調達ができたら呼びに来い、と。どんだけずうずうしいんですね。

隊商が切り上げてから、そこいら辺にいたテキトーな大臣に命じておいた。

「……疲れた」

玉座を立つと、まっすぐ自室へ向かった……あ。シャイとネルが。疲れた上に、また疲れが……一考えただけで疲れるな。でも、少しごらいなら相手してもいいかな。

「「それで、それで…？」」「

綺麗な2重奏。あれ、「機嫌？」

「続き聞きたいか？」

「「ききたいよお～」「

「じゃあ特別だぞ……お姫様は隣の国の王子様と幸せになつたんだよ」

「「わあー！よかつたね」「

ぱちぱちという拍手。というか男の声がするぞ？誰だ？？

「あんた、誰よ」

シャイとネルに話を聞かせていたらしい青年に言った。

「「あ、あしゅりーなさまだあ」「

双子がアシュリーナを指差す。タルカジが低頭する。

「僕かい？」

「そうよ……見た感じ、ここの人間じゃないわね」

えへっと笑う。

「うん。僕は今日来てた隊商のリーダーの息子だよ」

「……フォルって人の？なんでこんなところにいるの？」

「だつてえ……つまんないじゃない」

しつと言う。いやいやいや……つまんないって……

「誰を差し置いてそんなこと言つてんの」

まったく。というかどうしてこんなとこいんだよ？

「タルカジ。こいつどこのから来たの？」

タルカジが地面すれすれまで頭を下げた。

「申し訳ございません……ただシャイとネルが泣き止まないのを見て、この青年があちらから……」

「止めなかつたの？」

「……すみません」

はあーっと溜息を吐く。こんな甘々の警備、じゃ侵入者歓迎とう看板を立ててるみたいじゃないか。しかもこんな奥まで。ホントにダメ。

「……あんたも今回は見逃してあげるわ。だけど、もうここには2度と来ないで。今度はちゃんと牢屋行だから覚悟しておきなさい

……あなたの隊商は町へ下つたわ」

「君は女王様かい？……失礼したね。父の居場所を教えてくれてありがとう」

実際に軽々しい男だ。女王と（一応）認識してるなら、敬語使えよ

……後で大臣に言つておこう。一人分（勿論、こいつの分）減らせつて。

男はシャイとネルに手を振つてから、出口の方へ歩いていった。

「「あしゅりーなさまあ！あのね……」」

2人はどうやらあの男に教えてもらつた、おどき話をアシュリー  
ナに話してくれていいようだ。ここは真剣に聞いてあげる。  
そして（支離滅裂な）話が終わつた後、ちゃんと感想を言つてお  
いてあげた。

「「あのおにいちゃんにまたあいたいね」」

「……ダメよ。もうあの人はここに来ないの」

「「どうして？」」

「不審者だもん」

「「ふしんしゃ？」」

「そう。悪い人なのよ、本当は」

「「うそだあ」」

2人はほつぺを膨らませながら抗議する。でも会えないのは事実  
ですから。

「「ねえ、どこにいつたらえるの？」」

「もう会わなくていいわ。その代り私がお話を聞かせてあげるから」「  
昔読んでいた童話集がまだどこかに残つてゐるはずだ。もしなく  
ても近くにある図書館に行けばいい。

「「ほんとに？」」

「ええ……もつと面白いのを聞かせてあげるわ

「「やつたあ」」

黄色い声。そしていつ聞かせてくれるのかとせがむ攻撃。

「あ、あしたね！」

……明日、首都を視察しようかなと思つていたところだし。多分  
2人を連れていくことにはなるだらうから、その時にも……

「「ホント？」」

「明日、一緒に首都へ遊びに行くわよ……大人しくしてないと連  
れて行つてあげないから」

タルカシに聞こえないように2人の耳元でぼそぼそと言つと、2  
人はぱあっと花が咲いたように笑つた。

「やくそくだよー。」「はいはい

「アシュリーナ様、なんの約束ですか」

「つるさいの 双子の父親、ヨシュアが来た。

「ええっと……2人に童話を聞かせる話

「……本当ですか？」

「あたりま

「あしたね、あしゅりーなさまがおとにつれていってくれる  
つて！」

「おいっ！早速バラすなよっ！！

しかしヨシュアの反応は意外なものだった。

「そうか。それは良かったな……ちゃんとアシュリーナ様の言つ  
ことによく聞くんだよ」

「わかった」

「え……いいんですか、ヨシュア将軍？」

「將軍とか今更付けないでください……まあ今のうちに王宮の外  
を見るのもいいかと思つて。シャイとネルをよろしく頼みますよ  
ぽんつと子供の頭に手を置く。それが嬉しかつたらしく、双子は  
きやつときや、と笑つてゐる。

……まだ、決まったわけじゃないんだけどね。だって朝議でも公  
表してないし。反対されたら力で押すけど、行けないかもしれない  
から。

でもこの状況を見る限り、行くことになりそうだ……ワッキー

隊商の青年（後書き）

「ラッキー＝退屈から抜け出せる

です アシュリーナの頭の構造は基本ノーノです。どうもひつたひつた  
な生活から脱却できるか、なのです！

では読んでくださいがとにかくこまつた

## 視察（前書き）

首都の名前を出した記憶があるのですが……忘れちゃったので……  
テキトーに付け直しています。覚えていらっしゃる方がいれば、この  
ダメダメな玖龍に教えてください。（…）出してなかつたら  
……」の話を忘れてくださいね

予約投稿なので……土口来れないのは確実です。。

「いいですか？アンドレア将軍の言つたことをひやんと聞いてくださいよ」

「はいはい、わかつてゐて……つたくタルカシはそういうことばっかり

「「ばっかりー」」

シャイとネルがアシュリーナの真似をする。

タルカシがきつとアシュリーナを睨む……なぜ？

はあーっと溜息をついて、タルカシは続けた。

「あくまでも今回の目的は首都の視察ですからね。余計なことは一切なさってはいけません」

ズビッシュと人差し指を突き立てる。

「わかつたからつて、もう……」

今度はこつちが溜息をつく。

朝議で提案すると満場一致の賛成。え？ そんなわけない？ 力でねじ伏せた？ そんなわけないでしようが。フフフ……

それでアンドレアを率いて首都に下ることになつた。

「それと、シャイとネルも同行するんですから、しつかりお世話をしてくださいね」

「はいはい」

「……真面目な話なんですねけど」

「じゃあ、こいつか」

「うん」「うん」

双子の手を引いて王宮を後にする。

\* \* \* \* \*

賑わいを見せる、首都ケシア。人々は平穏な生活を送っているようだ。

そこへアシュリーナたちが通る。庶民とは違つた、煌びやかな格好をしている彼女らはかなり目立つた。そして人々はアシュリーナの姿を認めた。

「ねえねえ、あれって……まさか……」

「アシュリーナ様？」

「絶対そうだわっ！！アシュリーナ様あ！」

歓喜に沸く人々が一斉に通りつで集まり、手を振る。それに応えるようにアシュリーナも微笑んで手を振る。それを真似するようにシャイとネルも手を振る。

彼らの姿を見た民衆はぎょっとした。なんせカイルの子供のことは公表してなかつたからだ。

「なんだ、あの子供？」

「まさか……アシュリーナ様の……！？」

「んなわけないだろっ！？」アシュリーナ様はまだ14歳なんだぜ

？」

「まあ……そうだな……じゃあ、あいつらは誰の子供なんだ？」

みんなが一様に首をかしげる。

そこへ花束を抱えた女性がアシュリーナに近づいてきた。

「陛下、今朝摘んできた花です。どうぞ」

笑顔で渡される。

「まあ、ありがとう……珍しいわね。とても綺麗だわ。自室に飾

らせましょう」「う

にこつと微笑み返すと、女性は顔を赤らめた。

そしてシャイとネルに話しかける。

見知らぬ子供

「ほうやとおじゅうひやんぱいのナ?」

「「？」」

「あ、」の2人はヨシュア將軍の子供なんです

「え……うそ……！」

「どよめきが走る。いや、そこまで驚かなくても……いや、驚くか。

「い、いつの間にっ!?」といつかヨシュア將軍つてお堅い人だと

思つてたのに

「いや、お堅い人だぞーなんせ子供出来たってことも知られてなかつたんだし……女の影も見えなかつたぞ」

「一体相手は誰なんだ……？」

ひそひそ声が飛び交う。

「アンドレア……どうじょうか

隣に立つアンドレアに横眼をやる。

アンドレアは肩をすくめた。

「どうじょうつて……ここを早く抜けますか」

「そうね……それがいいわ」

アンドレアの案に賛成すると、もう一度手を振り、そそくせとその場を逃げ出した。

案の定、その家の大人たちは大パニック。

「あ、あ、あんたつ！！女王陛下だよつ

「なんだつて？お前ももうもつひ……わつ！あ、アシュリーナ様

だつ！」

「あんた、ちゃんとおしつ……アシュリーナ様、今日はどうぞつ  
なさつたのですか？」

「ええ、ちょっと視察にケシュアに来たところです。みなさんお

元気ですね。安心いたしました。では、これで……」

（再度）ニコツと微笑みながら、家々を後にする。

子供たちの不服そうな声が後ろから聞こえてきたが、それは無視  
しよう……。「メンね

ケシュアを回るのには一日かかった。  
首都

最後の集落に入った頃にはもう日が沈みそうだった。

「アシュリーナ様、これから王宮へ戻るのは危険です。ですから  
ここを見た後は少し引き返して、宿場にでも泊まりましょう

「……迷惑じゃないから？」

「でも、それ以外方法がありませんし……」

「じゃあ、お忍びで。あとこれだけの人数じゃ迷惑だわ。3人  
4人に分散しましょう」

で、グループを作る。

アシュリーナは当然、護衛のアンドレアとチビ2人と泊まる」と  
になつた。

「「わあーい あしゅりーなさまといつしょだあ」「  
きやつときやとシャイとネルははしゃぐ。

と、そこで微かに笛の音が聞こえた。

「……田楽 ?なんかちょっと違うなあ……なんだつひ

「お祭りじやないですか？」

誰かが言つ。でもそんな賑わいはここにはない。  
……ではなんなんだろう……？

アシュリーナは音のする方へ駆けて行つた。  
段々音が大きくなる。近づいている証拠だ。  
そしてついに発見した。

「あんたは……」

異国風の服装をした青年　　庭でシャイとネルを宥めるために物語を聞かせていた男が笛を持つて岩に座つていた。

こつちに気づくとニコッと笑う。

「あれ？女王様じゃない？それにチビたちも……どうしたの？」

アシュリーナは自分の顔が引きつるのがわかつた。

視察（後書き）

読んでくださいありがとうございました

「どうしてあなたがここにいるの？」

苦い顔でアシュリーナが言つ。

青年は笛を吹く手を止め、えへへつと笑う。

「ここで笛吹いてたんだよ」

「そんなの見たら分かるわよ……<sup>キャラバン</sup>あの人たちは？」

「ああ～」

そんなんでいいのかよつ！？

それって完全にはぐれちゃつてるよね！？

思わず天を仰ぐ。

「だつてどこにいるかわからな～から……」

あたしだつて知らねえし。

「だからさ。どこか宿紹介して」

「厚かましい」

一蹴。すると青年はええーと頭の上で嘆いた。

「

「ねえおにこちゃんーまたおはなしきかせてよお」「

シャイとネルがてててつと彼の方へ走つて行く。

アンドレアがそれに反応する。

「また……？どうこうことですか？」

なぜかアシュリーナの方を見る。

「ん……あんたうるさいから教えない」

「なんですかそれ？ますます怪しいですよ」

「このおにこちゃんがおはなしきかせてくれたのー」「

シャイとネルが暴露。

「どこでへー」

「おうりで」

「おうち……王宮のことが……おまえ、なにやつだ」

血氣盛ん。アンドレアが剣の矛先を青年に向ける。

彼は笑いながら両手を挙げた。

「怪しいものじゃないつてえ……あの隊商の隊長の息子です。名前はゼンです。なんにも悪いことしてないつてえ」

「「そうだよお。あんどれあのばあか」」

シャイとネルが言うと、アンドレアが顔を真っ赤にした。笑つてはいけないだろつか?

それはいいとして……

「まあこいつは何にもしてないし、私が放免したんだ。アンドレアが今更どうこうする問題じゃない。……で、本当にどこにいるか知らないのか?」

「うん。宿教えて」

「しょうがないなあ、もう。ええっと……メセトと同じ宿に泊まれ。メセト」

メセトと呼ばれた男が駆けてくる。

外見はアシユリーナと同じ年ぐらいの少年。綺麗な黒髪に黒眼。

「なんでしょう?」

「今田はこいつも一緒に宿に連れて行つてくれ

「ええ、めんどくさい」

「正直に言うな、おまえ」

「だつて、男嫌いだし(笑)」

「大丈夫だ、こいつは男じゃない」

「いや、待つて!男だし」

ゼンが抗議するが無視。

「「ええおにいちゃん、いつしょにとまらないの?」」

シャイとネルが甘えた声を出す。

「だつて私が嫌だから」

「「じゃあシャイとネルはおにこちゃんといつしょ」とある」「

「ええ、俺ガキの相手苦手だから却下」

メセトがにつこり微笑みながら毒づく。

顔はそれなりに整っているのに、性格は最悪なのがこの男。アシ

ユーリーナの学校の同級生だから容赦がない。

「「でもお」」

「アシユーリーナ様の警護の問題だからシャイもネルも諦めり

「「やだ。けっこつてなに?」」

「「いつが怪しい奴だから」

「「あやしくないもん。おにこちゃん、やせしーもん」」

「優しくてもダメ」

「「あしゅりーなさまあ、あんどれあがこんなこといつてるーおにこちゃんわるいひとじやないよね」」

「え……う……わからない」

微妙な返答に2人は頬を膨らませる。

「ガキのおもつまで俺に押し付けんなよ、アシユ。いつそのこと一緒に泊まっちゃえよ」

メセトが実際にテキトーに言ひ。

双子の様子からしてそうするしかなさそり……最悪だ。

「もう……わかった……だけど、部屋は4つ以上離れたところに取るからなつ……！」

「4つ? なんで? でも泊めてくれるの? ありがとう  
ゼンがぶんぶんと握手してきた。

というわけで迷子、保護。

迷子青年（後書き）

シャイとネルがカタカナ語をほとんど言わないし、漢字使えないし  
……めっちゃメンドクサイです w

ゼンヒメヤトをよろしくお願いします 三（・・）三

アシュリーナも設定上では、首都の貴族が通つよつな学校に行つて  
いたことになつてます。

では読んでくださいありがといわざいました

「ねえ……なんでこいつなる?」  
アシュリーナは大きな溜息をついた。

遡ること1時間前。

迷子を保護したアシュリーナたちは、宿を取りに町へ戻った。  
少ない人数を分けて作った、それぞれのグループは翌日の待ち合  
わせを決めたあと、テキトーに宿を捜し歩いた。

幸い、よさげな宿が見つかったのでアシュリーナたちはそこに泊  
まることにした。

「いらっしゃいま……あ、あれ? あ、あ、アシュリーナ様つ! ?」  
「一晩よろしいかしら?」  
(自称) 天使の微笑み  
「い、いや、も、も、勿論ですよ!」  
「3つ部屋は空いてますか?」  
「は、はい、丁度いい部屋が空いてます」  
「では、こそを頼めるかしら?」  
「あい、わかりました……すぐに用意させますのでしばしあ待ち  
を」  
中年の小綺麗な男はすぐに奥へ入って、てきぱきと準備をさせて  
いる様子。  
アシュリーナたちは狭いロビーの隅に固まって待っていた。  
そしてしばらくすると数人のメイドたちがオーナーらしき男と出  
てきて客を案内した。

「いらっしゃりでござります……狭い部屋でスミマセン」  
と言われたが、部屋はすゞしく綺麗でピカピカに磨き上げられた床、窓から見えるは絶景である。狭いどころか、王宮の召使部屋よりは広い。花が生けられているなど、細かい心遣いも見られた。

「いいえ、そんな！ 素晴らしい部屋じゃないですか！ 御主人の人柄が現れたような部屋ですね」

「お気に召されたようだ大変嬉しく思います。ほかのお部屋も同じような作りになつてるので、ひとつお好きな部屋へお泊りください」

「ありがとうございます！」

「いや、ほんとありがとうございます」

ゼンがにゅっと顔を出した。で、オーナーらしき男の手をブンブン振つて握手。ついでにメイドへの口説きも忘れない。

「ゼン、何やつてんの」

「こにはビシッと叩いておく。年上なのに情けない。こんな大人にはなりたくないね（笑）

ゼンは痛そうに頭を擦る。

「おにいちゃん、だいじょうぶう？」

心配そうに見つめるシャイとネル。平氣だよお、と男は返す。

「では、じゅつくり。何かありましたらどうぞなんなりと」

宿のオーナーとメイドたちは笑顔を浮かべながらその場を立ち去つた。

「はい、部屋分け。アンドレアは隣。ゼンは一番端、……って言つても取つた部屋の中で、私たちの部屋から一番遠い所ね。シャイとネルは私と寝る。いい？」

「ええーおにいちゃんといつしょがいいー」「

「わがまま言わない！ はい、2人共部屋に行つて」

そう言つて、アンドレアとゼンをポンッと押す。するとシャイヒネルが怒り出した。

「「なんでおこにちやんといつしょじやないの…? やだやだやだ

!...」

「じゃあち、僕たち寝るまでは同じ部屋にいよひよっダメかな、お嬢さん」

ゼンが悪そびれた様子もなく平然と笑顔で言つて。

いや、そうしたら部屋分けた意味ないじゃないか?

しかしチビ<sup>シャイヒネル</sup>2人は案の定賛成した。

「「あしゅりーなさま、そうしょひよお」」

服の端を2人で掴んで、引っ張つてくる。

「ね? 2人もそう言つてるんだし、お嬢さんいいよね?」

「誰が『お嬢さん』だ。アシュリーナ、よ。せめてそう呼んで」

「じゃあアシュリーナさん、そうしょひよ?..」

助け船<sup>アンドレア</sup>は……全く役に立ちそうもない。はつきり言つとわざっぽ向いている。面倒ごとから逃避しやがつた! なんなんだ、一体。全く使えぬ奴め。

というわけで始めて戻る。

謎の男とは知らず、ゼンと一緒にいられるのが余程嬉しいのか、シャイヒネルはずつと笑いつぱなし。アンドレアはそんな様子を見て微かに微笑む。

私はと……察してほしい。1人だけ違う部屋に行つてもいいだろうか? いや、無理でしうね、はい。

「おにいちゃん、おはなし!..」

「ははっ! そんなに話が好きか? ……そうだな、じゃあ『星から

やつてきたお姫様の話。こんなでどうだ?」

「うん、いいよ」

うん、悪いよ……と思ったアシュリーナを無視して3人は盛り上がり始めた。

……早く寝よつ

ナラ決意した。

「やつと寝てくれたよ、もひ  
ゼンがフーとため息をつぐ。

シャイとネルが彼に話ををするもひせがんで、早2時間ぐらじ。總  
5話ぐらい語らせていた。

ようやく寝たくなつてきたらしく、途中からコクッコクッといった  
た寝していたが、ついに耐えきれなくなり今では規則正しく寝息を  
立てて眠っている。

「子守お疲れ。もう帰つていいわ」

アシュリーナはゼンの顔も見ずに言つた。

アンドレアが頷く。

「そうですね。我々は自室へ戻りましょう。行きましょう、ゼン  
さん」

アンドレアがゼンの腕を掴もつとする。しかし彼はそれをするつ  
と抜け、アシュリーナに近づいた。

「な、何？」

ビックリして振り向いた彼女。

しかしゼンはにっこり微笑んでいた。

「いやさ、アシュリーナさんにもいろいろお世話になつたし、君  
にお礼しなきやなつと思つて。だからわ、忠告じゃないけど、君  
にもお話をしてあげるよ」

「いいわ、私そんな気分じゃないの」

しつしと手を振るが、無視してアシュリーナの横に座り込むゼン。

「いいくて言つているでしちう？」

「じゃあ聞き流すだけでいいから」

はーっとため息をつき、短くしてねと呟いた。

「あれ、元々砂漠の民に伝わる話なんだけさ、知つてゐる人は知つてゐるみたいんだよね。アシュリーナさんも知つてゐるかもしないけど。ま、知らなかつたら覚えていて」

え？ もつとき語つてたことと違つような気がするのは気のせいいか？

「昔々あるところにとても綺麗な女の人がありました。その人はお父さんとお母さんと何不自由なく幸せに暮らしていました」

「ちょっと待つて。この話つてその幸せな女性の話が延々と続くわけ？ 幸せ話ならもういいわ」

そんな話聞きたくない。第一父と母と幸せに暮らしていたという時点でのアウト。

しかしううん、とゼンは首を振る。

「これから話は深刻になる。……元に戻すとある日彼女を残して家に生者はいなくなつた。彼女が家を留守にしている間、何者かが家を襲つたのだった。狂気にかられた彼女は、犯人を探し出し、ついに殺してしまつた——神からの罰だと言つて。

その後、彼女はどこかへ行方を眩ませた。消えてしまつたのだが、多分砂漠かなんかにふらふら入つて行つたんだろうけど。

そしてそれと同時になぜか周辺国の犯罪者は減つていった。逮捕しようとしても、なぜか殺されて発見される。そしてその殺人を目撃した人は言つたんだ……あの少女が悪魔を従えて來たつて。誰もが驚いていた。

そして最大の事件は『魔の月』の日。この日、とある町の子供たちが皆一様に消えてしまつた。どこへ行つたのかも分からぬ。どこを探しても見つからない。大人たちは心配してあちこちを探し回つた……そしてその数日後、その町は崩壊した……子供たちの手に

よつて

「ゴメン、まったく意味わかんない。第一『魔の月』の日つて何よ？第一いなくなつた子供たちが1000人いようと、10000人いようと、町は滅びるわけないでしょうが」

呆れた。何なのかと思ったが、それはただのお伽話で、聞くだけ無駄というやつですな。『忠告』って言うから聞いてはみたものの……

「『魔の月』っていうのは皆既月食の日のことだよ。不気味に紅く光る月を見て、古代の人は恐れ戦いた、っていう話知らない？あの日は月の魔力が強まる、転じて災いをもたらす悪魔の力が強くなる日つて信じられているんだ。で、消えた子供たちは何者かに洗脳されてふらふらとどこかへ消えてしまった、というのが真相」

「その何者かつていうのが……」

「そう、あの綺麗な、そして狂気にかられた女の人。こういう事件が多く続いたけど、やはり人には寿命がある。約30年後、彼女は笑いながら狂い死にしたという。事件は終息するかと思いつや、一向に減らない。なんでも彼女の跡継ぎが代々誕生し続けているらしい……これが『黄昏をもたらす民』の始まりだと言われている」

『黄昏をもたらす民』？それって……

「ねえ……その人たちつて『神々の黄昏』じゃない……？」

「そう言つてる人たちもいるね。どうして？」

きょとんとした顔で尋ねる。

「いや、いいの。忘れて……でもそれがどうして忠告なの？」

「だって、今度皆既月食が起きるから……あ、なにその疑いの目。僕達は腐つても星を読んで旅する隊商だよ？それぐらい星読みがいなくたつてわかるさ」

……十分怪しいから、一応神官にでも訊いておいた。

「……とこいつとはもうすぐ『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>が活動を始めるところのこと？子供たちを集めて、どこの国を狙うのかなんて愚問だ……きっとダングラジ<sup>ヒュ</sup><sub>ターゲット</sub>を標的にしていく。」

彼女は……マリアは絶対ここを灰に変えにくる。どうしたものか

。

「一応忠告として聞いておくわ。貴重な話をありがとう……ではおやすみ。とこいつが早く部屋から出る」「じゃあね～、と手を振りながらゼンは退室。それにアンドレアも続く。

彼は退室際、いかにも見て小さく頷いた。

どうやら決戦の日は近いらしい

## 魔の月の話（後書き）

月食の話は特に、古代バビロニア周辺で信じられていました。月食の日、彼らは紅い月光に当たらないよう、一歩も外に出す祈祷をしながら過ごしていましたよ。……これは某マンガの解釈。

では読んでいただきありがとうございました。

帰宅（前書き）

お久しぶりです。テストが終わったので早速投稿します。

しばらく書いてなかつたもので、アシュリーナの口調が変わったような気がします。が、気にしないでください（いや、気にするでしょう）

で、翌日。無事に王宮に戻りましたと。ぱりぱり、となるはずだつたのに……

「ゼン……さりげなく付いてきていたの？」

「え？ なんだって？？」

「……えーっと、確かにこちらに短け」

「ああ……うつと待つて……。『メン……でも行くといひ無いんだつ……』」

…………  
キラバツ  
隊商探しか。

でもこれはゼンが悪い。ふらふらと王宮の中に入り込んできて、拳句の果てにシャイとネルを手なずけて。それで仲間の所在が分からず、見えなくアシュリーナたちが保護。

…………  
情けないね

「いや、『情けないね』じゃないから！」

「でもさあ、もう朝だし、あんたには立派な足があるじゃないか！ 頑張つて歩いて探せ（笑）」

「（笑）つて……僕、バカにされてるよね？」

「あ、ばれた？……まあ、とにかく、探せ。ここは広いわけじゃない。一日で見つかると思つぞ？」

「そ、そうかな……？」

「おにいちゃん、ばいばい」

「み、見捨てられた！？」

シャイとネルに見捨てられたと感じて、そのまま諦めてくれたら

OKだったのに。

結局ここはついてくるわけです。

「あ、陛下お帰りなさい」

アシュワーナたちの姿を認めた侍女たちが声をかける。それに笑顔で返した。

「ただいま。変わったことは?」

「ありませんでしたよ。わあわあお疲れでしょうへお部屋へ行かれますか?」

「ん。それよつちよつと用事があるからわあ……『ゴメンね』そう言つて、侍女の申し出を断つた。

用事　まずはお荷物の仲間を探すこと。

これは、手配した食料によつて左右される。準備できていたら、彼らを呼んでそのまま連れて帰つてもいい。出来ていなかつたら、自分で町へ下りて探してもらひ。

そしてもう一つ。

ゼンのあの話。『魔の月』　　いわゆる月食の有無。本当にあるのかどうか、一応確認しなければならない。

あの話については半信半疑だが、もし伝承通りやつらが活動を開始するならばこいつらとしても何らかの対策を取らねばならない。

とこつわけアシュワーナは単身、現在使用されてゐるであらつ会議室へと向かつた。

重装な扉の中から不特定多数の人物のぼそぼそとした話し声が聞

「える つまり会議中。

アシュリーナは深呼吸を一つすると、勢いよく扉を開けた。もちろん、一斉に大臣たちが振り返る。会話もぴたりと止まる。シーンとした空氣の中をアシュリーナは堂々と歩いて行つて自席へと着席した。

「陛下…お帰りになつたのですか？」

呆けたような声を出す一人。

「私が帰つてなにか不都合なことでも？」

声の主に微笑を浮かべながら訊く。

「い、いえ。滅相もありませんっ！ただ教えていただいたなら、わざわざ陛下の御足労もなく、私どもがお迎えに上がりましたのに」

「お気持ちだけいただいておくわ」

焦つてうわずつた声を出した彼に素つ気なく返すと、代理議長を務めるヨシュアに声をかけた。

「私の不在の間、迷惑をかけたね。それで今はなんの話をしているの？」

ヨシュアは軽く低頭すると、主の問いに答え始めた。

「……灌溉、ねえ。それもそのうち始めなきやね」

なんせ水不足の砂漠。わざわざ遠いオアシスまで行くのも面倒くさい。というわけで灌溉を作っちゃおう、という計画。

一番近いオアシスから水を引いて全土へ通す。これで少しは農作も楽になるのでは？と。

「これについてはサマリナ大臣をはじめとする、水管理省のみなさんに一任します。滞りのないよう」

「はい」

歯切れのいい声に頷くと、アシュリーナは食料の手配を命じた大臣に尋ねた。

「あのずうずうしい隊商キャラバンに渡す食料は？」

「手配できました。いつでも渡せます」

「御苦労さま。ではこの後、彼らを呼んできてください」とりあえず一安心。これでゼンとお別れできる。

「のあと少し残っていた議題について話し合い、1時間後にお開きとなつた。

ファルたちを呼びに行つてもうつてこる間に、自室へと戻り休憩することにした。

「あー疲れた……って、あんた、ホントに懲りないわね」苦笑いをしながら、あの日同様後宮に入つてきてシャイとネルと遊んでいるゼンに声をかけた。

「あ、おつかれさん」

「……。今日、あなたには帰つてもうつ。食料の手配が済んだから、ね。今度という今度は本当に『よひ』」

すると、ゼンは寂しそうに笑つた。

「へえ…… そうなんだ。うん。そうち……」

1人でしきりに頷いていた。「気持ち悪い。

「じゃあ、僕もちゃんとさよならするよ。でも、アシュリーナ……ちゃん、だよね？ アレだけは忘れないで。『魔の月の日』には何かが起こる。悪い予感がするんだ……」

珍しく真剣な表情で語るゼンに、アシュリーナも真顔で頷いた。  
〔ラグナロク〕  
「わかつてゐる。でも、私たちは『神々の黄昏』なんかには負けない……この手で消す」

「勇ましいねえ その調子だよ！」

「なつ……！ バカにしてるでしょう……本気なんだからつ……！」ゼンはふふっと笑うとすぐつと立ち上がつた。

「じゃあ、僕はもう行くよ。こんなところにいたら首と体が離れちゃいそだから（笑）」

「そうね……またね。い、意外と楽しかつたわ」

「意外と、つて……まあ、褒め言葉として受け取つておへよ。じゃあね、と手を振りながら、彼はこの場をあとにした。

「陛下、少しよろしいでしょつか？」

後ろから老いた声が聞こえた。

振り向くと、頭には変わった形をした帽子をかぶり、神官を表す真っ白な服。そして『最高位』を表す胸飾りをつけた老神官が立っていた。

「あ、私も丁度お話があつたのですよ、パトロ大神官」

「では、まず陛下のお話を伺いましょう。私の話は後で「パトロ大神官は無数のしわが刻まれた顔をくしゃっとして笑うと、アシュリーナのいるところまで下りてきた。

「それでは、お言葉に甘えて……街である男から聞いたのですが、近いうちに日食が起きるのですか？」

「おお、奇遇ですね。私の話もそれなのですよ」「え？」

驚いて田を見張ると、老神官は口を開いた。

「その男が何者かは存じませんが、確かに日食は起きます……それも皆既日食が。少なくとも1か月以内には

## 対抗策

「な、なんですって……？それは本当ですか……？」

愕然とするアシュリーナに向かつて、パトロ大神官は静かに頷いた。

「左様……ですからこれから1ヶ月、夜の外出は控えてください。万が一の事があつては、ダングラジエは立ち行かなくなります。そして、我々は今日より祈祷を行います。アシュリーナ様にも祈祷に参加されてください」

「……わ、わかりました……」

顔面蒼白（もちろん、めんどくせそうな儀式を思つてのことではない）。

こんなに早く来るなんて……ゼンの言つていたことは間違いではなかつた。少なくとも月食の件は、あとは……

「パトロ大神官、ご苦労様です。では今夜、準備が整い次第神殿の方へ向かいますので」

それを聞くと、老神官はぺこっと頭を下げて、神殿の方へと歩いていった。

彼がアシュリーナの視界から完全に消え去つてから、近くにいた侍女に— アンドレア・ヨシュア・カイル《3将軍》を呼ぶよつに頼む。

するとものの数分で3人は集まつた。

「いかがなさいましたか？」

アンドレアが尋ねる。

「ゼン あの放蕩男の言つたことは正しかつたわ……月食は起

「る、近にうち。で、ゼンの話によると刃食が起る日の、『  
神々の黄昏』は動くわ」

「！」

3人に緊張が走る。

ただの作り話かもしれない。どうやらゼンはお伽話を作るのが趣味のようだった。だからそれもただの物語りに過ぎないのかかもしれない。しかし……

「一応、兵の増強をあなたたちには任せるわ。多分これが最終決戦になると思うの……『神々の黄昏』を近にうちに私は潰すわ」

「万が一のときを考え、ということですね。では早速私はそれにとりかかりましょう。数を増やすことは無理に近いでしょう。が、個々の兵力の向上を図つたのでよろしいですか」

ヨシュアが真剣に訊いた。それにアシュリーナは無言で頷いた。

「それと、街にも警備兵を置いておくよ。……狙われるのは子供だわ」

「え？」

3人とも驚いたようにアシュリーナを見つめる。

カイルがくすくすっと笑いながら言った。

「そりやあないよ、姫さん。やつらはまっすぐここに来るよ。街に警備兵を置くのは賛成する。だけど子供を狙うのはちひつと、ねえ」

「いや……子供を盾にしたらあたしたちは手を出せない、でしょ？ そしてゼンの話でも子供を操った女が街を滅ぼしたって言つてたわ」

「それは物語じやない。眞偽は定かではないよ？」

「で、でもね、用心に越したことわいわ……とにかく、3人には直ちに兵力増強と警備兵の配置を頼むわ」

「はい」

歯切れのいい返事に満足する。これで、被害は最小限に食い止められる……かも。

「じゃあ、万が一襲つてきたら、僕たちは姫さんの警護？」「こいつと笑いながらカイルが訊く。

「いや、私なら大丈夫。自分で戦えるし……」

「でも、危なくない？だつてさ、使えると言つても相手はプロだよ？」

「大丈夫だからっ！！私は……私の手でケリをつけん……！」

一瞬空気がしんとなる。

息をのむ音すら聞こえる。

だけど、これが私の決意。5年前に果たせなかつた仇を討つ。

絶対やつてみせる

「アシュリーナ様、キャラバン隊商が到着しました」

その凍てついた空気を破つたのは、アシュリーナを呼びに来た侍女だった。

「あ、うん。すぐ行くわ！ありがとう」「かしこまりました」

彼女は一礼すると、そのまま立ち去つた。

「じゃ、私は行くから……よろしく頼んだよ」

3人も頭を下げ、広間へ向かうアシュリーナを見送つた。

\* \* \* \* \*

「いやあ、申し訳ござりません！本当に助かりました」

「そ、それはどうも……」

ファイは豪快に笑い飛ばしていたが、なにが面白いのかちっともわからない。

そんな視線を送り続ける。

が、完全に無視された。

「では、私らはこれで……本当にお世話になりました。ほらっ、ゼン！お前も挨拶しろっ！！……つたく、どこに行つてたんだか。ふらふらと出て行きやがったと思つたら、ふらふらと戻つてきて……すいませんね、うちの息子も國の人にして迷惑をおかけしました」特に私たちにね、という言葉は胸の内にしまつておく。

「では、失礼いたします」

ファイをはじめとする、隊商の一行はそろそろと立ち上がり、ぞろぞろと出て行つた。

その際に、最後尾につけたゼンがアシュリーナに手を振つた。仕方なくアシュリーナも小さく手を振りかえす。

……災難その一は去つた（と思つ）

夜の顔（前書き）

「暇がつまらない」とこうのはあたしだつたりします。。

## 夜の顔

熱砂の砂漠を漆黒の闇が包む頃。

朧げに浮かんだ月は弱々しい光を放っていた。

相変わらず暑い南風が吹き荒れる砂漠に、1人の人間が立つていた。

全身を真っ黒なマントで包み、目深にフードを被っているので顔は分からぬ。

しかし、わずかに覗いた唇の端は持ち上がっていた・・つまり笑っていたのだ。

そしてすっと右手の人差し指を前方に持ち上げる。

「もうすぐ……裁きの矢が……あの娘を貫く……国は……灰と化す……クスクス」

人差し指を向けた方向……といつても遙か彼方なのだが、そこには全体が灯りに照らされ、明るい色を放つ街があった。

「汝に……幸あれ」

そう呟くと、クスクスつという不気味な笑いを残し、その人はマントを翻し、闇夜に消え去った。

\* \* \* \* \*

「暇つてなんて素晴らしいのかしら」

質素な椅子に優雅に腰掛け、足をぶらぶらさせていアシュリー

ナが呟いた。

「暇であることは、それだけ平和つていうことなんですよ

そばに控えていた侍女、タルカシがそう口メンツした。

「だから素晴らしいって言つたじゃな」

『暇なんてつまらない』

そういう思考の人が増えているような気がする。  
けれども、暇ってなんにもしなくていいし、寝てたつて怒られな  
いし……すごく魅力的

「「「ずどーんっ」「

アシュリーナの体側になにかがぶつかる。……シャイとネルだつ  
た。

「何?今、すごく機嫌がいいから相手してあげるよ?」

思いつきり皮肉を言つ。不自然に口角が持ち上がる。

「「え、ほんと? やつたあー」「

……わかるはずもないか……

「じゃあ、愛すべき暇にさよならするわ

「いつてらっしゃいませ

タルカシが止めてくれることを期待していたのに送り出された。  
いつもなら止めるくせに……

……減俸決定(嘘)

\* \* \* \* \*

夕方。夕日が西の空を朱に染める頃。

「「ただいま」「

シャイとネルが王宮に向かってダッシュする。

「あら、シャイとネルじゃない。ビニに行っていたの……って、アシュリーナさまも?..」

侍女の一人が口に手を当てる。

「う、うん……ただいま

ちびは元気でよろしい。なんの文句もない。だって子供が元気が一番と言つではないか。

でも10歳差とはいつも違つのか?

最近体力の衰えを感じます。どうしたらいいのでし……

「アシュリーナさま? 独り言はにつものことですナビ、すぐへ怪しいですよ?」

正論言つな。給料減らすぞ(嘘)

「ええっと……湯浴みするから」

「はい、わかりました。すぐ御用意しますね」

ふふふふと笑いながら彼女は奥へと歩いて行つた。

湯浴みを済ませた後、晚餐。

『晚餐』といつてもそんな豪華なものではない。アシュリーナがそれを禁じている。

しばらくしてシャイとネルは就寝。子供は早く寝ないとね

「陛下、御準備はできましたか？」

「ええ。今行きます」

あの不吉な予言の晩から続く、（めんじくさい）儀式。

別にいらぬくな？と思つたが、神官たちは撤廃を許はしないだろう。特に大神官。

白一色で統一した服で侍女にかしづかれながら神殿の方へ向かう。長い回廊を神官と侍女2人、そしてアシュリーナの4人で歩く。

今日は綺麗な満月。淡い光を放ちながら、黒の世界に君臨する。

「……月食なんて起きるの？」

そう呟いたとき、神殿の方から男が走ってきた。

「何事ぞ？」

同行していた神官が男に呟つ。

「つ、月が……顔を……つ！」

急いで振り返る。

少し月が欠けていた。

## 仄麗し（前書き）

お久しぶりで「ざわこ」ます、玖龍です。

テスト終わったー だから更新スピード、早まるかな?と思つたら  
大間違いなような気がします

それではよろしくお願ひします 三( - - )三

## 月隠し

若い神官の言葉は間違つていなかつた。

砂漠を照らす月は禍々しい紅色に色付き、顔を隠すかのように欠けていく。

それを超然として眺めていると、侍女にはつ倒された。

「な、何するのよつ！」

当たつてはいけません」

彼女はさすと緑の布を掛けてくる。そして自分も同じように緑の布を被つて、アシュリーナの側に控えた。

「…」れより一刻の間、月は顔を隠されます。それまでなるべくお早めに奥深くに戻られます」とを推奨します

神戸の方から起つてきた神官がそばに置けた。

わ、わかりました……行きましょう」「アシリード様」

静かに立つ土がある。

そして侍女と共に足早にこの場を去つた。

「アシュリーナ様、一刻の間はここで大人しくしていてくださいね。絶対ですよ」

「はーい……めんびくせ」

「何かおっしゃいましたか？」

「おおう……聞こえていたか。ほそつと言つたつもりなの。」

首を横に振ると、侍女は怪訝そうな顔をして広間から出て行った。

「そりでござるんでしょ。出できなさい」

後ろに向かつてそう声を投げる……するとやがてお出でてきたのはカイルだった。

「え、えへへ？こんばんは、姫さん」

なんとも情けない笑顔を浮かべた彼に一発蹴りを食らわそうかと思つたが止めた。

残りの伏兵の存在に気が付いたからだ。

「アンドレア、後ろは隠れてるけど頭が見えてる。ヨシュア、存在感がないからって、壁とは同化できないのよ。諦めなさい」「はあーっとため息をつく。勿論、30がらみのおっさんたち（しかも將軍職）がかくれんぼをしていることに向けてだ。伝わったかな？」

「ほら、僕たち姫さんが心配だったわけですよ。御存知ないかもしないんですけど」

「知るか、アホ」

シユンとしたカイルは完全に無視して、他の2人の方に向き直る。

「……つたく、私相手にかくれんぼなんて3万年早いわ。私を誰だと思つてゐる、かくれんぼのプロフェッショナルよ」

「いつからそんなの決ましたんですか？」

「今日からよ……じゃなくて、ここにいてくれて助かつたわ。私が危険を冒す必要が無くなつたもの……街の方は滞りないでしょうね？」

真剣な眼差しを向けると3人も姿勢を正す。

そしてアンドレアが答えた。

「勿論です。増強した兵士たちをアシュリーナ様の仰せの通り配置してます」

「OK。できれば無駄であればいいけどね……勿論いい意味で」

これはアシュリーナが前々から用意していた策ともいえない策。

3将軍の腕利きの部下たちを巡回兵士として一区画に10人程割いて、怪しい人影がないか見張る。

そして残りの兵士たちは千人隊長を先頭に、国の正規・不正規問わず、全ての入り口に配置。  
ラグナロク

これなら万が一“神々の黄昏”が襲つても何とか足止め程度なら出来る。

「そうなれば文句ないけどねえゝま、安心できて、兵士たちもわけわからず強くなれたし、一石二鳥だよね」

「カイル、少しほ口を慎んだらどうだ？」

「兄さん……ウザい（笑）」

兄弟喧嘩が勃発しそうだが、ここでは抑えてもらつてですね、できれば私の相手をしていただきたいんですけど……

そんな気配が全くないので諦め。

というわけで暇な1時間をぼーっと過ごしたアシュリーナだった。

**顛末（前書き）**

なんとか続きを書きました。  
。

一時間もすると円は元の姿に戻りつつあった。

禍々しい紅から輝かしい黄金へ変貌する。

アシュリーナはその様子を見ていた。

別に止められはしなかつたけど。そんなんでいいんかいっ！！

「ヨシュア、街に伝令を飛ばしなさい。状況報告を」「わかりました」

浅く低頭すると、ヨシュアは部屋から出て行く。

するとカイルが不平を言いだした。

兄は任務を任せられたのに、自分は何もない、と。  
めんどくさい奴だなあ……と思いつつ、指令を出す。

「あなたはここを見回りなさい……何にも異変がないか探してきて」

「OK」

親指立ててアシュリーナの方に腕を突き出す。そして足取り軽く、彼も部屋を出て行つた。

「アンドレアはあ……居残り」

「はい」

「よろしい……では私に付き合になさい」「やつと笑うとアシュリーナは立ち上がった。

浴室にたどり着くと、寝台の傍に立てかけてあつた白銀の剣を握る。

「この剣を<sup>ヒ</sup>えたあいつは来るのだろうか。

ヒリだけではない。そもそも『神々の黄昏<sup>ラグナロク</sup>』は来るのだろうか、この国を滅ぼしこ。

6年前、両親を殺したこと、5年前にアシュローナを暗殺（堂々と来てたがな）しようとしたことも、トステムのレンとソネア兄妹を傷つけたことも許されることではない。

だけどできれば和平をしたいと思つ。

できればこの剣を振るいたくない。戦いたくない。殺したくない。殺されたくない。

でも彼女らはいつかは来るのだろう。

やつらが「あの方」と呼ぶ、『マリア』は去り際に「いつか会えるといいわね」と言った。偶然トステムですれ違った時は、アシュローナの方を向いて含みのありそうな笑いを浮かべた。

彼女には交戦の意志があるのだろう。

そして彼女を盲信するヒリたちも来るのだろう……ここを滅ぼしに。

剣を手にしたまま沈黙している主君を心配してか、アンドレアは彼女に声をかけた。

卷之三

その声にはつとなる。

何でもないよ……多分

最後の部分は誰にも聞こえないぐらいぼそつと言った。

ホントはメチャケチャ心配なんだ

「ああ、行こうか……剣の稽古をつけてもらおうかなって  
『ええー……あ、なんでもないです。了解しました。じゃあ行き  
ましょうか（ニコツ）』

後ろを向いたすきに頭を殴つちやろか、と思つた。本氣で。

\* \* \* \* \*

「アシリーナ様は目が冴えてるでしょうけど、一応夜なんで1時間だけですよ」

一  
は  
し

両者、動きやすい軽装に着替えた後、広間で互いに向き合ひ、

「まず、『構え』を取つてみてください」

いつもやつてるんだがど

「何事も基本からです。基本に忠実にしてしょ?」

卷之三

剣を正面に構える。左足である右足を前にして、眼は敵を見据えるように。

するとアンドレアは出来のいい生徒を褒めるような声を出した。

「お見事…… 一つだけいいですか？」

「な、何よ……」

自然と上田遣いになる。

「気迫が足りません。いつも一人で練習してるでしょう?」

図星、ではある。しかしそれがなぜ 気迫が足りない につながるのか?

そんな思いを感じ取つたようにアンドレアが口を開いた。

「対象がないと相手を倒そうといつ氣が起きないでしょう。恥ずかしがつてたらいけませんよ」

「べ、別に恥ずかしがつてないもん」

「じゃあこれからは私が相手いたします。練習の時はぜひ私を呼んでくださいね」

笑顔で「誘つてくれ」と言われている。いついう場合ばかりつかれぱいいのか……?

一応反抗。

「じゃ、じゃあアンドレアはその 気迫 が足りてるの?み、見せてよ!」

彼は静かに頷くと、息を一つ、すうっと吸つた。

するとぞくつとするような感覚に襲われる。

思わず後ろを振り向く。しかし誰もいない。何もない。

ではどこから……前か。

その様子を見えていたアンドレアは微笑みながら剣を構える。

「わかりましたか?これが 気迫 です」

求めていないのにつらつらと説明しだす。

「これはですねえ、戦いにおいてすんごく役に立つんですよ。相手の力量を図るのには便利だし、逆に相手を委縮させることもできますしね。あ、最後のはもちろん訓練次第ですけ」

「アシュリーナ様」

「アシコアじゅなこ。どうだった？」  
ただ今戻ってきた様子のアシコアはここに風景の一瞬間をしかめた後、ほんと軽く咳をした後、報告をし始めた。

「特に異常は認められませんでした。以上です」

短っ！

まあ端的な説明ができる者ほど優秀であるらしいから……

「ああーかかった。あのヘンテココンの言ったことは間違つていたのね。もう名前なんか忘れてやる……とこつか忘れた」

「アシコリーナ様……」

なんとか記憶の悪さといつか……家臣としては「おござい」と言つてやつたくなる場面だ。が、言わない。後が怖そだから。

「じゃあ練習にもどり

「姫わーん……」

「今度は何だね？」

アンドレアはまた話を遮られ、アシコリーナは少しイライラしながら振り返る。

するとカイルがダッシュして入ってきていた。

「こ、兄さんもいたの……」

アシコアの顔を認めるときを青くさせた。

「なんだ、俺がいたら悪いのか

「い、いやそうじゃないけど……」

しばりへ皿つのを躊躇つたあと、ホントに皿へ口を開いた。

「ネルとシャイがいません」

顛末（後書き）

アンドレアが不憫です（作者ですが）

「な、なんですか……！？それは本当なの？」  
カイルの報告に愕然となる。

シャイとネルがいない……？そんなまさか……というか部屋の前に一応、見張りは立ておいたはずなのだが。するとカイルが悔しそうに言った。

「すみません……子供の足だから、そう遠くへは行つてないだろうと思って、辺りを探しましたが……いませんでした」

なんてこった。まさに灯台下暗しだ。  
街の方にばかり気を取られ過ぎた。

ここにだって子供はいたのだ。

2人の監視については不行き届きだったということか……。

ここで悔やんでも仕方がない。すぐ行動に移る。

「今からくまなく探す！えーっと……カイルは引き続き、王宮を。ヨシュアは王宮付近……というかあんたは待機でもいいよ。アンドレアはあたしと一緒に街を探す……いい？」

「了解です」

カイルとヨシュアは足早にこの場から去った。

……ヨシュアが一番辛いはずなのに、そんな表情はおぐびにも出さない。さすが、といつたところか。い

「アンドレア、あたしたちも行きましょうー！」

アンドレアは小さく頷く。

そして2人で走って廐の方へ行つた。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

「馬引けー！…陛下とアンドレア將軍の仰せだ。早くしろひ…」  
事態を知つた、王宮の人間達の怒号が行き交つ。

なんせ、將軍の子供が行方不明。

下つ端だらうが、なんだろうが、心配なのだ。

「陛下、『』用意ができました」

「ありがとう……アンドレアー行こう…」

ひらりと馬に跨がると、アンドレアと共に、街の方へ駆け出した。

捜索開始から30分が経つても、一向に見つかる気配はなかつた。

万が一、王宮乃至王宮付近で発見されたら、伝令を飛ばすよう命じてある。  
が、その肝心の伝令も来ない……つまり、まだ見つかっていない  
ということだ。

街に行つた可能性は低いが調べなければならぬ。

……と、そのとき、地面に何かが落ちているのを見つけた。

「…れは…」

金色に輝く髪飾り。たくさんのかたどつたものだった。

「シャイのものじゃない！」

今年の誕生日にアシュアに買つてもうつたと大はしゃぎしていた。  
もちろん、アシュリーナにも見せにきた。

よかつたね、と言つた記憶がある。

……この街にいる可能性がぐつと高まつた。

「アンドレアー！ シャイはここにいる可能性があるわ……」

「どうしてですか？」

「これ！ シャイが誕生日にアシュアに買つてもうつたってはしゃいでいたから……あの子、随分気に入つてたみたいで、いつも肌身離さず持つてたの」

「では……アシュリーナさまは向こうを、私はこっちを探しますよ！」

「わかった！ 気をつけて！」

そう言つて、髪飾りを拾つた場所から側道へと駆けて行つた。

「あ、あしゅつーなさまだ」

突然後ろから声をかけられる。

アンドレアとわかれて数分も経つてない。

タイミングを見計らつたかのよう、シャイが出てきた。

「シャイ！ 何してるのー？」

えへへ、とシャイは笑つ。

「ねるとおにじつにしてたの」

「こんな時間に？……嘘は止めなさいよ。お父さん、心配してゐ

わ

第一、ネルはどうに行つたのか？

そう思つたとき、シャイが首をかしげた。

「なんでもうそつていつのつそじやないのにいへ……あ、うれ。

あんじれあとおじこしてゐる」

ふうっとシャイが息を吐くと、薄ら笑いを浮かべた。

「相変わらずだね、女王様 疑い深いたらありやしない」

「あんた……誰よ」

「ええー、心外だなあ……しゃいだよ、しゃこー！」

いきなり幼児言葉に変化する。

「あしゅりーなさまがいたからでてきたのあ……みんなさがして  
るんでしょう？ あたし、おうちにかえる……うひやひや（笑）」

何がおかしいのかわからぬりだ。……でも、この行動に既視感があ  
る。

「まさか……あんたロザ？」

おっ、とシャイが顔を上げた。

「ぴんぽーん 大正解 正解者には……賞品ですっ！」

突然、シャイ……否、ロザがアシュリーナに向かつてダッシュし  
た。

## 検索2（前書き）

お久しぶりです……1か月ぶりですかね?  
お待たせしました

一方その頃、アンドレアもシャイ&amp;・ネルの搜索を続けていた。

「つたぐ、あいつらビ」に行つたんだ  
イライラとした口調で吐き捨てる。

彼らを見つけて、無事確保できたら、互いに合図 お互いに向けて鳩を飛ばす することになつてゐる。これは、民の眠りを妨げないよひこ、というアシュリーナの案だ。

向こうからも何も来ないので、まだ見つかっていないんだがつ。幼い子供の足で、どこまで行つたのか？

誘拐、という可能性もあるが、それは低いと考えられる。

あんな大人数の集まる王宮で、不審な行動をとると目立つこと必至。第一、彼らもバカではないので、大声を張り上げるだろう。それに……父親が父親だからな、とアンドレアはひそかに思つてゐる。王宮には王族、近親者にしか教えられない抜け道というもののがいくつか存在するので、それを使つた可能性が一番高い。

流石に砂漠には向かわないだろうから……ということでもしつけに来たのだが、人つ子一人いない。ましてや子供の姿など……

「あれは……？」

道端にうずくまるひとつ影。白い服が闇に浮かんでいる。

「おーい！そこで何をしているんだ？」

そう声をかけると、それがこっちを向いた……ネルだった。

「ネルっ！－みんな心配しているぞ－！」

「あんどれあああ～」

アンドレアの姿を認めたネルは、泣きながら彼に向かつて走つて行つた。

将軍だ、と心の中でつけ加えながら、それを受け止める。

「しゃいがいないの…ビックリつたかわからんないー……おひよーあーん…！」

「しつ……ほら泣くな」

子供の扱には決して慣れているとは言えないアンドレアが不器用にあやしてみると、だんだん泣き止んできた。

そして落ち着いた頃になると、アンドレアはネルに尋ねた。  
「どうしてこんなところにいるんだ？」

少し考え込んだ後、

「おねえちゃんがぼくをつれていったの」

「お姉ちゃん？」

「うん」

シャイのじとか……？だが、ネルがシャイのじを『お姉ちゃん』と言つたことは一度もない。

「その『お姉ちゃん』って……？」

にこりと笑つて答えた。

「かみのあおいおねえちゃんだよー！」

……誰？

わかつた、と一応答えてやり、アシュリーナに鳩を飛ばす……無事（？）ネルを回収したことだし。

「寝ておきなさい。今から戻るから」  
うん、と言つた後、ネルはあつ、と小さく頭を上げ、アンドレアを見上げた。

「あのね、おねえちゃんがいつてたけど、

۲۷

「それをつけてね、だつて」

？ますます、わからない謎な女だ。

「わかった。じゃあ、おやすみ」

「うん、ねやかまい」

少しすると、胸元ですーすーという心地よい寝息が聞こえてきた。これで一安心……としたいところが、依然シャイの行方が分からないのでそうはいかない。

アシュリーナに期待するだけだ。

★ ★

「正解者には賞品を」

そう言つて、シャイの体を借りた、ロザがダッシュしててきた。

۱۷۶

アシュリーナが交わすより早く、ロザは彼女に肉薄する。

攻撃される……！

そう思い、さすと皿をつぶつたが、その瞬間は訪れなかつた。

「？」

するとにんまりと笑顔を浮かべた、シャイの顔があつた。

「攻撃すると思った？あはは（笑）ここで攻撃しちゃいけないって言われてるんだよねえ」

ふふん とすまし顔で言うと、ロザは続けた。

「だから、『賞品』だって！いにものしかあげないから！」

そう言つてアシュリーナの耳元まで行く……いや、無理だった。身長が少しころか、だいぶ足りていな。

仕方なく、アシュリーナはしゃがんでやつた。

すると、今度こそはロザは耳元で囁いた。

「『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>は動いた そう言つて。せいぜい、準備するんだよ」

最後にニヤッと笑つた後、すうっと眼を閉じ、かくんと頬れた。

どうやら、ロザは去つたらしい。

「シャイ。シャーイー？」

「……ふえ？」

あ、あしゅりーなさまだあ、と呟いた後、彼女はまた眠りに落ちて行つた。

どうやら本物らしい。

ふうーっと息を吐くと、丁度彼女の肩に鳩が降り立つた。アンドレアのものだ。

どうやらネルは見つかつたらしく。

急いで馬に飛び乗ると、アシュリーナは王宮へ駆けて行つた。

## 戦乱の始まり

「伝令…伝令……これからせつてくるであろう、敵の襲来に備えろ！繰り返す」

ぐつたりとした（寝ているだけ）シャイとネルをお出迎え係の侍女に預け、アンドレアは夜の静寂に包まれた王宮に触れ回った。

帰り際にあの出来事を伝えると、それまでの歩調を上げ、馬を全力で駆けさせた。

着いたとたんに、これだ。模範的な將軍の姿だと感心しているアシュリーナだが、彼女とて、何もしていなければなかつた。さすがに、彼女は警護に当たるわけにはいかないが、先鋒の兵士を連れ、見回りをしている。怪しい奴ら 主に『神々の黄昏』を探しているのだ。

彼女らを一番知っているのはアシュリーナだからだ。

それを了解済みで、アンドレアも（護衛付きで）送り出してくれたのだった。

兵士A……いや、れつきとした名前はあるのだが、アシュリーナは名前を知らない。

気を取り直して、兵士Aはおもむろに口を開いた。

「陛下……お休みください。陛下は恐れながら……まだ子供ですのです……」

「対抗できないって？」

「い、いえ……しかしあ体に障りてはと思いまして」

そうですよ、と兵士B（こちらの名前も知らない）。

「ダングラジンの兵士は皆屈強なことで知られていますし、それを自負しております…そつ易々と倒されはしません…」

なんでやう断言できるのか?と聞いたかつたが、こつこつ観念に囚われている者は耳を貸さないと思つた。でもそれがモチベーシヨンの上昇につながることを考えると言及できぬいし……と、思い敢えて無視をした。

別にこの国の兵士が弱いわけじゃない。

自分はこの国の中なのだし、それは分かっている。

が、それを揺らがせるほど彼女らは強い……

「ふうー……ん、ちょっと疲れたかも」

ほら、言わんこいつちやない、とばかりに兵士A・Bその他諸々は駆け寄つた。

「陛下、お休みください……陛下が探しておられるのは女集団で間違いないですね?」

「…………ん。まあ、そんな感じかしら。じゃあ、お言葉に甘えて少し休ませてもいいわ」

そう言つと、兵士たちが近くにいた侍女を呼び寄せ、アシュリーナを部屋まで連れて行かせる。

……部屋について、大人しく休んでいるわけがないアシュリーナだった。

\* \* \* \* \*

「ふあー……こんな時間に敵は来るのか?」

叫き起された非番の兵士たちの台詞。

アンドレアからの伝令により、今日、警備にあたっていた兵士たちに起こされたのだつた。

中にはハッ当たりしているものまでいる。

ぞろぞろと起きだした兵士たちは、のろのろと防具を身に着け、皆が集まる大広間に歩き出した。

既に大人数の集まつてゐる大広間にはアンドレアのみならず、カイルとヨシュアの姿もあつた。

そろそろ全員が集まつたころになると、アンドレアが口を開いた。

「休憩中のところ起こして済まない。しかし今は緊急事態。しつかり目を覚まして望んでもらおう」

ざわざわとなる大広間。

それを制すように、さらに大声でアンドレアは続ける。

「これから近いうちに敵　『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>が襲来する。敵の数は不明。少なくとも君たちよりかは少ないだろう……しかし、君たちひとりひとりに匹敵するぐらいの実力はある。記憶がある者もいるだろうが、ヨシュア将軍と私も負傷した。こちらも痛手を負つたが、向こうには死者のだ。それに……奴らは女だ」

ざわめきが広がる。

無理もない。敵は女。しかも自慢の将軍を負傷させるほどの実力を持つ。恐怖が支配する

「今、警備兵を指定の場所に配置してある。主にこの王宮への入口だ。敵はそこから侵入するはずだ」

「それはあんまりなんじゃない?」

群衆の中から声がした。

「誰だつー?」

「敵は入り口から入ってくるとは限らないよ……僕みたいに」

## 青い髪

「誰だ、貴様……」

場違いな雰囲気を存分に出してゐる、謎の一々といつても大体どういう奴かは分かるが、とにかく謎の兵士に、アンドレアが静かに、しかし威圧的に声をかけた。

しかしそれに応えた様子もなく、謎の兵士はへラへラしながら、「怒らせた？あ、エラにすいませんな～あはは（笑）」

「……取り押さえろ」

ヨシュアが低い声で命じると、一斉にまわりの兵士達が殺到した。「貴様、誰に向かつて口を利用してると思つてんのかつ！…」

「ふざけたことしやがつて……！」

思い思いの言葉を口にし、折り重なる兵士達。

そこでヨシュアが待つたをかけ、静かに歩み寄る。すると兵士達は、ひとり、またひとりと脇に避けていった。

「いたた～……なにしてくれはるん。痛いやない」

「…！」

そこには先ほどの兵士が、頭を抑えながら立っていた。どうやつて抜け出したのかは不明だ。明らかに無理だらうに……。

ふと、頭に目を向ける。

そこには丁寧に梳かれた、流れのような青い髪があつた。それを

ポニーtail状にまとめている。

「青い髪……あつ！」

アンドレアは独白した。

「……」  
「ネルを捕まえたときに聞きました、実行犯の特徴——それは『青い髪のお姉ちゃん』だった。

田の前の人も同じ青い髪。そして色白で骨骼好からも女性と見れる。  
誰がどう見ても、犯人だった。

「貴様……子供ふたりを連れ出した奴か……？」

「んー、そうやね。そつとも言えるな」

「そ、うか……動くなよ、女」

女、といふ言葉にピクッと反応する。

そしてくつくつと笑い出した。

「女?……ちやうで。俺は……男や」

すつと上着を脱ぐ。色白の肌が露になり、薄く、平坦な胸が覗く。

……男だった。

そして続ける。

「まあ、俺は中世的な顔やつて、よつ言われるけどな。背もひつ  
ちゃいし（そうでもない）。こんなでこんな髪やつたら……血慢  
の将軍さんも間違えるんやね」

髪を恨みがましそうに弄りながら、これ切つたらかと「ツツツツ」と言  
つていた。

「でもなあ……髪伸ばすんにも意味があるんやでっくつとつた  
ら意味ないんやけどな」

そう言つて髪紐を解いた。髪がぱさつと広がる。

「首守るんやつて。昔からの知恵や。意味分からんけどな（笑）」  
何がおかしいのかわからないがケラケラと笑う。  
周りにいた兵士達は気味悪がつて引いていた。

アシュアが命ずる。すると、兵士達が口を番えた。

「わつと男は小さく声を上げた。そろそろと両手を上げる。

「戦ひ気はないんや……ホンマや。あんな化けもんみたいなお嬢ちゃんの余興に付き合ひなんて嫌やうつたんや」

その言葉に嘘は見受けられなかつた。

本氣で情やめているし、少し震えている。

強気の口調も見る影がなかつた。

「しよ、将軍……」

口を番えた兵士達がちらりとアシュアの方を見る。

「……氣を抜くな。隙を見せるな。油断すれば落ちるや」

男を鋭い眼差しで見据えたまま言ひ。

渋々ながら兵士達は少し口を下ろした後、その動向を観察するように男を見た。

向ひいつも恐怖にひきつけられた顔をしてくる。

数分の静けさ。

「アンドレアはいるか……つていた」

その静けさを破ったのはアシュリーナだった。

青い髪（後書き）

友達に「アシユリーナってかなり自由人だね」と言われました＝ 3

「ここにいたのか、アンドレア。結構探したぞ」  
場内の緊張感を軽く無視して、アシュリーナが登場した。

声を掛けられた本人　アンドレアは血の気が引く思いをした。  
いや、実際顔は真っ青になつた。

(多少気が弱いとはいえ、一応) 敵が眼前にいるにもかかわらず、  
狙われているアシュリーナそのものが堂々と入ってきたからだ。し  
かも事態に気付いている様子はない。

「あれが……お嬢ちゃんの敵か……！」

碧髪の青年は薄く笑うと突然叫んだ。

「フイラー！ ずらかるぞ！」

そう叫ぶと、胸元から連結型のスティックを取り出した。慣れた  
手つきで、それを素早く組み立てると、低い位置でそれを振り回し  
た。

彼の周囲にいた兵士たちは、当然足を掬われて転倒する。  
そして跳躍　　着地したところには見知らぬ人物がいた。

青年と同じような背格好の彫刻のような女性。彼とそっくりだっ  
た。

その白い腕にはもがくアシュリーナがいた。

「は、離せ……！」

「つるさこいつ……黙つとき！」

怜俐な美貌からは予想できない暴言にアシュリーナを含めた、場内の全員が睡然とした。

沈黙を是と取ったのか、彼女はそのままフンと鼻を鳴らし、そっぽを向いてしまった。

「兄さん、帰ろう！疲れた！」

「……じゃ、そういうことで」

「待て、コラ」「

アシュリーナが自分を捕えている腕にがぶりと噛みつく。腕の主は悲鳴を上げながら、アシュリーナを振り落つた。その隙にアシュリーナは、アンドレアの元へと駆けて行つた。

「……フィ」

「今のは兄さんが悪い」

「な、なんでやつ！？」

チツと舌打ちをする。

「……グズグズしてるあんたが悪いんやああああーー！」

……大量の敵の目の前で普通に兄妹喧嘩を始めてしまった闖入者。

「な、なんだこいつら……」

逆にダンゴラジュ陣営の方が引いてしまつ……。

「こんな時にこんなところで兄妹喧嘩とは……そんなことしていいのか……？」

アシュリーナの言葉に、2人は顔を見合わせる。

そして、

「確かに喧嘩してる場合じゃないわ……あんたいい」と言つたー

「敵を褒めてどうする、フィラ」

「そりやそうだ！ サイク偉い！！」

女性 フィラが兄、サイクに向かってビシッと指差す。

「何、漫才しに来たの？」

今なら捕縛命令を出しても氣づかなかそり……

アシュリーナがため息をついたと同時に、ヨシュアがボソッと命じた。

「とりあえず捕縛」

それを聞いた瞬間、一斉に大量の兵士たちがわあーっと叫びながら走つて行つた。

それまで喧嘩を続けていた2人が、冷たい微笑を浮かべる。

「「甘いな」」

瞬間にそれぞれの武器を取り出す。

サイクは連結型のスティック。フィラは透明の鞭。

そして示し合わせたように同時に振る

2つともリー・チが長いため、先頭集団を攻撃するのにわけなかつた。

足元をすくわれた兵士たちが転び、そこに後続の兵士が来てドミノ倒しになつた。

「……おい」

『シユアがチッと舌打ちする。そして腰の剣の柄に手をかけたとき

「気に入った……みんなのこと気に入ったよ。……そやから、い  
いこと教えてげるわ」

今度は自然に微笑んで、サイクは言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3520q/>

Legend of Girl ~少女の伝説~

2011年10月11日20時48分発行